

台湾における日本語ディベート教育の実践研究

井上, 奈良彦
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/1805813>

出版情報：財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援事業報告書。2006, pp.1-, 2007-03-31. 財団法人交流協会(公益財団法人日本台湾交流協会)

バージョン：

権利関係：

2006 年度 財団法人交流協会日台交流センター 日台研究支援事業報告書

台湾における日本語ディベート教育の実践研究

九州大学大学院言語文化研究院

井上奈良彦

派遣期間（2006 年 8 月 1 日～9 月 28 日）

2007 年 3 月

財団法人 交流協会

目次

	ページ
1. 序論.....	2
2. 台湾におけるディベート教育の現状.....	2
3. 日本におけるディベート活動との比較.....	6
4. 日本のディベート教育からの教訓.....	9
5. 今後への課題・提言.....	11
参考資料一覧.....	15
付録1 台湾における教育ディベートに関する質問紙調査.....	18
付録2 研究活動の概要.....	23
付録3 「ディベート」のすすめ—問題を分析し、発見した答を伝えていく過程 (2006年9月講演会用スライドとメモの改訂版)	25
付録4 ディベート入門 (日本語テキスト)	39
付録5 日本語教育と「ディベート」—外国語における議論法や論理思考の指導 (ディベート授業実践例)	51
付録6 ディベート講座配布資料.....	69
付録7 「日本におけるディベートの方法—ESSにおけるアカデミック・ディベート」.....	75

1. 序論

この研究の目的は台湾において、日本語教育の中でディベートがどのように位置づけられるかについて、現状を分析し、今後の指導方法などへの提言を行うことにある。この報告書においては以下の報告を行う。（１）台湾における教育ディベート活動の現状を紹介する。（２）日本語教育におけるディベート導入の功罪を日本におけるディベート教育と比較しながら分析し、提言を行う。（３）プロジェクト期間中に行った調査活動や講習会等を報告する。

2. 台湾におけるディベート教育の現状

台湾における日本語ディベートを考察するために日本語だけではなく、国語（中国語）や英語によるディベートについても若干触れる。

2.1. 台湾における日本語ディベート教育

日本語教育におけるディベートについて、「全国大学生ディベート大会」を中心に校内大会や授業での取り組みについても触れる。

2.1.1. 全国ディベート大会

台湾における日本語ディベートについて特筆すべきは、交流協会主催の全国大学生日本語ディベート大会の存在である。2004 年度に第 1 回大会が行われて以来、2006 年度の第 3 回大会まで、10 数の高等教育機関が参加している。詳細は交流協会の日本語センターのホームページで見ることができる（<http://www.koryu.or.jp/nihongo/>）。各大会の参加校数と論題は以下のとおりである。

第 1 回大会 14 校 「台湾は公営ギャンブルを合法化すべきである」

第 2 回大会 16 校 「台湾は炭素税を導入すべきである」

第 3 回大会 11 校 12 チーム 「台湾は小学校の教育において注音字母を廃止し漢語ピンインを採用すべきである」

交流協会大会の特徴を簡単にまとめておく。形式や大会規則は、日本の中高生の日本語大会である通称「ディベート甲子園」（全国教室ディベート連盟主催 全国中学・高校ディベート選手権）に基づいている。事前に発表される政策論題を用いた 1 立論・2 反駁の形式である。但し、規則の詳細などについては下で述べる大会の実行委員会で検討が重ねられた上で修正（たとえば、試合中発言をしない「アドバイザー」学生の出場など）を加えて採用されている。スピーチ等（「ディベート甲子園同様「ステージ」と呼ばれている）の時間は以下のとおりである。

肯定側立論 6 分

否定側質疑 3 分

否定側立論 6 分

肯定側質疑 3 分

否定側第1反駁 4分

肯定側第1反駁 4分

否定側第2反駁 4分

肯定側第2反駁 4分

（「全国大学生日本語ディベート大会ルール 細則」（2005）より。ただし準備時間の記載は省略。）

出場チームは、日本語関係の専攻がある大学等の高等教育機関の学生からなり、ディベート部などの課外活動ではなく、正課の授業などから選抜されたメンバーで構成されている。台湾において日本語関係の専攻を持つ高等教育機関は40強であるので（堀越、2006）、3割程度の学校が参加している。

運営は交流協会の日本語専門家や大学等の日本語教員の有志が中心になって行われている。「全国大学生日本語ディベート大会」実行委員会のメンバーは日本人教員と留学経験がある台湾の教員を中心に20名以上が活動している。ディベートの研究教育を専門としたり自身がディベート大会参加などの経験がある教員はほとんどなく、ディベートの方法などについては日本の大学ESS（英語クラブ）出身者が数名指導的役割を担っている。

この実行委員会のメンバーの間では大会規則の制定や論題の選定のために会合が持たれ、さらに電子メールなどで活発な議論が行われている。たとえば、大会規則については2005年にはスピーチ中に図表など視覚補助の提示を認めるかどうかでかなりの議論が行われた。最終的には大会規則で限定的に認められている。論題については、候補が公募され、どのような議論ができるかなどの情報交換が行われ最終候補が決められる。2006年9月の論題の最終決定の会議では、同年度の大会論題となった漢語ピンインの命題についてその文案が多方面から検討され、最終案が決められた。また、中心的なメンバーによって何度も講習会が開かれ、学生向け、指導者向け、審判向けなどのものがある。

大会はまた、交流協会（日本の実質上の外交機関）、特にその日本語センターの支援を受け、台湾の教育部（文部省）の指導も受けている。企業の後援も受け、優勝チームには日本往復の航空券が副賞として提供される、というように、かなり大掛かりに行われている。参加者の動機付けを強化するための「ハレ」の舞台を提供している。一方、各大学学科の名誉や面子がかかっているとも言え、大会運営や規則・論題についての準備段階での議論は、相当神経質な対応を必要としているようである。

大会実行委員会は熱心な教員が集まっているものの、組織としての脆弱性も認識されている。委員会は、台湾の日本語文学会や日本語教育学会といった既存の関係学会の一部ではなく、独立した組織である。ディベートの実践活動のみを行う上では、既存の組織に縛られない利点があり、その必要があると考えられている。しかしながら、学歴（大学教員の多くが博士号を保持）や研究が重視される（特に昇進において）台湾の大学において、博士号を持たず「講師」として語学教育を担当する日本人教員の身分は不安定であり、学内外における政治的な力も限定されるようである。研究を優先する国立大学の参加がないのは、教員への有言、無言の圧力も推測される。課外活動の指導、特にディベート指導は多大な時間と労力が費やされるので、そのような指導よりも研究成果（発表論文）を増やすことが求められるようである。

学生に大きな「ハレ」の舞台を提供するような現在の大会方針を継続していくのは容易なことではないと思われる。特に、交流協会の後ろ盾を失うと、大会方針の見直しや開催自体の是非が問われることにもなりそうである。一方、交流協会も参加校の数が増えなければ、日本語普及活動の一つとしての存在意義や、費用対効果を考えることも生じるのであろう。

2.1.2. 校内ディベート大会

日本語学科で校内ディベート大会を開催している大学もある。いくつか例を挙げる。

私立の名門大学で、台湾で唯一日本語系の博士課程を持つ東呉大学（台北市）では、毎年クラス対抗の「日語辯論比賽」（日本語ディベート大会）が開催され、報告書が作成されている（東呉大学日本語文学系、2005）。年度や学年によって試合形式などに変化があるが、2005 年度大会では全国大会に近い次のような形式が用いられている。

肯定側立論	5 分
否定側から質疑	4 分
否定側立論	5 分
肯定側から質疑	4 分
否定側反駁と結論（1）	3 分
肯定側反駁と結論（1）	3 分
否定側反駁と結論（2）	3 分
肯定側反駁と結論（2）	3 分

（各スピーチ・質疑の間には 2 分間の準備時間がある。2、3 年生の試合では立論と質疑はそれぞれ 2 名で担当し、4、5 年生の試合では 1 人で担当する）

論題は次のようなものである。

「英語検定に合格しなければ卒業できない。是か、非か。」（2005 年度 2 年生用）

「現金カードは廃止すべきである。是か、非か」（2005 年度 3 年生用）

「台湾でパパラッチを法規制するべきである」（2005 年度 4、5 年生用）

淡江大学（北部の私立大学）でも日本語関係の学科、大学院の学内対抗ディベート大会が行われている（淡江大学、2002）

南部の高雄市にある文藻外語学院では、外国語（英語と日本語）によるディベート活動が行われており、日本語による学校主宰の大会がある。基本的には交流協会主催の全国大会の形式を踏襲して行われている。2006 年度の大会の論題は「江戸川コナンは、自分が工藤新一であることを毛利蘭に言うべきである。是か非か。」であった。（文藻日本語学科、2006）

2.1.3. 教室活動

会話クラスとして討議、討論（ディスカッション、ディベート）を取り入れることはかなりある。正式の試合形式の導入は限られているだろうが、広く討論活動が教室で用いられることはう

かがえる（付録1のアンケート結果参照。児島（2003）の日本人教師への調査でも4割程度の教師がなんらかのディスカッション、ディベート活動を取り入れている）。

中部の名門私立大学である、東海大学における取り組みは特筆に価する。大学の方針で外国語科目等も大学生が身に付ける広く教養科目としての色彩が濃く、日本語学科においても「多元文化論」というような科目が設定されていて、その中でディベートを導入している（松尾、2006a）。また、「日語討論表現」というディベートのクラスも提供されている（松尾、2006b）。

2.2. 台湾におけるディベート教育（日本語以外）

台湾における日本語以外による教育ディベートの活動については、游（2004）に詳しいが、加えて筆者が調査期間中の聞き取りによって得た情報や Web の情報から簡単にまとめておく。

日本語以外で行われているディベートは、中国語（北京語）と英語に大別される。中国語によるディベートは小学校から教室で導入され、授業中に行われるとともに、「社団」とよばれる課外活動としてディベート部（「辯論社」、「正言社」、「演辯社」、「健言社」、など様々な名称がある）が存在する。中高でも大学でも学校対抗の大会も行われている。現在の形式の主流は、オレゴン・スタイル（「奥瑞岡式」または「奥瑞崗式」と表記）と呼ばれる、立論、尋問、反駁・結論の各スピーチ等から成るものである。この形式はアメリカの Oregon Plan of Debating を起源とし、現在日本やアメリカの教育ディベートにおける準備型のポリシー・ディベートも基本的にはこの流れにある。スピーチの順序、回数、長さは種々の変異形があり、現在台湾で主流となっているのは、「五・五・四制」や「三・三・三制」と呼ばれる以下のような形式である。

- (1) 正方第一位隊員申論，反方第二位隊員質詢正方第一位隊員。（立論と質疑）
- (2) 反方第一位隊員申論，正方第三位隊員質詢反方第一位隊員。（立論と質疑）
- (3) 正方第二位隊員申論，反方第三位隊員質詢正方第二位隊員。（立論と質疑）
- (4) 反方第二位隊員申論，正方第一位隊員質詢反方第二位隊員。（立論と質疑）
- (5) 正方第三位隊員申論，反方第一位隊員質詢正方第三位隊員。（立論と質疑）
- (6) 反方第三位隊員申論，正方第二位隊員質詢反方第三位隊員。（立論と質疑）
- (7) 反方結辯。（反駁・結論）
- (8) 正方結辯。（反駁・結論）

つまり、1チーム3人で、肯定、否定の順に立論を3回ずつ行い、それぞれの後に相手側からの尋問がある。最後に反駁・結論のスピーチがある。「五・五・四制」や「三・三・三制」と呼ばれるのは、立論、質疑、結論の各1回の分数を表している。

台湾、シンガポール、中国大陸などを含む中華圏で行われる国際大会ではシンガポール方式（「新加坡式」）が用いられる。この形式は、双方から立論が交互に行われた後、反駁は両チーム4分ずつの持ち時間制で交互に発言する。その後、結論の時間がある。

また、一部で「國會式」と呼ばれる即興型のパラメンタリー・ディベートも紹介されている。

英語におけるディベートは、即興型のパラメンタリー・ディベートが教室でも大会でも多いようであるが、大学生の全国大会が組織されたりはしていない。国際大会への参加も限られている。

以上のような状況であるが、実際にどの程度ディベート活動、特に正式の試合形式などが理解されているかは疑問である。アンケートの結果、日本語教員や游梓翔博士（世新大學副教授でディベートの実践、研究活動にも深くかかわっている）からの聞き取りに基づいて推測すると、日本語ディベートを始めるにあたって、学生教員とも試合形式のディベート（特にオレゴン式）をすでに十分理解しているとは言えず、日本語教育の中でディベートそのものについても学生に教える必要がある。教員についても、主にディベートなどの指導に当たる日本人教員は一部の ESS 出身者や今後ある程度登場してくると考えられるディベート甲子園などの経験者を除けば、ディベートについて教員自身が学ぶ必要があるという状態である。

3. 日本におけるディベート活動との比較

台湾における日本語ディベート活動を日本におけるディベート活動と比較する際には、外国語によるディベートとして英語ディベートと比較する観点と、目標言語のディベート活動として日本語ディベートと比較する観点がある。台湾における日本語ディベートは外国語としての日本語で行われているため、同様の活動として日本における英語ディベートは研究上も実践上も参考になるであろう。

3.1. 第 1 外国語か第 2 外国語か

大きな違いとしては、日本における英語は第 1 外国語であるが、台湾における日本語は第 2 外国語であるという点がある。ただし、外国語の運用能力を考えた場合、台湾の大学生の日本語能力はかなり高く、特にディベート大会に参加する学生を考えると日本の英語ディベート大会の参加者の英語力と大きな違いはないと考えられる。教室においては、当然台湾の大学の初級クラスでの導入は困難であるが、上級のクラスになれば日本の大学の英語教室に導入するのと大きな差はないであろう。もっとも、高等学校でも第 2 外国語として日本語を学習している生徒もかなりあるので、大学 1 年生でもディベートができる場合もある。

普及範囲という観点からは、日本の英語教育では英語学科などに限らず 1、2 年生の英語科目（一般教養、全学教育、などと呼ばれる科目群に含まれる）においてもディベートが導入される場合もあり、大会に出場する課外活動（ESS）への参加者も学部や学科を問わず広がっている。一方、台湾の日本語ディベートは教室活動でも課外活動（大会参加）でもほとんどが日本語学科の学生と考えてよさそうである。

言語の違いは、日本語と英語の言語としての世界的な普及度や使用の状況とかかわってくる。英語は実質上の世界共通語として用いられ、情報の授受や交渉など議論能力が発揮される使用場面が現実に多く存在する。ディベート訓練はそういった「実用性の高い」議論能力を訓練する方法と位置づけることができる。一方、日本語はそのような普及はないので、日本・日本語関係の職業についたり日本へ留学したりしない限りは日本語における議論能力を発揮できる場は限られている。また、日本語ディベート訓練も特有の必要性というものは強く認識されないであろう。

3.2. ディベートの試合形式

ディベートの形式については、現在の台湾の日本語ディベートは、公式の大会としては交流協会の全国大学生大会が日本のディベート甲子園の形式を踏襲しており、論題が事前に発表され資料やスピーチを準備するいわゆる「アカデミック・ポリシー・ディベート」が用いられている。即興型の「パーラメンタリー・ディベート」の英語での普及も限定されており、ディベート教育に熱心な日本語教師が交流協会等が主催する講習会などを通じてディベートを学んでいることと、中国語によるディベートも主流がアメリカの「アカデミック・ポリシー・ディベート」スタイルの基となる「オレゴン・スタイル」であることを考慮すると、試合形式としてはこのような形式が主流であると考えられる。

一方、日本の大学生の英語ディベートは第2次世界大戦後アメリカのアカデミック・ディベート（ポリシーディベート、オレゴン・スタイル）を ESS が導入し、1990 年ごろまではこれがほぼ唯一の形式であった。ところが、1990 年代から即興型（イギリス型）のパーラメンタリー・ディベートが導入され、現在ではかなりの勢力になっている。依然としてポリシー・ディベートのみを行う ESS も多いが、両方のスタイルを採用するところもあれば、パーラメンタリー・ディベートのみに活動に移した ESS もある。大学の英語授業においては、さまざまな形式が用いられるが、比較的形式を整えた試合を行う場合は、ESS 系のアカデミック・ポリシー・ディベート（アメリカの学校で行われるものや教科書から直接取り入れている教員も含め）と日本語のディベート甲子園の形式の影響を受けたものが多いと考えられる。

3.3. ディベートへの参加形態、目的

ディベート大会への出場チームの母体（参加形態）は、台湾においては、日本語学科を中心として授業の一環（発展形）として校内校外の大会へ出場する場合が多い。日本の ESS に相当するような日本語クラブというものはなく、日本語学科の課外活動としてさまざまな文化活動やスピーチ、ディベートが行われている。スピーチやディベートの活動では日本語教師（特に日本語母語話者）が指導に当たっていることが多い。

一方、日本の英語ディベートは主要な大会に参加するようなチームはほとんどすべて ESS などの英語クラブの中に作られている。多くは学生がのみで行う活動であり、顧問教員は通常形式的であり、実質的な指導を行っていない場合が多い。指導者は ESS の上級生、卒業生が中心である。かつては英語母語話者の教員が指導する場合も相当あったと考えられるが、現在ではその役割は限られている。ディベートチーム（広く ESS）のメンバーは必ずしも英語学科の学生ではなく、その学部や専攻は多岐にわたる。

この参加形態の特徴はいくつかの重要な意味合いを含んでいる。

ディベートの目的について、日本語学習か議論法学習かということは大きな問題である。日本語学科を中心にディベート活動が行われる場合、その目的は日本語習得ということが第一義的になる。少なくとも、多くの日本語教員や学科長などの管理者にとっては、ディベート活動が日本語習得に有効なのかという疑問がある。ここで問題になるのは、議論の内容を重視するか日本語の正確さや流暢さを重視するかということである。たとえば、試合の判定において、一方のチームは日本語は正確で流暢であるという意味で優れたスピーチをしていた。もう一方のチームは日本語の正確さや流暢さは劣るが、議論の内容は優れていた。この場合、ディベート教育にとって

より本質的な議論の内容を重視した場合、ディベートについて十分に理解していない日本語教師や学科主任が試合を見学して失望するかもしれない。

日本語による日本社会におけるコミュニケーションスタイルとディベートにおけるコミュニケーションスタイルというものもある必要がある。時間制限があり、ゲームとしての枠組みの中で行われるディベートの試合では、相手の議論に対して、「それは違います」と直接的に否定を表明することは奨励される。スピーチでは相手に直接ではなく、聴衆や審査員に対して「今の肯定チームの〇〇という主張は間違っています」というような発言になるが、反対尋問においては、直接相手に「先ほどの〇〇という点は自己矛盾ですね」というような内容を質問していく場合がある。現実の社会でのコミュニケーションでそのような言い方はしないとすると、ディベートで行われている表現方法を習得した場合、実際のコミュニケーションに有用なのかかえって弊害があるのか、という疑問が生じるだろう。

さらに、文化的アイデンティティーやクリティカル応用言語学 (Pennycook) のような立場から考えると、ディベートで用いられるようなコミュニケーション・パターン、談話構造、説得方法、意思決定方法などは、外国語学習者にとって自文化とは異なる型を押し付けられているのではないか、という問題がある。特に、日本語ディベートの場合、日本社会においてアメリカの教育ディベートのスタイルを導入してそれ自体が押し付けられたものという問題があり、それを微妙に土着化したディベート甲子園や ESS のディベートのスタイルを、今度は転じて外国語として日本語を学ぶ学習者に押し付けていないのかという二重の問題となる。(このような問題については、たとえば、野呂・山下 (2001) 参照。)

学習者の関心、動機については、日本語学科を中心とする台湾の日本語ディベートの場合、やはり日本語学習、日本文化への関心が中心となるだろう。一方、日本の ESS においては、1990 年代前半ぐらいまでは、英語学習という一面とともに、大学（特に入学後すぐの教養課程）が十分に提供していなかった相互作用的な知的活動を提供していたという面がある。そのため、政治経済の論題などについて図書館にこもって資料調査をし、夜遅くまで部室や下宿・アパートで作戦を練る（知的議論を積み重ねる）ということが行われた。このことは学生が複雑な政策論題を取り上げ、アメリカの NDT (National Debate Tournament) を中心とする戦術の移入であったといえ、ディベート教育や議論法についての理論的実践的学習が進んだ背景にある。同時に、ディベートのスタイルは先鋭化し他の英語学習者 (ESS の他の活動をする部員も含め) から乖離していくことにもなった (付録 7 の井上論文の要約参照)。台湾の日本語ディベートがこのような方向に進むことはあまり考えられない。それは、日本語学科が中心であるということと、スポーツ根性もそのような体育会系運動部の「ノリ」で試合に臨むような課外活動が盛んではないことによる。実は、日本の場合も、ESS でポリシーディベートが人気を失ってきたのは、それ自身の先鋭化という問題と大学の授業の変化とともに、学生気質が変化し特定のクラブ活動に多大な時間と労力を割くということがなくなってきたことも大きいであろう。

台湾の日本語ディベートが、教員指導の下に進められているのは、適切な教育的配慮・指導が行われ、大学等の支援も得やすいという利点がある。一方、学生の自発的な活動として育ちにくいという状況である。教員の負担や懸念されるとともに、教員が指導できない学校ではディベート活動が存在できないという問題がある。

3.4. 日本のディベート甲子園との比較（文化伝播の問題）

台湾の日本語ディベート大会は試合形式などについて、直接はディベート甲子園の形式を移植しているわけであるが、その起源を考えると、興味深い関係にある。もともとともアメリカのディベートが中世の大学のラテン語による学術討論（博士論文の口頭試問など）とイギリスの Oxford Union などの学生の課外活動の伝統を受け継いで、いわゆるアカデミック・ディベート（教育ディベート）が制度化され、ポリシーディベートに発展していく。それが日本へ移入され土着化していく過程で何度かアメリカからの影響を受け、ESS のディベートとして発達する。さらにそこから日本語によるディベート（教室ディベート、ディベート甲子園）のような形態が現れる。さらに、そのディベート甲子園や ESS のディベートの伝統が直接、間接（ディベート甲子園を通じて）台湾に渡るわけである。また、台湾においても、アメリカのディベートはオレゴン・スタイルという名のもとに中国語でのディベートとして移入され、土着化（奥瑞岡式、奥瑞崗式）となる。日本語のディベートは主としては日本のディベートを経由して伝わっているが、台湾の学生や教員にとっては、オレゴン式からの移入と考えられる面もあるだろう。（このような一種の「文化」の伝播の問題自体興味深いが、本稿ではこれ以上扱わない。アメリカ内での大学と高校のディベートの伝播の関係は Fine（2001）参照。）

4. 日本のディベート教育からの教訓

以上のような台湾と日本のディベートの状況を踏まえ、台湾のディベートは日本のディベートからどのような教訓を得、それを生かして発展につなげたり、失敗を繰り返さないようにできるだろうか。

1950 年代から 1990 年代までの日本の ESS におけるディベートの変遷を簡単にまとめると、当初、準備型の政策論題を用いたディベートが、議論の内容と話し方両方を含めた「説得力」というようなものを審査基準としていたものが、徐々に議論重視（話し方軽視）となり、その過程で「ディベートを知らない」英語教師（母語話者も日本語話者も）は排除されていった。アメリカの NDT 系のディベート（それ自体が 1970 年代以降大きく変化した）の影響の下に、学生を中心とするディベートコミュニティの中で政策論争の戦術はへの関心が高まり、独自のスタイル「アカデミック・ディベート」（英語の Academic Debate より狭義に NDT 系の Policy Debate を指す）作っていく。このスタイルが英語学習を目的に入学してくる大学生をつないでいくことができず、ディベート活動自体が衰退したり、1990 年代以降紹介された即興型のパラメンタリーディベートが人気を得てくる。

ESS のディベートは学生に貴重な教育的、知的活動を提供してきたことはまず評価したい。学生が様々な社会の問題を分析し、文献収集を行い、議論を戦わせる、というのはすばらしい活動である。さらにそれを外国語で行う。また、大学 ESS ではこのような活動がほぼ学生のみで行われていることも賞賛すべきである。お互いが切磋琢磨し、先輩が後輩を指導し、地域でさらに全国的に活動を組織し全国大会までほぼ学生のみで運営してきた。しかしそこには落とし穴もあった。

ここで、私は、中庸な政策ディベートの振興を提唱したい。論題を事前に設定する準備型による資料調査や議論の分析と話し方（デリバリー）双方を重視し、外国語教育にも役立てるとい

ものである。これはまさに、現在の台湾の日本語ディベート活動が目指しているところであり、正しい方向だと考える。また、日本の一部の英語ディベートや、ディベート甲子園を主催する教室ディベートの方向性でもあるだろう。アメリカの一部のポリシーディベートもこの方向である。

問題は、中庸なままで続けることの難しさにある。一つは、議論内容重視を迫及すれば、話し方（デリバリー）は目前の聴衆である審査員が理解すればいい、ということになる。ディベートを指導している審査員は自分が理解できる議論を一般の人は理解できるのはこの程度の話し方である、という基準を設けて審査するというのは難しく、恣意的であるという非難を受ける。一見明白な議論の成立という議論評価の基準の設定においても、そのような基準を設定することの難しさや、恣意的という批判を受ける懸念がある。

この議論法における教育的配慮と「公平な」勝負のための恣意性の兼ね合いの中で、ESS のディベートは恣意性を排除しようとする単純な手段として白紙状態の審査員というパラダイム（タブラ・ラサ、Tabula Rasa）に安易に流れ、話し方（英語）がおかしくても審査員が聞き取れば（書き取れば）いい、論証はとにかく何か引用証拠があればいい、相手が反論しなければ勝ち、多くの議論を早口で読み上げ（散弾銃戦法）相手を取りこぼす（落とす）ことを期待する、という悪弊を生んだ。日本語教員が指導者としてつく台湾の日本語ディベートにおいてこのような極端は生じないと思うが、競技ディベートに内在する問題点として認識しておきたい。

競技ディベートにおいて勝敗が伴うことは常に勝利至上主義の問題を孕んでいる。問題への代案として登場する、一般人にもわかるコミュニケーションスタイルを目指すといわれたアメリカでの CEDA（Cross-Examination Debate Association）のようなスタイルや、パラメンタリーディベートも、ディベート甲子園、等等のスタイルもある一定のコミュニティを形成してその中で勝敗を決する試合があると、そのコミュニティの中だけで機能する規範が出来上がっていく。

典型的には（必ずしも本質的ではないが表面的には顕著な）スピーチの速度（早口）という問題を考えて見ても、当初日常的な速度でスピーチをしていたとしても、スピーチに時間制限があり、時間内に提出された議論で勝敗が決せられ、勝敗はスピーチを聞き取った審査員によって出される、という枠組みの中では、活動を重ねていくうちに早口になるのは避けられない。ある程度の早口というのは有能なスピーチとして説得性を増すであろうが、単純に分速何語までが効果的な速度でそこからは早すぎるというような絶対的な基準は作れない。そこであえて、恣意的と非難されるかもしれないがこの程度までは許すという中庸な基準の導入が求められる。

このようにある程度公平性を犠牲にしても中庸を求めた場合、公平性の補償をどこで行うかというと、試合機会の増加である、と私は考えている。ディベートにおける決定から完全に恣意性を排除することは、その活動の本質からも不可能である。一方、一つの試合の敗戦で大会から去って行ったりディベート・シーズンが終わってしまうような状況では、一試合の勝敗の比重が高く、そこに公平性を求める圧力は学生からも指導教員からも高くなる。これに対する方策は、一つには、大会内での予選試合の増加である。台湾の全国大会も本戦において勝ち残り式のトーナメントを最初から行うのではなく、複数の予選試合を経て決勝トーナメントに進む方式になったことは前進である。

もう一つの試合の増加は、全国大会以外の小さな大会や学校間の交流試合また校内大会によって、参加の動機付けとなる「ハレ」の機会が増加することである。すでに一部の大学で校内大会などが行われているのは望ましいことである。

ここで「ハレ」舞台の提供と試合機会の増加の葛藤もある。機会を多くするには、手軽に大会を開けるようにすることである。試合会場となる教室と審査員さえいればディベート大会は手弁当でできる（たとえば日本の JDA 大会や JDA 九州大会、近年の ESS の大会の一部はその方向である）。しかしながら、それでは立派な会場設営がなかったり、メディアに取り上げられにくかったり、豪華な副賞もなかったり、と「ハレ」舞台にふさわしい場を提供できない。

さらに日本の ESS では、今まで活動を支える背景要因となっていた、大学の正課の授業の知的満足度の低さとクラブ活動への学生のコミットメントという二つの条件がなくなりつつある現在、今までの同じように活動を維持していくのが難しくなっている。大学の授業で双方向の演習形式の授業やディベートが行われれば、課外活動にそのような知的挑戦を求める必要はなくなる。大学の授業に魅力が増せば、授業をサボってでも図書館で資料収集をする動機は低くなる。大学も一方通行の講義が減って演習形式の授業が増えれば出席を重視し学期末の試験やレポートだけで評価するということとはなくなる。学生気質も変化し、クラブ活動が学生生活の全部だというようなコミットメントはなくなり、幾つかのサークルを掛け持つような学生が増えている。

5. 今後への課題・提言

すでに幾つか課題や提言にあたることの述べてきたが、それらも含めて、最後に台湾の日本語ディベートの発展を願って列挙する。大きな問題もあれば、細かな技術的なものも含まれる。

5.1. 試合数の増加

多くの問題が 1 試合の勝敗の比重の大きさから来ていると考える。単純かつ有効な対処は試合機会の増加である。負けても次があるからいい、というような後ろ向きの思考になっては困るが、試合参加による学習効果と勝敗の忖意性が不可避であることを考えると、試合機会の増加は必須であると考ええる。

5.2. 審査員

試合数を増加させれば審査員の必要数も増加する。いくつかの対策を列挙しておく。日本やアメリカのディベート大会で行われているものもある。

5.2.1. 指導教員（コーチ）は自校以外の試合の審査員を務める

指導教員は貴重な審査員であり、審査をすることで教員のディベート理解も進む。自校の試合を見たいのはわかるが、ビデオなどもあるので、大会では他校の試合を審査してほしい。両チームの指導教員 1 名ずつと中立の審査員 1 名の 3 名構成の審査員では公平な勝敗という観点からは 1 名の審査員と同じである。

5.2.2. 予選は 1 人で審査する

3 名の審査員の試合を 1 試合行うのと、1 名の審査員の試合を 3 試合行うのでは、審査員の必要数は同じであるが、学生にとっての試合機会は 3 倍になる。どうしても複数審査員にこだわるなら、予選では 2 名審査員も可能である。審査員が偶数だと個々の試合の勝敗には引き分けが出る

が（合議による決定は一般的には望ましくない）、予選結果としては、勝ち票数（勝ち点）を集計すればいい。2人審査員で4試合行えば、勝ち点8のチームから順に上位となる。

5.2.3. 学生が審査員を務める

審査員は試合に出ていない学生や大会参加学生が自分の試合に出ていない時間帯に審査員を務めてもいい。審査員の「権威」にこだわらなければ、学生にとっても審査する側に回ることは貴重な学びの機会である。

5.2.4. 一般聴衆が投票する

「ハレ」の大会の決勝などでは審査の厳密性よりもイベントとしての盛り上がり、聴衆参加、という点を考慮して、一般聴衆に投票してもらうことも考えられる。

5.3. 学生組織の形成

日本のESSのディベート活動の成果の一つは、学生による組織運営、学生同士（先輩後輩を含む）の学びあい教えあい、という学生主体の活動の実現である。教員の負担を考えても、教員主導の方式では熱心な（犠牲を厭わない）教員がいなければディベート活動ができないような状況を作ってしまう。教員が側面から支援して、学生主体の活動に移行していくことはできないだろうか。

現在、台湾の日本語ディベートは、ある意味で理想的な大学の正課の活動と課外活動が連携した形態をとっていて、学生主体の活動の維持が（少なくとも一部では）困難になりつつある日本のESSのディベート活動にとってうらやましい状況である。しかし、教員のディベート指導業績が十分に評価され補償されなければ、活動の広がりには難しい。学生主体の活動への移行は一つの道である。（教員の業績評価については下の5.7節参照。）

5.4. 国際交流の推進

すでに第3回全国大会に韓国の釜山外国語大学校がゲスト参加したので、国際交流は動き出した。ぜひ近い将来、台湾で日本語ディベートの国際大会が開催されることを期待したい。もちろん、毎年アジアの、世界の違う都市で開催されるというのが夢である。予算面などの問題が解決しても、一つ問題となるのは論題であろう。今回はゲスト参加ということで台湾の国内問題に近い漢語ピンインの論題で釜山外大チームが準備したようであるが、正式参加となると「公平」な論題が求められる。準備型で行う場合、複数論題の採用、指定資料のみの使用、なども検討する必要がある。もう一つの可能性は即興型（パラメンタリー）である。現在英語で行われる国際大会も主要なものはみな即興型のディベートである（国内でも準備型の大会が中心であるのはアメリカ・日本に限られるという理由もある）。世界各地の事情を考慮して統一論題を発表することの困難さとしてその労力を考えると試合毎に異なる即興論題の使用も国際大会では止むをえないかもしれない。

もう一つの国際交流は、現在英語ディベートで日米交歓ディベートが行われたり（日本ディベート協会のホームページ参照）、イギリスのディベートチームが日本を訪問したり（日本英語交流連盟のホームページ参照）しているような行事を台湾と日本の間で行うことは十分可能である。

実は、第3回全国大会の時期に九州大学ディベートクラブ（QDC）チームを派遣しようという提案を私が行い関係者との協議も行ったが、主に資金的な面から実現しなかった。ただし、今後の訪問の可能性は検討している。逆に、台湾のチームが日本を訪問することも可能である。ささやかな提案としては、全国大会優勝チームが副賞の航空券を利用して日本を訪問して交流ディベートを行うというのはどうであろうか。実際、日本の英語ディベートでは、国際教育振興会（日米会話学院）主催のディベート大会の優勝者が副賞としてアメリカ、ベイツ大学（Bates College、ディベートの国際交流に熱心）を訪問し交歓ディベートを行うということが実施されていた時期があった。残念ながら現在はこのディベート大会自体がなくなっている。

5.5. 中国語ディベートとの連携

外国語教育の中でディベートを導入する場合、ディベートを教えるのか、ディベートを使って教えるのか、という問題が常に出てくる。日本の英語ディベートや台湾の日本語ディベートで試合形式のディベートを行うには、その一般的な普及度から考えてディベート自体を教える必要がある。台湾における日本語ディベートを考えると、学習目標言語（日本語）で母語話者が行っているようなディベート（ディベート甲子園）を参考にすることも一つの方法であるが、学習者の自文化で行われているディベートを利用することも考えられる。台湾の国語（中国語）ディベートの主流がオレゴンスタイルであることを考えると、基本的な教育ディベートとしての理念や形式の原則は同じであるわけなので、この国内資源を利用できないだろうか。

学生の中の中国語ディベート経験者が教員の補助をしたり、学生組織の運営に貢献することも可能である。また、日本語教員のディベート研修を行う際に、特に台湾人教員に中国語で研修を実施するような場合に、中国語ディベートの指導者を講師に招くことも可能であろう。

ディベート甲子園と台湾のオレゴン式は本質的には同じ教育ディベートの変種であるが、具体的な試合規則などは違っている。両者を比較検討することで、両者が学ぶところがあったり、より良い折衷形式が生まれてくるかもしれない。

5.6. ディベートスタイル検討

4節で中庸な準備型政策ディベートを推奨したが、独自の形式を求めていくのか、また、即興型との組み合わせの可能性はないのか、など検討する必要がある。

現在の全国大会の基になっているディベート甲子園の形式以外に既存の代案を求めるとすれば中国語オレゴン形式であろう。立論反駁の回数、時間、順序など既存形式の利用と独自形式の採用など可能性は多岐になる。スピーチの順序で中心的な問題となるのは、否定側のブロック（否定側立論と反駁の二つのスピーチの連続）である。甲子園形式では、否定側立論の後に否定側第1反駁が続く。これは肯定側スピーチで始まり、肯定側スピーチで終わるという原則に基づき、スピーチの数を双方同じにした場合、どこかで否定側連続が生じる。NDTや日本のESSの2立論2反駁形式では、第2立論の後に来る。2立論1反駁という形式でも、否定側第2立論と否定側反駁が続く（現在では一部のパラメンタリーディベートで採用が多い）。単純にするにはすべてのスピーチを交互にして否定側スピーチで終わることも可能ではある。このことは議論展開に大きく影響するので慎重に考慮する必要があるが、特に外国語によるディベートで単純さを求めることも悪くない。

この問題はまた、否定側の最初の立論が否定側の準備した議論だけを提示するのか、肯定側への反論を含むのかという問題とも関係している。スピーチがすべて交互に行われ、かつ、否定側の最初の立論で肯定側への反論をしない場合は、肯定側の立論内容への反論は二つのスピーチを挟んだ4番目のスピーチ（否定側の2番目のスピーチ）で初めて提出されることになる。否定側の最初の立論を2名で担当し場合によっては時間を長くするというような形式の採用も可能性としてはある（アメリカの1対1のディベート形式（リンカーン・ダグラス形式）では否定側のブロックを一つの連続した立論スピーチとしている）。

即興型と準備型はそれぞれに長所短所があり、目的に応じて使い分けられるべきである。ただ上級の大会となれば完全な即興ということもないし（事前にさまざまな論題のケースを練習している）、準備した原稿を読むだけということもありえない（準備型でも相手の議論に応じた議論は即興性がある）。一つの提案としては、学生には両方を経験させるということである。もう一つは、練習段階で準備型を行い、大会では即興型を行うという方式である。準備型の資料収集や綿密な議論構築の訓練の教育的意義は大きいわけであるが、それと勝利至上主義が関係して極端なスタイル（ESSやアメリカのNDT）が生じた面も否定できない。また、上記国際大会を考えると、事前に一つの論題を国際的な運営委員会で合意することは困難である。論題内容と地域の関係による有利不利もある上、チームの名誉だけではなく国の面子がかかってくると組織的に準備を行う国に有利となる。

大会と教室の区別についても、日頃の授業の成果を生かした大会、というのはある意味で理想であるが、大会での議論の質やディベート技能の向上を追及そていけば、日頃の教室活動と遊離してくるのは避けられない。

いずれにしても、ある一つのスタイルのみをこれが唯一の理想形であるというような固執は避けて柔軟に多様なスタイルを実践したり折衷形を模索していくべきである。

5.7. ディベート研究・実践の学術活動推進

いろいろな提案や可能性を述べてきたが、完全に学生主体の活動にする（それは可能であっても必ずしも望ましい形態ではない）以外には、教員の指導がかかせない。そのためには、ディベート教育（外国語によるディベート）を専門的に研究する人材が求められる。これは二つの側面から考えられる。一つは、どのようなディベートが望ましいのか、どのような指導方法が望ましいのか、というような課題を研究し実践に生かしていく研究者が必要である。日本でもそういった研究者、研究者のコミュニティーというものはまったく不十分な状態である。ディベートと外国語教育に関する研究は、筆者の一連の研究は英語教育についてである（井上、1984、1985；Inoue、1994）。日本語教育についても、西谷（2001）、木下・田所（2002）、大塚（2003）など断片的に発表されてきた。議論教育、特にディベート教育に関して、注目すべきものとして中野の一連の研究発表があり、博士論文（中野、2007）としてまとめられた。しかしこのような活動はまだ単発的であり、外国語教育やコミュニケーション系の学会の中では主流の研究課題にはなりえない。日本ディベート協会や全国教室ディベート連盟も学術的な学会としては十分な活動をしているとはいえない。台湾においても教育ディベートの実践的研究活動が進み、日本語教育（外国語教育）における認知の向上を期待するとともに、ディベートや議論法全般の研究が進展することが望まれる。

ディベートの研究・実践を推進し、学術活動として認知してもらうことは、指導する教員の労力に報いるという面からも、新たに教員がディベート活動に関係しようとする際の動機付けにもなる。一部の熱心な教員が他の研究教育活動に加えて超過の負担としてディベート指導や大会運営を行うのは限界がある。日本でも台湾でもいままでそのような形態が主流であり、すぐに改善されるのは困難であろうが、ディベートの研究・実践が正当な活動として業績評価され、大学からも十分な支援が得られるという体制の実現を望みたい。そのためには、ディベート活動を自分の専門研究の対象とする研究・教育者が育っていくことが必要である。

参考資料一覧

- 伊豆田達志、蟹池洋一、北野宏明、並木周. 2005. 『現代ディベート通論—復刻版』東京：ディベート・フォーラム出版会。（競技ディベートの理論を詳述。初心者向きではない）
- 井上奈良彦のホームページ <http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/> （シラバス、自作テキスト、博士論文要約など）
- 井上奈良彦. 1984. 「Debate の擁護」『英語教育』（大修館書店）第 33 巻 9 号、pp. 80-81.
- 井上奈良彦. 1985. 「英語教育の中のディベート」『筑波英語教育』（筑波英語教育学会）第 6 号、pp. 4-14.
- Inoue, Narahiko. 1994. Ways of Debating in Japan: Academic Debate in English Speaking Societies. Ph.D. Dissertation, University of Hawai'i at Manoa, Department of Linguistics. UMI Order Number 9519451. （日本語要約を付録に添付した）
- Inoue, Narahiko, & Nakano, Mika. 2006. "The costs and benefits of participating in competitive debate activities: Differences between Japanese and American college students." In F. H. van Eemeren, M. D. Hazen, P. Houtlosser & D. C. Williams (Eds.), *Contemporary Perspectives on Argumentation: Views from the Venice Argumentation Conference*. Amsterdam: Sic Sat, pp. 167-184
- 大塚容子. 2003. 「ディベートにおける文末表現—日本語学習者の場合」『岐阜聖徳学園大学紀要』（外国語学部編）第 4 2 集 通巻第 4 5 号, 33-45.
<http://www.ha.shotoku.ac.jp/library/HP-bak/kiyo/gaikoku/gaikoku42/otsuka.pdf>
- 奥瑞岡式辯論規則（台湾のオレゴン式） <http://blog.yam.com/atingtw/4258d2d5.doc> など多数の資料が Web で検索できる。
- 木下徹、田所真生子. 2002. 「コミュニケーション能力とアカデミックディベート—「説得力」養成効果の実証的検証を中心に」『言語文化論集』（名古屋大学言語文化部）23 巻 2 号、pp. 49-66.
- 児島宏美. 2003. 台湾で日本語教育に携わる日本人教師についての調査研究～その現状と役割を中心に～. 銘傳大學應用日語學系修士論文.

<http://ethesys.lib.mcu.edu.tw/ETD-db/ETD-search/getfile?URN=etd-0124105-165547&filename=etd-0124105-165547.pdf>

ジーゲルミュラー, G., J. ケイ, J. (著) 井上奈良彦 (監訳) . 2006. 『議論法—探求と弁論 第3版』福岡: 花書院、2006年(ディベートだけでなく議論法全体を詳述。原著は Ziegelmüller, G., & Kay, J. 1997. *Argumentation: Inquiry & Advocacy*, 3rd ed. Allyn & Bacon.)

「全国大学生日本語ディベート大会ルール」 (2005年8月15日改正) 交流協会日本語センターのホームページ (<http://www.koryu.or.jp/nihongo/>) より.

全国教室ディベート連盟 <http://nade.jp/test/> (主に中高生対象とする指導団体、ディベート甲子園の運営母体)

卓福安 (Toh Hock An). 2003. 「如何打一場奧瑞崗式的辯論」 (朝陽科技大學 91 學年度第二學期「中國經籍與說話藝術」 (黃翠芬) 協同教學單元

ワード版 <http://www.cyut.edu.tw/~tfhuang/files/oregon.doc>

PowerPoint 版 <http://www.cyut.edu.tw/~tfhuang/files/oregon.ppt>

淡江大學. 2002. 『淡江大學外國語月報』 <日本語版> 「さくら便り」 48 号 (2002 年 5 月 8 日発行) http://www2.tku.edu.tw/~tf/the_Tamkang_Times/20020508/20020508japan.htm

東呉大學日本語文學系. 2005. 『東呉大學日本語文學系 94 學年度日語辯論比賽實錄』台北: 東呉大學日本語日本語文學系.

中野美香. 2005. 「ディベートの功罪—パラメンタリー・ディベートに参加する大学生の意識」 『スピーチ・コミュニケーション教育』 (日本コミュニケーション学会) 第 18 号、pp. 1-19.

中野美香. 2007. 『議論能力を育成する指導法とその教育実践の効果—ディベート教育の視点から—』九州大学大学院比較社会文化学府博士論文.

西谷まり. 2001. 「ディベート活動を通じた口頭表現の指導法」 『一橋大学留学生センター紀要第 4 号』, 57-73. http://hda1.lib.hit-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/AZ00011077/Front/link/ryugaku0000400570.pdf (種々のタスクなども紹介)

日本ディベート協会 <http://www.kt.rim.or.jp/~jda/> (日本の研究・普及の専門家による団体)

日本英語交流連盟ホームページ <http://www.esuj.gr.jp/> (英語パラメンタリーディベートを支援している)

野呂香代子・山下仁 (編著) . 2001. 『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』東京: 三元社.

Fine, Gary Alan. 2001. *Gifted Tongues: High School Debate and Adolescent Culture*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

- 文藻日本語学科. 2006. 「文藻日本語学科学生校内ディベート大会ルール」
http://union.wtuc.edu.tw/~japanese_u/debate/speech-01.htm.
- Pennycook, Alastair. 2001. *Critical Applied Linguistics: A Critical Introduction*. Mahwah, N.J.: L. Erlbaum.
- 堀越和男. 2006. 「日本語関連学科を有する高等教育機関」『いろは』22 号（財団法人交流協会日本語センター、2006 年 3 月 20 日）、pp. 1-4.
- 松尾慎. 2006a. 多元文化理解（1 年生）<http://web.thu.edu.tw/shin/www/tagen/tagen.html>
- 松尾慎. 2006b. 日語討論與表達（4 年生）<http://web.thu.edu.tw/shin/www/debate.html>
- 松本茂. 2001. 『日本語ディベートの技法』東京：七寶出版、2001 年（ディベート教育第一人者による教科書・指導書）
- 安井省侍郎. 2004. 『初心者のためのディベート Q&A』（第 4 版）東京：ディベート・フォーラム出版会（競技ディベートの入門書）
- 游梓翔 (Yu Tzu-hsiang). 2003. 『認識辯論』. 台北：雙葉書廊. （中国語。台湾における教育ディベート研究・実践書の決定版と言える）
- Lubetsky, M., LeBeau, C., & Harrington, D. 2000. *Discover Debate: Basic Skills for Supporting and Refuting Opinions*. Language Solutions. 出版社のサイト（<http://www.languagesolutionsinc.com/>）から練習問題の解答、小テスト、オーディオ・スクリプト（別売 CD あり）などをダウンロードできる（登録必要）。
- レイコフ, G., & ジョンソン, M. (著) 渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸 (訳) . 1986. 『レトリックと人生』東京：大修館書店（原著 Lakoff & Johnson (1980) *Metaphors We Live By*）（議論の比喻としての戦争や建築を紹介）

付録1 台湾における教育ディベートに関する質問紙調査

2006年8月から9月の滞在中およびそれ以降にそれまでの調査と関係者への聞き取りを元に質問紙調査を行った。まず、アンケート（1）を作成し東呉大学と台湾大学でディベートについての講演を学部学生を対象に行った際に実施した。さらにその結果に基づいて、アンケート（2）を作成し、日本語ディベート関係者に依頼して実施した。具体的には、中部地区では東海大学の松尾先生と静宜大学の藤原先生の日本語クラスで10月に実施していただいた。さらに、南部の文藻外語学院の上條先生の協力を得て11月に同学院で行われた交流協会高雄事務所主催の第十二回日本語教育実践講座（関口要講師）において実施してもらった。

以下に、数量的回答についての集計を掲載する。アンケート（2）の結果を中心に集計し、アンケート（1）については対応する項目の回答を掲載している。また、南部地区に於ける回答には教員も含まれていたため、ここでは他の場所での回答と比較するため、学生のみを報告している。一方、静宜大学と台湾大学では教員が1名ずつ含まれていたが、回答傾向に大きな影響はないのでそのまま集計している。なお、このアンケートの集計には、九州大学大学院生の周莉恵さんと九州大学ディベートクラブ（QDC）のメンバーの協力を得た。

アンケート結果

（数字は注記しない場合は回答人数）

番号	項目	東海	静宜	南部地区	東呉・台大
問 01	身分				
A	大学1年	0	3	3	0
B	大学2年	17	20	1	11
C	大学3年	17	27	1	43
D	大学4年	16	52	88	6
E	大学院生	3	0	9	7
F	教員	0	1	0	1
G	その他	0	1	1	8
	未回答	0	1	0	1
	計	53	105	103	77
問 02	専門				
A	日本語	53	93	101	
B	その他	0	12	2	
	未回答			0	
	計	53	105	103	
問 03	日本語能力自己評価				
A	非常に高い	0	1	3	
B	高い	4	2	2	
C	普通	34	58	60	
D	低い	15	41	31	
E	非常に低い	0	2	5	
	未回答	0	1	2	
	計	53	105	103	
問 06	ディベート大会経験				
A	ある	6	9	9	15
B	ない	47	96	93	33
	未回答			1	30
	計	53	105	103	78

番号	項目	東海	静宜	南部地区	東呉・台大
問 08	ディベート大会経験 いつ				
A	小学校	0	2	0	
B	中学校	1	1	0	
C	高校	1	5	2	
D	大学	4	3	10	
	大学院			0	
	その他			2	
	未回答	1	0	0	
	計（延べ回答数）	6	11	14	
	計（人数）	5	9	13	
問 13	授業経験				
A	ある	36	26	32	24
B	ない	16	79	65	23
	未回答	1	0	6	31
	計	53	105	103	78
問 14	授業経験 いつ				
A	小学校	4	4	1	
B	中学校	3	4	0	
C	高校	7	6	5	
D	大学	25	16	28	
	大学院			3	
	その他			2	
	未回答	0	1	1	
	計（延べ回答数）	39	30	39	
	計（人数）	36	26	37	
問 15	ディベートの役割				
A	国語でディベートの説明、準備、試合などが授業の主な内容	9	8	7	
B	国語でスピーチやディスカッションの練習をする授業の一部として	11	7	9	
C	外国語でディベートの説明、準備、試合などが授業の主な内容	9	3	22	
D	外国語でスピーチやディスカッションの練習をする授業の一部として	11	10	12	
E	内容科目の授業方法としてディベートを利用する	11	6	8	
F	課外活動	1	5	1	
G	その他	3	1	0	

番号	項目	東海	静宜	南部地区	東呉・台大
問 15	外国語でディベート、スピーチ、ディスカッションなど (C と D の回答)				
15-Ca	ディベートの説明、準備、試合など (合計)	9	3		
	日本語で	9	2		
	英語で	0	0		
	その他の外国語で	0	0		
	未回答	0	1		
15-Da	スピーチやディスカッションの練習 (合計)	10	10		
	日本語で	9	9		
	英語で	1	0		
	その他の外国語で	0	0		
	未回答	0	1		
問 16	授業回数				
	1 回	13	13	6	
	2 回	6	1	11	
	3 回	2	9	5	
	4 回	1	1	0	
	5 回	2	0	1	
	5 回以上	0	2	0	
	未回答	29	9	14	
問 18	ディベート訓練の良い点				
A	話す能力向上	44	91	87	27
B	聴く能力向上	26	60	66	21
C	読む能力向上	3	17	28	6
D	書く能力向上	3	15	18	8
E	翻訳力向上	9	35	25	6
F	情報収集力向上	33	58	72	18
G	論理的思考能力向上	44	75	83	25
H	知識が増える	32	40	57	
I	勝負が面白い	6	12	16	
J	友人が出来る	3	9	14	
K	その他	1	0	4	
問 19	ディベート訓練の悪い点				
A	時間がかかる	13	33	43	
B	人前でスピーチするのが嫌い	10	22	24	
C	反論されたり反論するのが嫌い	18	36	44	
D	論題が難しい	18	32	31	
E	政治的な問題を話したくない	22	46	48	
F	外国語では難しい	27	48	44	
G	人間関係が悪くなる	5	8	5	
H	お金がかかる	1	2	2	
I	自分の意見と違うことを言いたくない	20	31	28	
J	指導者がいない	3	8	16	
K	その他	0	1	1	

アンケート（1）台湾大学・東呉大学実施

ディベートについてのアンケート

九州大学 井上奈良彦 (inouen@flc.kyushu-u.ac.jp)

台湾のディベート（肯定・否定に別れて討論し審査員が勝敗を決めるゲーム）について調査しています。この調査の回答を研究以外の目的で使用することはありませんので、ご協力願います。回答を書く場合は日本語でも中国語でもかまいません。まず、あなた自身について教えてください。

☐日本文系1年 ☐2年 ☐3年 ☐4年 ☐大学院生 ☐教員 ☐その他（ ）

このアンケートやその他ディベートについてさらに質問をさせていただいてもいい場合は、電子メールアドレスをご記入ください。

アドレス： _____ 使用可能言語（☐日本語 ☐中国語 ☐両方）

- ディベート大会に参加した経験はありますか。ある場合はどのようなディベート大会か書いてください。
☐ある ☐ない（ある場合は、参加者、使用言語、形式（オレゴン奥瑞岡式、議会式など）など）
- 学校の授業でディベートの訓練を受けたことがありますか。ある場合はその内容を書いてください。
☐ある ☐ない（ある場合は、学校の種類、授業科目、どのようなディベートか、など）
- 質問1または2で「ある」と答えた人は、その訓練でどんな能力が向上したと思いますか。（複数可）
☐話す能力 ☐聴く能力 ☐読む能力 ☐書く能力 ☐翻訳能力
☐情報収集能力 ☐論理思考能力 ☐その他（具体的に書いてください）
- ディベート大会への参加や授業でディベートの訓練を受けることの問題点（困難、不利益）は何だと思いますか。経験のない方は想像して書いてください。
- 日本語の授業にディベートを取り入れてほしいと思いますか。その理由は何ですか。（教員の方は取り入れたかどうか）
☐思う ☐思わない ☐わからない （理由を具体的に書いてください）
- 日本語の授業にディベートを取り入れた場合、どんな能力が向上すると思いますか。（複数可）
☐話す能力 ☐聴く能力 ☐読む能力 ☐書く能力 ☐翻訳能力
☐情報収集能力 ☐論理思考能力 ☐その他（具体的に書いてください）
- これから日本語ディベート大会（大学対抗の大会、学内大会など）があれば参加したいと思いますか。その理由は何ですか。（教員の方は学生に参加させたいかどうか）
☐思う ☐思わない ☐どちらとも言えない （理由を具体的に書いてください）

ご協力ありがとうございました。

アンケート（２）中部・南部地区実施

ディベートについてのアンケート

九州大学教授 井上奈良彦 (inouen@flc.kyushu-u.ac.jp)

台湾のディベート（肯定・否定が決められ審査員が勝敗を決めるゲーム形式の弁論）について調査しています。この調査の回答を研究以外の目的で使用することはありませんので、ご協力願います。選択肢はA、B、Cなどを○で囲んでください（複数該当する場合は複数選択可）。回答を記入する場合は日本語でも中国語でもかまいません。

1. 身分 A. 大学1年 B. 2年 C. 3年 D. 4年 E. 大学院生 F. 教員 G. その他（ ）
2. 専門 A. 日文 B. その他（ ）
3. 日本語の会話能力をで自己評価してください。A. 非常に高い B. 高い C. 普通 D. 低い E. 非常に低い
4. このアンケートやその他ディベートについてさらに質問をさせていただいてもいい場合は、電子メールアドレスをご記入ください。電子メールアドレス：_____
5. 電子メールでの使用可能言語 A. 日本語 B. 中国語 C. 両方
6. ディベート大会（校内や学校対抗の辯論比賽）に参加したことがありますか。
A. ある（以下回答してください） B. ない（13番の質問へ飛んでください）
7. 試合数（練習試合を含め参加した試合数の概数）（ ）試合
8. いつ A. 小学校 B. 中学校 C. 高校 D. 大学 E. 大学院 F. その他（ ）
9. 規模 A. クラス内 B. 学校内 C. 学校対抗 D. その他（ ）
10. 形式 A. 奥瑞崗式 (Oregon) B. 新加坡式 C. 國會式 (Parliamentary) D. その他（ ）
11. 言語 A. 中国語 B. 英語 C. 日本語 D. その他（ ）語
12. 論題や大会名称を覚えていれば記入してください。
13. 授業などでディベートをしたことがありますか。
A. ある（以下回答してください） B. ない（18番の質問へ飛んでください）
14. いつ A. 小学校 B. 中学校 C. 高校 D. 大学 E. 大学院 F. その他（ ）
15. その授業などの中でディベートはどのような役割でしたか。
A. 国語でディベートの説明、準備、試合などが授業の主な内容
B. 国語でスピーチやディスカッションの練習をする授業の一部として
C. 外国語（ ）語でディベートの説明、準備、試合などが授業の主な内容
D. 外国語（ ）語でスピーチやディスカッションの練習をする授業の一部として
E. 内容科目の授業方法としてディベートを利用する
F. 課外活動（辯論社、正言社など社團活動）
G. その他（ ）
16. その授業などであなたは何回ディベートの試合に参加しましたか（ ）試合
17. 授業科目名、社團名、取り扱った論題、ディベートの形式などわかれば記入してください。
18. ディベート訓練の良い点（利益、楽しさ）は何だと思いますか。経験がなければ想像で教えてください
A. 話す能力向上 B. 聴く能力向上 C. 読む能力向上 D. 書く能力向上 E. 翻訳力向上 F. 情報収集力向上
G. 論理的思考能力向上 H. 知識が増える I. 勝負が面白い J. 友人ができる K. その他（記入してください）
19. ディベート訓練の悪い点（不利益、困難）は何だと思いますか。経験がなければ想像で教えてください。
A. 時間がかかる B. 人前でスピーチをするのが嫌い C. 反論されたり反論するのが嫌い D. 論題が難しい
E. 政治的な問題を話したくない F. 外国語でするのは難しい G. 人間関係が悪くなる H. お金がかかる
I. 自分の意見と違うことを言いたくない J. 指導者がいない K. その他（具体的に書いてください）
20. 日本語でディベートをする機会があれば参加してみたいと思いますか。
A. 校外大会に参加したい B. 校内大会に参加したい C. 授業であれば参加したい D. 参加したくない
E. その他（具体的に書いてください）

付録 2 研究活動の概要

研究課題： 台湾における日本語ディベート教育の実践研究

研究期間： 2006 年 8 月 1 日～2006 年 9 月 27 日

活動内容・場所・学術交流対象：

研究期間中、概ね台湾大学文学院日文系において研究室の提供を受け、台湾における「教育ディベート」活動、特に日本語教育におけるディベートの導入方法について調査考察した。特に日本における英語教育でのディベート導入方法との比較を行った。

この間、日本語教育関係者と意見交換などを行った以下、一部の方の名前を挙げる。（順不同敬称略）

趙順文（台湾大学日文系主任） 趙姫玉（台湾大学日文系教授） 陳明姿（台湾大学日文系教授） 服部美貴（台湾大学日文系講師） 朱廣興（東呉大学日文系主任） 長田正民（東呉大学日文系講師） 羅濟立（東呉大学日文系助理教授） 上條純恵（交流協会高雄事務所） 永井江理子（真理大学応用日語系講師） 橋本行平（全国大学生ディベート大会審査員、講習会講師） 李文瑞（文藻外語学院校長） 鄭淑玲（文藻外語学院国際合作交流中心代主任） 葉秀治（文藻外語学院日文系主任） 松尾慎（東海大学日文系助理教授） 関口要（南台科技大学応用日本語学科非常勤講師） 齋藤正志（中國文化大學日文系副教授） 游梓翔（世新大学口語傳播系副教授） 劉百齡（銘傳大学応用日語系助理教授）

その他、下記の講演、合宿研修を通じて多数の人々と意見交換を行った。また、合宿参加者についてはその後も電子メールによる連絡を続けることになった。

期間中、研究の一環としてまた研究成果の還元として次の活動を行った。

- （１）講演 「日本語教育と「ディベート」—外国語における議論法や論理思考の指導」

日時：2006 年 9 月 6 日

場所：文藻外語学院（高雄市）

主催：文藻外語学院

聴衆：日本語教員 約 30 名

- （２）合宿 日本語教育実践講座「ディベートの指導と評価」

日時：9 月 7、8 日

場所：救国団澄清湖青年活動中心（高雄市）

主催：交流協会高雄事務所主催

参加者：日本語教員 約 20 名

内容：ディベートを指導している日本語教師を対象に、実際の試合を通して指導方法や評価方法を体験してもらい、問題点を参加者と講師が一緒に考える。

- （３）講演 「外国語教育と「ディベート」—問題を分析し、発見した答を伝えていく過程（議論法）の指導」

日時：9 月 20 日

場所：台湾大学文学院

聴衆：学部学生、大学院生 約 50 名

- （４）講演 「ディベートのすすめ」

日時：9 月 21 日

場所：東呉大学

聴衆：学生、教員 約 50 名

(5) 講演 「ディベート入門」

日時：9月21日

場所：台湾大学

聴衆：学部学生 約50名

収集資料：

期間中に収集したディベートやスピーチコミュニケーション関係を中心とする資料を下記にあげる。ただし Web 上の資料やインタビュー記録は省略する。

- (1) 東呉大学における校内ディベート大会資料
- (2) 日本語学習学生に対するアンケート調査回答
- (3) 2006 年第 2 回大專盃ディベート大会資料
- (4) 書籍

鄭翰林(編訳). 2003. 傳播理論 Q&A. 台北：風雲論壇

彭懷恩(訳著). 2003. 人類傳播理論 Q&A. 台北：風雲論壇

俞安嫻, 胡玉衡(編、訳) W. W. Braden, E. Brandenburg 原著. 2001. 議場争雄：口頭攻防戦略 (Oral Decision Making: Principles of Discussion and Debate の翻訳). 台北：正中

關紹箕. 1994. 中國傳播理論. 台北：正中

張秀蓉(編). 1998. 口語傳播概論. 台北：正中

Greg Johnston (江凱瑞). 1994. The Logic of English Debate: A Practical Guide for Chinese Students of EFL (英語辯論). 台北：書林

黃仲珊、曾垂孝. 1993. 口頭傳播：演講的理論與方法. 台北：遠流

程之行(編、訳) S. W. Littlejohn 原著. 1993. 傳播理論 (Theories of Human Communication, 1989 の翻訳). 台北：遠流

鄭安鳳、黃瑩(編、訳) James H. Byrns 原著. 2003. 演講與溝通 (Speak for Yourself: An Introduction to Public Speaking, 1997 の翻訳). 台北：風雲論壇

蔡偉鼎(訳) C. A. Missimer 原著. 2002. 批判思考導論：如何精進辯論 (Good Arguments: An Introduction to Critical Thinking, 1995 の翻訳). 台北：學富文化事業有限公司

游梓翔. 2003. 認識辯論. 台北：雙葉書廊

游梓翔. 1999. 演講學原理：公眾傳播的理論與實際. 台北：五南

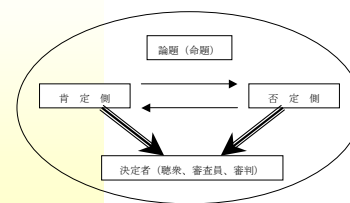
松尾慎. 2006. 台湾における言語選択と言語意識の実態. 台北：群學出版

付録3 「ディベート」のすすめ—問題を分析し、発見した答を伝えていく過程 (2006年9月講演会用スライドとメモの改訂版)

このプレゼンテーションでは、外国語としての日本語教育の中でディベート指導を取り入れることを念頭に、ディベートについての概説と外国語教育におけるディベート指導方法について考察している。

本稿は2006年9月に台湾のいくつかの大学において行った発表に基づいているので、日本語教育については台湾の大学における状況を念頭に置いている。また、筆者の長年のディベート指導の経験から、日本における英語ディベート教育に基づく内容が中心である。なお、ディベートの説明は付録4のテキストに準じていて、途中で出てくる練習問題はスライドの最後に挙げてある。

「ディベート」のすすめ 問題を分析し、 発見した答を伝えていく過程（議論法） 九州大学大学院言語文化研究院 井上奈良彦 2007/3/28 1	台湾では日本語教育が盛んで、授業ではいろいろな活動が行われているようです。ディベートを取り入れられている授業もあると思います。また、1昨年から交流協会主催の全国大学生ディベート大会も始まりました。第1回は東海大学、第2回は東呉大学が優勝しています。 ただディベートはなにも大会に出場するだけが目的ではありません。ディベートではどのような技能が訓練できるのか、そのような技能は他の活動でも生かせないかなどを考えてもらえればと思います。 さて、私は30年前にはじめて大学でディベートというものに触れて以来、英語と日本語でディベートを実践し、指導し、研究してきました。今日のお話では、なぜ私がディベートを教えたり研究したりしているのかということが少しでも伝わればいいなと思っています。結局、ディベートが好きだからですね。大学時代にESSと呼ばれるクラブ活動、課外活動でその知的ゲームとしての楽しさにはまってしまった、と言っていいでしょう。
はじめに 1. ディベート入門 2. 外国語教育における意義 2007/3/28 2	今日は、まず、ディベートについてそれほど詳しくない方もおられるかと思うので、私が授業で取り入れたり、台湾の日本語教育で用いられ交流協会の全国大会が行われてるようなディベートについて基本的な考え方を説明します。内容は概ね「ディベート入門」という私の文章に書いています。これは私のホームページからでも、交流協会の日本語教育実践講座のページからでもダウンロードできます。後半では外国語教育におけるディベート教育の意義について考えていきます。 皆さんの中で、ディベートについてどれほどご存知なのでしょう？中国語のディベートについて知っている人は、台湾ではオレゴン式と呼ばれている方式が私がお話するディベートの形式に対応しています。ただし、今日の話は特定のディベートの形式についてではなく、もう少し一般的な過程といくか枠組みについてお話します。これを議論法と呼んでいます。 外国語教育における意義については、簡単に紹介したあと、実際のディベートの方法を順に説明していくなかでどのような技能が訓練できるのかを説明します。
1.1. ディベートとは何か ■ことばのボクシング？ ■討論は闘論？ 2007/3/28 3	それではまず、ディベートとは何か、という話です。いろいろなイメージがあると思います。ことばのボクシングとか「闘論」闘う論というような表現もメディアでは使われ、対立を過度に強調しがちです。ボクシングというのは特に直接パンチを打ち合い血なまぐさいイメージであり感心しません。 スポーツだとまだ、テニスや卓球のようにネットを挟んでボールを打ち合う競技のほうが例えとしていいでしょうね。でも実はこのイメージも少し違います。これからの説明でわかってもらえればと思います。

いろいろなディベート  2007/3/28 4	さて、実際の生活や社会の中ではいろいろなディベートがあります。 裁判。被告人が有罪かどうかを決める裁判。 議会。法律を採択するかどうかを決める。 ビジネスの世界だと、新しい商品を売り出すかどうかの企画会議のようなものもディベートでしょう。 日常会話の中でも、友達が日曜日に映画を見に行こうと提案したのに対して、コンサートの方がいいよ、というように意見の対立があると広い意味ではディベートが始まります。 一人で考えるディベートもあります。日本に留学しようかどうしようかと思ったとき、留学すると日本語が上達する、台湾でできない研究ができる、帰ってきたとき就職に有利だ、というような利点があるかもしれません。でも、留学するとお金もかかるし、日本の生活に適應できないかもしれない、と問題点もあるでしょう。両方を比較して将来を決めるのは自分の頭の中でのディベートですね。
意思決定の方法 ■ 裁判 ■ 議会 ■ ビジネス ■ 日常会話 ■ 個人 (自分自身で考える) 2007/3/28 5	どれも、広い意味でのディベートと言えます。 つまり、ディベートの訓練はなにも弁護士や国会議員だけが必要なわけではありません。日本でも会社や役所の研修で取り入れられています。学校でもディベートを取り入れた授業が相当行われています。日本の伝統的な意思決定の方法とは違うかもしれませんが、社会で活躍する日本人はこのような方法を身につけています。
ディベートの定義 スピーチ・コミュニケーション学 コミュニケーションの過程 1. 明確な論題（命題の形式） 2. 肯定・否定の参加者 3. 公正な規則の下 4. 合理的な議論によって 5. 第三者の意思決定 2007/3/28 6	いろいろなディベートがありますが、ここではもう少し狭い意味でのディベートを考えて見ましょう。われわれの関心である教育ディベートに近い形のディベートを定義すると、このようになるでしょう。 実際の社会でこのようなディベートで何かを決めるというのはあまりないのですが、教育ディベートはその理想的というか純粋な形を訓練する方法と考えてもいいでしょう。また、教室でも正式な試合の形式でディベートを取り入れることは少ないかもしれませんが、ほかのいろいろな活動と共通する技能というものがあります。
コミュニケーションの基本構造 ディベートの場合  2007/3/28 7	コミュニケーションの基本構造を考えると、参加者が伝達手段を使って何らかのメッセージ・情報を交換しているわけです。参加者というのは、メッセージの送り手と受け手ですね。話し手と聞き手、書き手と読み手です。交換されるメッセージは送り手から受けて言葉を使って届きます。ここでいろいろ解釈のずれが出たりすることは注意しておく必要があるでしょう。 ディベートでは肯定と否定の話し手が相互にコミュニケーションをとりますが、中心は第三者の聞き手。決定を下す人にメッセージを伝えることにあります。 このような議論が行われるコミュニケーションの場面としては他にもいろいろあります。

スピーチ、ディスカッション、ディベート... ■ 演説 一方通行 ■ 討議 さまざまな意見交換 ■ 討論 一つの案を検証(二者択一) ■ 交渉 妥協を目指す 2007/3/28 8	スピーチ(演説)は基本的には一人の話し手が目の前にいる多数の聞き手つまり聴衆に伝えます。聴衆からはある程度の反応や質問があるかもしれませんが、概ね一方通行ですね。 ディスカッション(討議)や話し合いでは、対等の参加者がお互いに比較的自由に意見を述べます。誰かリーダー的な人が交通整理をする場合もあるでしょうし、もちろん議長や司会者がいる場合もあります。 問題解決の場面においては、ディスカッションとディベートは補完的、互いに補い合う関係があります。地球温暖化が深刻だ、どうしよう？原因は何だ？CO₂か、メタンか、フロンか。解決策は、炭素税か、総排出量規制か、原子力発電の推進か、太陽光発電か、風力か、...というようなさまざまな意見が出るディスカッションが行われるかもしれません。その中から、CO₂排出を削減するために炭素税を導入してはどうかという一つの案が出てきたとしましょう。これについて厳密に検討しようという場がディベートです。 対立するコミュニケーションとしては、「交渉」もあります。「ディベート」が違うのは、交渉では双方が妥協点を見出すことにあります。妥協点が見出せなければ交渉決裂、不成功ですね。ディベートでは対立する双方は歩み寄らず、第三者に決定を任せるのが基本です。
議論法 —— 共通する枠組み ■ 探求の過程 問題を分析し答を探す ■ 弁論の過程 答を伝達し弁護する 実際にはどうするのか？ 実社会のディベート 教育ディベート 2007/3/28 9	スピーチでもディスカッションでもディベートでも、そこには共通の基盤という枠組みが考えられます。これを議論法と呼びます。その中には問題を分析し答を発見していく過程(プロセス)とその見つけた答をみんなに伝えていく過程があります。 少し注意しておかなければならないのは、絶対確実な方法ではないということです。人間社会の意思決定は多分そうだろうというレベルで行われる。 以下、ディベートを中心にこの二つの過程を説明していきましょう。社会的な問題を例にして考えて見ます。実社会で理想的な形で政策決定が行われる場面を想定しています。同時に教育ディベートという訓練のためにするディベートも一緒に考えていきます。
 問題設定 私たちの町に原子力発電所を建設するべきだ 反対!	まず、問題設定です。原発があなたの町にやってくるかもしれないとしましょう。私たちは便利な生活のために多くの電力を消費しています。電力需要は増大し、電力会社は電力不足に対応しなければなりません。そこで、台湾電力はあなたの町に原子力発電所を建設したいと提案してきました。原子力発電は大量の電力を安定して供給できるし、二酸化炭素も出さないので環境にもやさしいと言います。 一方、一部の住民は、原子力発電は事故の危険性もあるし、一度放射能漏れが起こると取り返しがつかないと心配します。建設には反対です。 そこで、町長は討論会を開いて賛否両論を聞き、住民投票を行うと宣言しました。 これは町の討論会としてでなく、教室のディベートとしてもできます。教室ではもう少し違った論題のほうがいいかもしれません。みなさんで考えて見ましょう。
1.2. 教育ディベート (アカデミックディベート) ■ 議論の訓練 ■ 厳密な規則 ■ 参加者は肯定・否定を代弁 (ロール・プレー) ■ 審査員が勝敗と教育的評価 ■ ゲーム形式の活動 2007/3/28 11	教育ディベートの特徴をいくつか挙げておきましょう。議論の訓練という目的を達成するためにいくつかの原則があります。

試合形式の例

- 交流協会(ディベート甲子園)
 - ◆ 肯定側立論 6分
 - ◆ 否定側立論 3分
 - ◆ 肯定側立論 6分
 - ◆ 肯定側立論 3分
 - ◆ 否定側第1反駁 4分
 - ◆ 肯定側第1反駁 4分
 - ◆ 否定側第2反駁 4分
 - ◆ 肯定側第2反駁 4分
- (準備時間の表記省略)

2007/3/28

12

試合形式の例として、台湾の日本語ディベートやその元になっている、日本の「ディベート甲子園」の形式を紹介しておきます。

議論の流れ

肯定 立論	否定 立論	否定 1反駁	肯定 1反駁	否定 2反駁	肯定 2反駁
理由1		反論 反論	再反論		
理由2		反論 反論		再反論 比較	再反論 比較
理由3		反論 反論		まとめ	まとめ
	理由1 理由2 理由3		反論 反論 反論		

2007/3/28

13

この形式のディベートでは、議論はこのように展開します。
 まず肯定側が立論において論題を支持する理由を展開します。
 次に否定側が立論において論題に反対する理由を展開します。
 否定側第1反駁というスピーチでは肯定側の立論で提示された理由に反論します。
 肯定側第1反駁では否定側の理由に反論します。また、時間的余裕があれば反論を受けた自分たちの理由について再反論(立て直し)も行います。
 双方の第2反駁では直前の議論に対する再反論をするとともに全体の議論を比較してまとめを行い自分たちの側が優れていることを強調します。
 すべてのスピーチが終わると、双方の議論を比較して審査員が勝敗を出します。
 次にこのようなディベートをするための具体的な準備を段階を追って説明しましょう。

1.3. ディベートと話し方教育

探求の過程
 問題を分析し答を探す
 弁論の過程
 答を伝達し弁護する

伝達の方法(話しことば、書きことば)
 書きことばに支えられた話しことば

2007/3/28

14

ディベートというと口頭の訓練と思われがちですが、音声言語はあくまでも伝達方法の一つにすぎません。書きことばのある社会では全く口頭だけの活動は少なく、いろいろなメディアを場面に応じて使い分けたり組み合わせて伝達が行われています。
 ではこれから具体的にディベートの方法、もっと広くは議論法の過程に含まれる要素を見ていきましょう。

2. 論題の設定

教育ディベートでは

1. 肯定否定の議論が均衡
2. 中立な用語
3. 肯定が現状変更を主張
4. 参加者に適切(興味、難易度)

問題1 論題のテスト
 問題2 論題を考えてみよう

2007/3/28

15

教育ディベートでは論題の設定が大切です。その教育的機能を果たすためにいくつかの特徴があります。
 ここで論題について問題1と問題2を考えてみましょう。

3. ディベートの準備から 試合まで

- 3.1. 論題の分析
- 3.2. 資料調査
- 3.3. 論旨の構築
- 3.4. 反論と反駁
- 3.5. 口頭発表

2007/3/28

16

論題が決まったら、一連の準備をして実際に試合をするまでの過程を見てみましょう。この過程は単純に順を追って行われるというより、必要に応じて繰り返されます。

分析と資料調査



2007/3/28

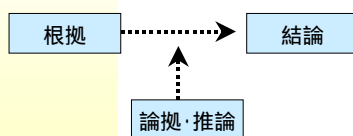
17

さて、原子力発電問題の討論では、「私たちの町は原子力発電所の建設に同意すべきである」となりました。心配になった、あなたは、なぜこの町に原子力発電所が提案されたのだろう、自分たちにどんな利益があるのか、どんな問題があるのだろう、と考え始めます。

さらに、原発について調べだします。インターネットを検索したり、電力会社に電話して提案の真意を聞いたり、図書館で調べたり、します。

探求の過程

- 問題を分析し答を見つける
- 根拠を探す(知識、資料)
- 推論の道筋(論拠)
- 多分そうだろうという答(蓋然的)



2007/3/28

18

これが、議論法の過程の前半、探求の過程ですね。問題を分析し答を見つける探求の過程です。

これは、入手できた情報に基づいて皆さん自身が何らかの結論に至る過程です。原子力発電所の問題を考えると、もし過去のいくつかの事故の話を聞いて、そこから皆さんは「原子力発電所は危ない」という一般的な結論にたどり着くかもしれません。さらに、今回提案されている原子力発電所もその一般化に当てはまる、と結論づけることができるかもしれません。

このためには、すでに知っている知識の確認も必要でしょう。知らないことも多いでしょうから、本を読んだりして調べなくてはなりません。雑誌や新聞の記事もあるでしょう。Web にもいろいろな情報があります。専門家にインタビューに行ってもいいでしょう。さて、世の中には情報が溢れていますから、情報の質を考えなくてはなりません。原子力問題であれば、政府や電力会社からの情報をそのまま信じていいのでしょうか。一方、原子力反対グループの Web サイトの情報はどうか。

また、いろいろな根拠を結び付けて結論に到達する推論の過程も考えなくてはなりません。いくら良い根拠があっても、そこから結論を導く道筋がおかしければ、間違った結論にたどりついてしまいます。推論の過程、つまり論拠の種類の一つは「ディベート入門」という小冊子の 4.3 節論拠のところに少し詳しく書いています。

さて、公開討論会の準備の話に戻しましょう。

3.1. 論題の分析

- 3.1.1. 用語の定義
- 問題3 選んだ論題の意味を考えよう
- 3.1.2. 争点の発見
- 争点 殺人罪の例 動機
- 論点 金銭、恋愛、騒音
- 問題4 争点と論点を挙げてみよう

2007/3/28

19

論題を分析してどのような議論ができるのかを考えます。分析では、まず用語の定義を検討し論題の意味を確定します。いろいろな解釈が可能な場合もあります。

次に、大きな争点を見つけます。争点というのは、肯定否定が争う点ですが、直接論題の真偽にかかわる重要な点です。それに従属する個々の論点とは区別します。たとえば、殺人罪が成立する(判断の論題)にはいくつかの要件(争点)があります。たとえば、動機はその一つですが、その動機を証明するために幾つかの論点が考えられます。隣人を殺した場合、金銭上のトラブル、恋愛感情のもつれ、騒音の迷惑、などが考えられます。動機が成立するためにそれらすべての小論点が成立する必要はありません。

定常争点(政策論題) (1) 問題 現状の政策を変えないといけなほど重大な問題があるか。 (2) 原因 新しいやり方を採用しない限り解決できないほど問題が現状の制度と深く結び付いているか。 (3) 解決策 問題を解決するための実行(実施)可能な政策案(プラン)はあるか。国会を通るかどうかが憲法違反かどうかは問題にしない。 (4) 解決性 肯定側政策案(プラン)は問題を解決するか。 (5) 不利益(の不在) 政策案の利益は不利益を上回るか。 (6) 代替案(の不在) 現状や論外の代替案よりよいか。 2007/3/28 20	政策論題の分析においては、定常争点(Stock Issues)という争点が長年の論題分析によってまとめられています。政策論題分析のための定石となる着眼点と考えればいいでしょう。
3.2. 資料調査 ■ 論題の一般的理解 ◆ 背景を調べる ◆ どんな議論があるのか ■ 特定の情報を探す ◆ 自分の論点を支持 ◆ 予想される反論に応える 資料の質を考える(問題7) 2007/3/28 21	資料調査は、論題が事前に発表され原稿を準備できるスタイルのディベートでは非常に重要です。またここで訓練されう技能は日常生活での情報の取捨選択や判断に生かせるでしょうし、授業や研究上も必須の学術的技能となるでしょう。
資料の記録・整理 ■ 本文の記録 ◆ 翻訳の注意 ■ 出典の記録 ■ 整理方式 ■ カードファイル ■ コンピューターファイル ■ 論点ごとの整理(次ページ) 2007/3/28 22	資料は活用できるように記録、整理しなければなりません。
資料の整理 論点ごとの分類 ■ 肯定 ■ I. 安全性 ■ IA 事故 ■ IB 廃棄物 ■ IB1 高レベル廃棄物(115、218、229) ■ IB2 半減期(117、220、221) ■ II. 電力需要 ■ III. 代替発電 2007/3/28 23	資料は論点毎に整理します。 ディベートでは実際のスピーチに使う資料は、各論点を支える短い引用の形で使います。これを事前の準備や試合中に効率よく選び出すには、体系的に整理する必要があります。昔から使われてきた方法は、引用カードを作って、カードボックスに分類しておく方法です。 もう一つはコンピューターのファイルとして管理します。 どちらの場合も、肯定否定の論点毎に分類しておく必要があります。このような目録、リストを作るといいかもしれません。 こういった作業はディベートの準備だけではなく、スピーチを書いたり、レポート論文を書くときにも使えますね。
発見した答は伝えなければ ■ 探求の過程 発見された答(蓋然的真理) 多分そうだろう、おそらく正しいだろう ■ 弁論の過程 「真理は自ずと伝わる」のではない 2007/3/28 24	さて、原発は必要ない、というあなたの答、分析の結果は、あなただけが知っていればいいのでしょうか。もちろん町の人々に理解してもらわないといけません。みんなわかっているはずだ、正しい答、真理は自ずとみなを理解を勝ち得るはずだ、とっていていいのでしょうか。 そうではないですね。そこであなたは公開討論会で原発反対の意見を述べることにします。

弁論の過程 適切な戦略を選択する 分野と場の考慮 聴衆の分析 論証方法の選択 スピーチの作成 反対意見に対応する 反論、反駁の準備 2007/3/28 25	あなたの答は上手に伝えていかなければいけません。たとえ、あなたの分析が正しくて、原発は必要で安全だという電力会社は間違っているとしても、町の人にはうまくだまされてしまうかも知れません。正しい答も効果的に伝達しないと理解されません。間違った答もきちんと反論しないと間違ったまま通ってしまうかも知れません。 効果的に伝達するには、戦略が必要です。戦略とは与えられた状況に応じて最適な提示方法を考える大きな計画である。具体的には、どういう議論が行われる分野や場、さらに直接対象とする聴衆のことを良く知らないと戦略は立てられません。原発の話を原子力工学の専門家を相手に話をするのと、科学技術には必ずしも詳しくない住民を対象とするのでは違ってきます。そこを考えて、専門的な実験結果の数字を出すのか、わかりやすいたとえ話をするのか、というのは違ってきます。そういうことを考えてスピーチを作ります。 また、自分と違う意見に対する反論も考えなくてはいいけないし、自分の意見が反論されたときの反駁つまり再反論も作戦を立てておかなければいけません。
議論(原稿)の準備  2007/3/28 26	危険性や電力が足りていることをどのように伝えるか考え、原稿を準備します。原発賛成派の議論も予測して、それに対する反論も考えます。
議論の提示 論証、反論、反駁  2007/3/28 27	さあ、いよいよ討論会です。電力会社の提案説明に続いて、あなたは反対意見を述べます。電力会社側の反論を受けて、再反論します。他の発言者も順に意見を述べていきます。
3.3. 肯定・否定論旨の構築 ■ 教育ディベートでの立件方法(ケース) ■ 政策論題 ■ 肯定側戦略 ■ 問題解決型 ■ 比較優位型 ■ 目標基準型 2007/3/28 28	さて、ここからは少し教育ディベートについて、教室や大会で試合に参加する場合の準備過程を見て見ましょう。 資料調査や分析に基づいて発見した議論は、特定の立件方法(ケース)という形で提示します。その提示方法にはいろいろな型(戦略)があります。政策論題について、まず肯定側を考えてみましょう。

3.3. 肯定・否定論旨の構築

■ 教育ディベートでの立件方法(ケース)

■ 政策論題

■ 否定側戦略:

■ 逐次反論

■ 現状擁護

■ 新たな不利益

■ 論題外の対抗案、等

2007/3/28

29

3.4. 反論と反駁

■ 反論(refutation)沈黙は同意

■ 論証責任

■ 反論責任

■ 反駁(rebuttal)

(1) 再構築(立て直し)

(2) スピーチの名前 立論

2007/3/28

30

準備書面

肯定(学費) (否定:公立高校の学費安い)

I. 学費の価値あり。たとえ私立のほうが学費が高くても、それだけの価値はある。教育は費用の問題ではなく質の問題である。

II. 大差なし。学費の問題は教育費全体の中で考えれば大した差ではない。

A. 3年間での差は100万円。XX省の統計によると2005年度の公立高校1年間の諸経費は約31万円に対し、私立高校では約64万円である。そうすると1年間での差額は33万円、3年間では約100万円になる。

B. 子供一人の教育費の総額は2400万円。『XX新聞』2006年4月1日によると、「ABC保険の調査では、子供一人に対して大学卒業までに保護者が支払う教育費の総額は、...私立大学医学部の場合、約2400万円、...国立大学の文系の場合約600万円と推計されている。」このように2400万円にも達する。

2007/3/28

31

3.5. 口頭発表

■ 原稿の準備

■ 肯定側立論(完全原稿)

■ 相手の議論に応じた対応

■ 準備書面

■ フローシート

■ 反対尋問

2007/3/28

32

フローシート

肯定	否定	肯定	否定	
I. XXX A. XXX	1. XXX 2. XXX	XXX XXX		以下省略
B. XXX			1. XXX 2. XXX	
II. XXX A. XXX	XXX		XXX	
以下省略			I. XXX	

2007/3/28

33

否定側は、多くの場合、肯定側の議論に対する逐一の反論と肯定側の提案から生じる不利益などの議論を組み合わせるケースを作ります。

ディベートの真髄は、自分たちの側の立件をするだけでなく、相手側の立件に反論し、さらに相手側からの反論に反駁(再反論)することにあります。ディベート大会ではなくスピーチ大会になってしまいます。

反論と反駁の準備と提示に役立つのが、準備書面です。例を挙げましょう。私立高校のほうが公立高校よりも優れている、という価値判断の論題です。否定側は公立のほうが学費が安いと言ってきそうですから、それに対抗する反論を準備してみました。安いこと自体は否定できないので、否定側の論点の効果を最小限にする反論です。

試合での口頭発表は、パブリック・スピーキングです。

肯定側の最初の立論は完全原稿を用意できますが、それ以降のスピーチでは即席の要素が入ってきます。相手のスピーチを聞いての反論をするために「フローシート」と呼ばれる形式でメモを取り、準備書面と即席の議論を組み合わせるスピーチを組み立てます。

また、立論の後に、相手からの反対尋問(質疑)がある試合形式では、質問の仕方や答え方も大切です。

フローシートというのは、スピーチの数だけ縦の欄を設け、最初のスピーチの内容は順に縦にメモしていきます。それ以降のスピーチでは、前のスピーチの反論になっている場合は、対応する論点の右横に書きます。

意思決定 ■ 住民投票 ■ 理想 - 民主主義的制度 - 住民の決定尊重 ■ 理性的議論 - 自分の意見に固執しない - 双方の意見をよく比較検討 2007/3/28 34	さて、周到な準備のもとに討論が行われました。ここで話を町の公開討論会に戻しましょう。 いよいよ住民投票となりました。投票をする人たちが意思決定をする人だとしましょう。そういう直接民主主義の制度があるか、住民投票が法的拘束力がなくても自治体の首長や議会が住民投票の結果を尊重する必要があるでしょう。 また、投票をする住民は議論をもとに理性的な判断をしなければなりません。ここで賄賂をもらった側に投票したり、近所の有力者から圧力をかけられたりしていたのでは、合理的な判断はできません。 さてこういう実社会の過程を訓練するのが教育ディベートとも言えます。逆にこういう理想的な意思決定というのは実社会でありなく、教育ディベートこそが純粹にディベートで、実社会のディベートというのは、その「応用」だということも言えるでしょう。
3.6. 判定(教育ディベート) ■ 議論の内容に基づく ■ 論題は多分正しいだろう→肯定側 ■ そうではないだろう→否定側 ■ ゲームの掟 ◆ 判定を受け入れる ■ 教育的評価、助言 2007/3/28 35	教育ディベートの試合では、肯定否定のスピーチがすべて終わると審査員によって判定が出ます。また、教育的評価や助言が行われたり増します。 判定の出し方にはいくつか基本的な原則があり、さらにいくつかの判定方法があります。ここでは省略します。 ここまでで、ディベートの過程というのを見てきました。これから先は、外国語教育における教育ディベートの意義を考えて見ます。
2. 外国語教育における教育ディベートの意義 ■ 一般的効用 ◆ 母語でも外国語でも ◆ 現代社会の必須の技術 2007/3/28 36	まず、外国語教育に限らず、一般的にディベートを授業で取り入れる利点を考えましょう。わたしは、ディベートで訓練される技能、議論法と言い換えてもいいですが、は情報が溢れる現代社会の必須の技能だと思います。溢れる情報を鵜呑みにするのではなく、情報の消費者として批判的に受け取る能力、また、情報の発信者として、正しい情報を責任ある方法で、倫理的な方法で伝達していく能力、です。特に Web を用いた発信においては、誰でも手軽に世界に情報を発信できるかわりに、間違った情報も意図するしないに関わらず、一瞬に世界中に届きます。こういう世界では、われわれは情報の受信者としても、発信者としても、議論法が必要なのです。
2.1. 一般的効用 ■ 議論法の訓練 ◆ 問題の分析 ◆ 資料収集－批判的読み ◆ 議論構築－論理的文章 ◆ スピーチ発表 ◆ 反論 ◆ 困難な状況に対応(時間、緊張) ■ ゲームの面白さ－動機付け 2007/3/28 37	つまり、問題を分析したり、資料を批判的に読みこなしたり、議論を構築し論理的な文章にまとめたり、スピーチとして発表したりする。さらには、他の人の文章やスピーチを検証して必要なら反論する。さらにこういったことすべてを試合という緊張した場面で訓練するわけです。試合までの準備も、十分な時間がない中、いつまでに何を準備しないといけない、というような困難な状況で行います。大会に参加した人は良くわかると思います。 このような技能は、本来母語で訓練されるべきでしょうけれども、外国語教育もその一部を負担してもいいわけです。 さらに、こういった、議論法の訓練の要素に加えて、ゲームとしてのディベートの面白さということも忘れてはならないでしょう。世界中で、学生時代にディベートを経験し、それにとりこになり、その後もディベート続けているという人は多いです。自分で試合に参加する人もいれば、指導者として続ける人もいます。(私もその一人ですが)これには、知的ゲームの楽しさ、奥深さがあるでしょう。 では、外国語教育の中ではどうでしょうか。

2.2. 外国語教育の中で ■ 四技能の訓練 ■ 実際の言語使用 ■ 大学生の知的レベルに対応 ■ スピーチ、ディスカッションと比較 2007/3/28 38	ここでは、大きく4つの点から考えて見ます。 四技能の訓練 実際の言語使用 大学生の知的レベルに対応 スピーチ、ディスカッションと比較
四技能の訓練 ■ 読む ■ 書く ■ 聞く ■ 話す 2007/3/28 39	まず、ディベートには、4技能の訓練すべてが含まれます。資料を読む、批判的に読む、情報を求めて読む、などです。 スピーチの原稿を書く(資料の言語によっては翻訳)です。実は、私はスピーチの原稿は翻訳を勧めません。一度母語で立派な文章を書いてしまうと、不十分な外国語能力ではそれを的確に翻訳できません。自分のできる範囲の外国語能力で初めから書くことを勧めています。 聞く、これは大事です。議論が聞き取れなければ、反論もできないし、審判もできません。非常に集中したリスニングの能力養成になるでしょう。昔話になりますが、私は TOEFL の受験の前にアメリカの学生ディベートのテープを毎日のように聴いていました。NDT スタイルと言うこのディベートは、他の特徴もいろいろありますが、非常に早口なので有名です。TOEFL のリスニングはゆっくりに聞こえます。 話す、もちろんですね。最初は原稿を書いて、または誰かに書いてもらって、どうにか発表していると言う状態から、回を重ねるにつれて、ひとり立ちしてしゃべることもできるようになります。また、反論のスピーチなどはその場である程度準備してしゃべらなくてはなりません。限られた時間内に必要なことをまとめて、聴衆に伝える訓練ができます。反対尋問では質問をしたり答えたりする練習ができます。ディベートの反対尋問で訓練しておけば、交流協会の留学試験や就職のための面接も全く怖くないでしょう。 私は、ハワイ大学で博士号をとりましたが、その博士論文の口頭試問を無事乗り切ることができたのはディベートの訓練のおかげだと思っています。終わったあと、先生から非常にしっかりと答えていたと褒めてもらえました。
実際の言語使用 ■ 外国語の使用目的提供 ◆ 学習のための学習ではない ◆ 国際交流 ■ 語学実習室 ◆ 現実ではない仮想環境 ◆ ロールプレーの効果 ◆ チーム活動ーグループで支えあう 2007/3/28 40	さらに2番目に、ディベートは実際の言語使用の場を与えてくれるということがあります。 外国語でディベートをする場合も、特に試合をすると、ディベート自体が目的となりますから、言語はその手段となります。現実の意思決定のディベートではないですが、教育ディベートには教育ディベートの意思決定、つまり勝ち負けの判定ができます。原子力発電所を建てるかどうかのディベートなら、ディベートを建てるという決定は仮想のもので、現実の決定ではありませんが、勝ち負けというのはある意味で現実のものです。そのために外国語を使うわけですから、その使用は現実の目的のための使用となります。 また、国際試合ができれば、別の意味で現実の異文化コミュニケーションのための言語使用となりますね。 現実現時と言いましたが、ディベートは議論法の実習室であるということも言いました。この意味では、語学実習室でもあるわけです。ディベートの試合という仮想現実の中での発言をします。ロールプレーだと考えてもいいですね。実際、ディベートでは自分の意見はとりあえず棚上げにして、肯定側、否定側の立場に立って議論します。これは発言する恥ずかしさや、間違えることへの不安を和らげてくれます。 また、多くのディベートはチーム対抗ですから、チーム、グループで協力しあって、支えあって準備をしたり試合に参加します。語学的な面でもわからない表現があればチームメイトが助けてくれたり、資料調査や議論の準備の過程で支えあう、場合によってはもうちょっと頑張れとプレッシャーをかけることもできます。また、試合中も協力して弱いメンバーを強いメンバーが助けるということも可能です。

大学生の知的レベルに対応 ■ 社会問題への関心 ◆ さまざまな論題 ■ 知的ゲーム(勝負) ◆ 強い動機付け ◆ 勝利至上主義への注意 2007/3/28 41	3 番目に、大学生の場合、学生の知的レベルに応じた活動と言う点があります。 社会問題への関心を満たすということです。社会問題に関心のある学生は、ディベートを通してさらに深く学んだり、多様な意見を比較検討した後、自分自身の考えをより確かなものにできたでしょう。 一方、社会問題にあまり関心のない学生の関心を向けさせることもできます。もちろん論題にもよりますが、昨年度の炭素税のディベートでは、日ごろは台湾は関係ない、と思っていた学生も改めて温暖化や省エネなどの意義を考えることができたのではないのでしょうか。 知的ゲームとしての面白さ、勝負に勝ちたいという動機などもあります。勝負というのはやはり強い動機付けになるでしょう。もちろん学生にもよりますが。 ただここで、勝利至上主義になってしまうのは問題です。日本の ESS ではほとんど学生だけの活動であるのでいろいろ教育的でない問題も生じています。台湾の日本語教育では、教員が主導しているので指導者のより教育的な配慮が期待できると思います。						
スピーチ、ディスカッションとは ■ スピーチは一方的 ■ ディスカッションは難しい ◆ 型がない ◆ 発言が保障されない ◆ 発言が強制されない ◆ 自分の意見に反論されると... 2007/3/28 42	4 番目に、スピーチやディスカッションと比べてみましょう。 スピーチとの比較は明らかですね。スピーチは基本的には一方通行であり、批判をあまり受けない、批判に応えられないというコミュニケーションの場です。 双方向性を言うなら、ディスカッションのほうが自由に議論できていいじゃないか、という意見もあると思います。しかし、自由に話すというのは学習者には難しいですね。ディスカッションでは、かえって発言のタイミングを捉えて自分の意見を言うのは難しい。一方ディベートでは決まった時間が割り当てられていますので、必ず発言の機会がある。また逆に、発言したくない人にも強制的に発言させる、という意味にもなります。勝敗という動機付けがあるので、自分の発言をきちんとしないとチームが負けてしまうというというのが、スピーチの準備や発表をきちんと行うことの動機になるでしょう。 また、ディベートはロールプレーであるのに対して、ディスカッションでは自分の意見を述べる人が多いでしょう。そうすると誰かから反論を受けた場合、ディベートのほうが心理的負担が少ないということです。 このように、外国語教育の中でディベートは 4 技能を総合的に訓練することができ、そのゲームとしての特徴から、すぐれた語学実習室として働きます。仮想現実の中でのロールプレーであるとともに、ディベートの勝負という現実の目的のために実際の言語使用の場を提供します。						
4. 議論のしくみ 4.1. 議論の構造 2007/3/28 43	さて、これから先は、いままでの話で説明を省いてきた、議論のしくみとスピーチの構成について説明します。 議論(論証)の単純なモデルはこのような主張とそれを支える要素を考えることができます。 <table border="0"> <tr> <td>結論(主張)</td> <td>日本の原子力発電所は危険</td> </tr> <tr> <td>根拠(データ)</td> <td>地震で破壊される危険性がある(資料)</td> </tr> <tr> <td>論拠(推論)</td> <td>原発が破壊されると危険な放射性物質が放出される(資料?)</td> </tr> </table>	結論(主張)	日本の原子力発電所は危険	根拠(データ)	地震で破壊される危険性がある(資料)	論拠(推論)	原発が破壊されると危険な放射性物質が放出される(資料?)
結論(主張)	日本の原子力発電所は危険						
根拠(データ)	地震で破壊される危険性がある(資料)						
論拠(推論)	原発が破壊されると危険な放射性物質が放出される(資料?)						
4.2. 根拠 ■ 共有知識 ■ 証拠資料 ◆ 外的整合性 ◆ 内的整合性 ◆ 出典の信頼性 ◆ 統計の検証 ◆ 専門家の検証 2007/3/28 44	根拠を吟味検証する際の着眼点を見てみましょう。						

4.3. 論拠 ■ 推論の過程 ■ 根拠から主張への飛躍を保証 ◆類推 ◆一般化 ◆因果関係 ◆しるし 2007/3/28 45	論拠(推論の過程)の種類とその検証方法を概観します。
5. スピーチの構成 ■ 肯定側立論の構成 ■ (形式によっては否定側立論も同じ) ■ 反論単位 2007/3/28 46	ディベートのスピーチもパブリックスピーキングの一種ですから、一般的なスピーチの構成要素は当てはまります。特に肯定側の最初の立論は独立したスピーチです。 反論、反駁をするためには相手の議論に言及するための構成が必要になります。
5.1. 肯定側立論 導入部 全体の結論(肯定否定の立場) 予告編 本論部 論点1 論点2 論点3 結論部 要約 全体の結論 2007/3/28 47	特に、肯定側立論は独立したスピーチの典型的な構造です。これはまた、論文など比較的形式がととのった論証を行う文章の構成にも通じます。
アウトラインと原稿 I. 私立高校は教育の多様性を推進している。 A. 教育の多様化は良い。 1. 人は多様な意見や価値観を有している。 2. 第二次大戦前の画一的な教育が戦争につながった。 B. 私立高校は公立高校より自由である。 1. 私立高校は文部科学省の影響が少ない。 2. 私立高校は教育委員会の影響が少ない。 II. 私立高校は公立高校より改善努力に熱心である。 (中略) III. 私立は公立より国際交流に熱心である。(以下略) 2007/3/28 48	スピーチの構成を考える上で役に立つのがアウトラインです。原稿を準備する際に、先にアウトラインを作るか、一度書いてみてアウトラインに直して構成を点検するかは、個人の書く過程の好みでもありますので、自分がやりやすいほうでいいでしょう。作文の教科書によっては、まずアウトライン、それから文章にするという画一的な過程を説く本もありますが、実際はどういう書き方が適しているかは個人差もあります。
5.2. 反論単位 1. 議論を特定する(番号と見出し) 2. 相手の議論を要約する 3. 反論を述べる 4. 反論を支持する(説明、証拠資料) 5. 反論を締めくくる 2007/3/28 49	2 番目以降のスピーチは相手への反論(反駁)含みますので、相手の議論を紹介してそれに反論するという構成をとります。

まとめ

- ディベートは意思決定の手段
- 教育ディベートは議論法の訓練
- 外国語教育では四技能の実習室
- 台湾の日本語学習で使えそう？

みなさんもディベートをしてみませんか

2007/3/28

50

それでは、今までの話を簡単にまとめておきましょう。

まず、ディベートは本質的な機能は意思決定の手段です。

次に、教育ディベートは議論法の訓練です。

さらに、外国語教育ではいろいろな導入方法が考えられ、四技能の実習室として機能します。

さて皆さんもディベートをしてみませんか。日本語ディベートクラブを作るのもいいかもしれません。私はすぐ日本に戻りますので、あまり勝手なことは言えませんが、台湾滞在中はもっとディベートのことを知りたいという学生さんがいればお手伝いしたいと思います。また、現在はインターネットが発達していますから、日本と台湾の間でも電子メールや音声通話を使ってディベートもできます。

また、九州大学の大学院でディベートやそのほかコミュニケーション関係のテーマで勉強しようという学生さんがいれば、できるだけ受け入れたいと思っています。

(講演では時間があれば ESS の話をする予定でしたが、ここでは省略します。)

「ディベート入門」問題（井上奈良彦 2006 年 9 月）

問題 1 次の 1～6 ははディベートの論題としてふさわしいか

1. 「台湾大学は世界一の大学である」
2. 「台湾の民主化はどうすべきか」
3. 「残酷な人殺しのような死刑は廃止すべきである」
4. 「喫煙の禁止」
5. 「小売店のビニール袋は有料にすべきである」
6. 「死後の世界は存在する」

問題 2 日本語の授業でディベートをするならどんな論題がいいか考えてみよう

問題 3 選んだ論題の意味を考えてみよう。

問題 4 争点と論点を考えてみよう。

問題 5 肯定側の論点を一つ、否定側の論点を一つ書いてみよう。

問題 6 それぞれに反論を考えてみよう。

問題 7 原子力発電の安全性を議論するとき、次のような資料の出典をどう評価するか。専門性と利害関係から考えてみよう。

1. 政府の原子力推進室の担当者
2. 電力会社のホームページ
3. 原子力反対派のホームページ
4. 電力会社の原子力技師
5. 原子力工学専門の大学教授
6. 新聞記者
7. Google の検索で見つけたブログ (Blog)

問題 8 次の議論について、主張に下線を引きなさい。その根拠となっている情報を□で囲みなさい。根拠から主張に至る推論（論拠）は何か。その推論は正しいだろうか。

（１）日本人女性は家計を握っている。田中さんの奥さんは一家の収入支出を全部管理している。山本さんの家でもご主人は給料を全部奥さんに渡して毎月お小遣いをもらっているようです。他の日本人の友人に聞いてもみな同じです。

（２）日本は二度と他国を侵略することはないでしょう。先日も小泉首相が日本はそのような意図はまったくないと言っていました。

（３）労働省の統計によると、昨年度に大学を卒業し進学しなかった女子学生の 20% が職に就いていないが、同じく男子学生では就職していない学生は 5% である。このことから女子学生は男子学生より就職が難しいと考えられる。

付録 4 ディベート入門（日本語テキスト）

井上奈良彦（2006 年 9 月改定）

本稿では、最初に簡単にここで紹介する「ディベート」とは何かを規定し、以下、教育ディベートにおける論題の選定から実際の試合までの過程を順に紹介し、最後にディベートと倫理の問題について簡単に触れる。

目次

1. ディベートの基本

- 1.1. ディベートとはなにか
- 1.2. 教育ディベート
- 1.3. ディベートと話し方教育

2. 論題の選定

3. ディベートの準備から試合まで

- 3.1. 論題の分析
 - 3.1.1. 用語の定義
 - 3.1.2. 争点の発見
- 3.2. 資料調査
- 3.3. 肯定・否定論旨の構築
- 3.4. 反論と反駁
- 3.5. 口頭発表
- 3.6. メモの取り方
- 3.7. 反対尋問
- 3.8. 伝達方法

4. 議論のしくみ

- 4.1. 議論の構造
- 4.2. 根拠
- 4.3. 論拠

5. スピーチの構成

- 5.1. 肯定側第 1 立論
- 5.2. 反論単位

6. ディベートの評価

- 6.1. 勝敗
- 6.2. 技能の評価

7. ディベートと倫理

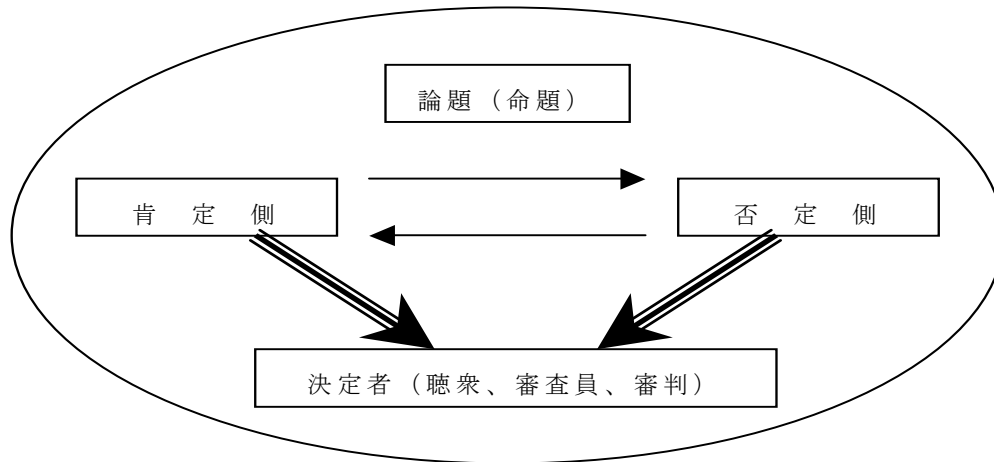
参考資料

1. ディベートの基本

1.1. ディベートとはなにか

ディベートという語は広義には、何かの問題について賛否両論を論じ合うことを意味する。車を買うべきかどうかを検討したり、アイドル歌手の歌が上手かどうかを言い争ったりすることも含まれる。スピーチ・コミュニケーション学の考え方では、（１）明確な論題について（２）肯定・否定の側に立つ参加者が（３）公正な規則の下で（４）合理的な議論によって（５）第三者を説得しようとする過程、と定義できる。ディベートはまた、問題の賛否両論を考慮することによって蓋然的真理（多分そうだろうという答え）を探究しそれを弁論によって伝達し擁護する過程と見ることもできる。実社会では、議会や法廷での論争が典型的なものである。ビジネスにおける意思決定なども、新たな商品企画などについて賛否両論を比較検討して企画の採否を決定するような過程はディベートの一種と考えられる。

図 1. ディベートにおけるコミュニケーションの基本構造



1.2. アカデミック・ディベート

学校などで議論の訓練のために行うディベートを教育ディベート（アカデミック・ディベート）と呼び、教育効果を上げるために様々なルールや教育方法が論じられている。西洋では古代ギリシャ以来ディベート教育の長い伝統がある。英語圏ではオックスフォード・ユニオンなどの学生活動が19世紀以降発展した。アメリカでは20世紀に入ってスピーチ学が学問分野として確立するに伴い、教員が組織的に指導するようになり、イギリス系とは独自の発達を遂げた。このディベートは日本には福沢の三田演説会での「弁論会」の訓練、第二次大戦直後の討論大会、そして近年の新たなブーム、と様々な導入が試みられて来た。主として、アメリカで発達した論理的分析や資料を重視するスタイルがいわゆる「アカデミック・ディベート」として英語クラブを中心に導入され、日本語でのディベートもこのスタイルを継承している。ただし、1990年代以降、大学の英語クラブではイギリス系の即興型ディベート、いわゆる「パーラメンタリー・ディベート」が台頭し人気を二分するようになった。

典型的な教育ディベートの試合のやり方は、例えば、「日本は裁判に陪審員制度を導入すべし」といった論題（命題）について肯定側チームと否定側チームがスピーチを交互に行う。まず、主要論点を提出する立論を肯定第1、否定第1、肯定第2、否定第2と行う（普通8分ずつ）。それぞれに3分間の反対尋問（質疑）が相手チームから行われる。次いで、反論・弁護を行う反駁を逆に否定側から初めて計4回行う（各4分）。最後に、審査員が講評と勝敗を口頭や審査用紙で伝える。日本の「ディベート甲子園」と呼ばれる中高生の大会や台湾の日本語ディベート大会で用いられている形式は、立論が肯定否定1回ずつで、スピーチの時間もやや短い。

議論の訓練のために行うのであるから、参加者は肯定・否定両側の議論を準備し、一つのディベートの中では自分の信念とは無関係に抽選などで決めた立場を最後まで守り通す。その立場になったつもりで最善を尽くすロール・プレーと考えればよい。

1.3. ディベートと話し方教育

ディベートは「音声言語活動」ではない、というのは極論であるが、音声言語は本質的な部分ではない、と筆者は考えている。確かに、ディベートは口頭で意見を戦わせる言語活動として、口頭コミ

コミュニケーションの一つとして存在する。しかし、口頭発表はディベート活動の一部にすぎない。ディベート教育の本質は論理的な議論の力を養うことにある。文章の論点を理解・分析・批評する力を養う。また、自分の主張を論理的に組み立て表現する訓練をする。口頭発表においても、原稿を用意したり、相手の発言やその反論をメモしたりすることは不可欠である。ディベートは、現代の多くのコミュニケーション活動と同様、書き言葉の助けなしには成り立たない

2. 論題の選定

良いディベートのためには適切な論題を設定しなければならない。論題は明確な問題を一つだけ含む肯定文で表す。内容は、事実・価値に関するものや行動や政策についてのものがある。例を挙げてみよう。

- 「地球以外に高等生命体は存在する」 (事実)
- 「私立大学は国立大学より優れている」 (価値)
- 「高等学校の制服は廃止すべきである」 (政策)

論題の決定にはさらに次のような点に注意したい。

- (1) 肯定・否定それぞれの側に有利な論点があって双方の勝ち目が同じぐらいになるようにする。
- (2) 用語は中立なものにする。
- (3) 論題は現状の制度や一般の考え否定するような表現にする。これよって、肯定側は現状を変革し論題を証明する責任を負い、否定側がそれに反対する、という立場が明確になる。
- (4) 参加者の関心を引く問題で、資料調査を含めてあまり難しくないものを選びたい。

課題 1. 論題と記事を見つける。授業で行うディベートの論題に使えるものを2題書き、関連する記事を新聞、雑誌、Web から探して添付しなさい。記事には標準的な書誌情報を付記すること。

課題 2. 賛否の理由を考える。選んだ論題について肯定・否定の理由をできるだけ多数挙げてみなさい。その中から重要と思われる理由を肯定・否定3点ずつ書きなさい。

課題 3. 論題選定。グループ内で各人の選んだ論題について、クラスでディベートをするのにふさわしいものを選びなさい。さらに、グループで選んだ候補の中からクラス全体で投票し、論題決定しよう。(グループ毎に別の論題を選択することもできます。)

3. ディベートの準備から試合まで

この節では、ディベートをするための準備を論題が決まってから、実際にディベート(口頭発表)をするところまで追ってみる。各段階は必要に応じて何回も繰り返される。

3.1. 論題の分析

論題を参加者と一緒に選んだ場合は既に分析はかなり進んでいるだろう。そうでない場合、参加者は与えられた論題を解釈し分析することを一からはじめなければならない。

3.1.1. 用語の定義

分析の第一歩は、論題中の用語を定義し論題を解釈することである。これは単語の辞書的意味を調べるだけにとどまらない。「日本政府は公共の場所での喫煙を禁止すべきである」という論題では、具体的に何が「喫煙」に当たるのか、「公共の場所」とはどういう場所を含めてどういう場所を含めないのか、などを考える。

課題 4. 論題の解釈。 論題の解釈を話し合いなさい。(4-2) 政策論題の場合は肯定側プランを書いてみなさい(誰が、どのような内容の政策項目を、いつから、どのように、実施するのか)。(4-1) 論題中の用語の定義を辞書、辞典、教科書などから見つけなさい。引用した定義には出典を忘れないように。

3.1.2. 争点の発見

肯定・否定の側にどのような主要争点があるかを検討する。争点とは論題の肯定・否定に決定的に影響する大きな論点である。たとえば被告人が殺人罪かどうかを問う裁判(一種のディベート)では、動機の有無は争点であり、動機を立証するための個々の論点(被告人の金銭上の問題、被告と被害者の恋愛関係の問題など)と区別される。つまり、金銭問題の論点は否定されても恋愛関係の論点から動機という争点は立証される可能性がある。

政策論題については定常争点(stock issues)と呼ばれる着眼点が長年のディベート実践の中で整理されている。次の質問に肯定側は「はい」、否定側は「いいえ」と答えられるように論題を分析するとよい。この定常争点は分析のための道具であって、実際にディベートのスピーチを展開する場合には種々の立件方法(ケース戦略)というものが考えられる(後述)。

(1) **問題。** 現状の政策を変えないといけないほど重大な問題があるか。問題の質的・量的深刻さを肯定側は論証する。論題を採択すれば得られる利益も争点に当たる。(害、重大性、必要性、harm, ill, significance, need などと呼ばれる。)

(2) **原因。** 新しいやり方を採用しない限り解決できないほど問題が現状の制度と深く結び付いているか。(内因性(inherency)、blame とも呼ばれる。)

(3) **解決策。** 問題を解決するための実行(実施)可能な政策案(プラン)はあるか。論題の規定する政策を具体化し、技術・人材・資源などの面で実行可能性を検討する。実質的な議論のために、肯定側の提案が国会を通るかどうかが憲法違反かどうかは問題にしない。(実行可能性は英語では practicality や feasibility、時に workability という用語が使われる。)

(4) **解決性。** 肯定側政策案(プラン)は問題を解決するか。肯定側の計画が実行されたと仮定して、それが問題を解決する過程を検討する。(英語では solvency という用語が使われる。)

(5) **不利益(の不在)。** 政策案の利益は不利益を上回るか。政策には副作用としての不利益が付きまとう。否定側から具体的な不利益を提出し利益を上回ることを論証する。肯定側は利益の方が大きいことを論証する。(英語では disadvantage という用語。デメリットやプランの弊害とも呼ばれる。)

課題 5. 争点の発見。 論題に関係する争点を書き出しなさい。政策論題の場合は「定常争点」(Stock Issues) 利用して分析しなさい。

3.2. 資料調査

ディベートでは客観資料に基づく議論を重視するので、資料調査が欠かせない。図書館等を使い、最近ではコンピューターネットワークの利用を含めて資料調査の方法を訓練する役割がある。(本稿では資料調査の詳細は省略)

課題 6. 資料リスト作成。 参考資料のリスト(書籍、記事、Web ページ)を作りなさい。書式は標準的な書き方に従うこと。このリストはとりあえずのもので、学期中を通して更新すること。

3.3. 肯定・否定論旨の構築(立件方法)

論題の分析と資料調査で得られた肯定・否定の議論をどのように提示するか、全体的な戦略を考えなければならない。肯定側は事前に一貫した立件方法(戦略)を準備するが、否定側は予想される肯定側の立件方法に応じた準備が必要である。また、選択した立件方法に基づいて具体的にスピーチをまとめる必要がある。

一つのディベートで使う肯定(又は否定)側の立場をまとめたものをケース(立件案)と呼ぶ。一つの論題に複数のケースが考えられる。喫煙禁止の論題なら、肯定側は喫煙者自身の健康の害、間接喫煙による害、タバコの火による火災等を防ぐ、などのケースが考えられる。いくつかを組み合わせることもできる。現状に堪え難い問題は無くとも、肯定側の政策は大きな利益を産むから、得られるべき利益を得ていないことが問題であると論ずる作戦もある。

否定側にもいくつかの立場（作戦）がある。肯定側の論点を順に否定していく「逐次反論（straight refutation）」や現状の制度の利点を積極的に示していく「現状擁護」作戦などがある。通常これと組み合わされるのが、肯定側の提案する政策から新たに生じる不利益の論証である。さらに、問題は認めて論題が規定する以外の対抗案（counterplan）の方が肯定側の案よりすぐれた解決策であると論ずる作戦もある。

分析を進め、相手からの反論にどう応えるかやどのような資料が手元にあるかなども考慮し、立論のスピーチを作成する。（実際のスピーチの構成は第5節）双方とも立論（constructive speech）で自分達のケースの全体を示し、主要論点を論証できるようにする。ディベートの後半になって急に主要論点を加えたり変更してはいけない。

課題 7. 肯定・否定のケース。 チームで肯定否定それぞれどのようなケースができるか話し合いなさい。自分のチームが使う予定のないケースでも一応作ってみて、それに対する反論を考えなさい。各人、肯定側ケースのアウトラインと否定側ケースのアウトラインを1点ずつ書きなさい。アウトラインは第5.1節参照

3.4. 反論と反駁

これがディベートの本領である。相手の議論を吟味し自分の議論を立て直すという過程を通じて、論理的思考を養い物事の真理に近づこうとするのである。

反論（refutation）は最初のスピーチ（肯定第1立論）以外のどのスピーチにも含まれる。原則として相手の主要論点に対する反論はそれが提出された直後の自分達のスピーチで行うべきである。沈黙は同意とみなされる。

反駁（rebuttal）という用語は二通りの意味で使われる。一つは、「再構築（立て直し）」の意味で、各チーム2回目以降のスピーチで相手の反論に再反論し自分達の主張を立て直すことである。もう一つは、ディベート後半のスピーチの名称で「否定側第2反駁」のように用いられる。反駁のスピーチでは、立論で提出された論点について議論を深めるために、反論と反駁を行う。相手の議論の不備を指摘したり、自分達の論点に新しい理由付けや資料を提出したりするが、新たな主要論点を出してはいけない。双方最後のスピーチでは全体のまとめも行う。

ディベートにおいて効果的な反論・反駁をするには、事前の準備が欠かせない。相手の議論を予測し、それに対する自分達の議論を用意する。実際のディベートでは相手の議論に合わせて、用意した議論を組み合わせたり修正したりして発表する。このようなあらかじめ準備した議論を書いた原稿を裁判の用語から準備書面（ブリーフ、brief）と呼んでいる。次に示すのは、「私立高校は公立高校よりすぐれている」という論題でディベートを想定して、例として筆者が作ったものである（証拠資料も実際のものではない）。否定側の、「公立高校の方が学費が安い」という論点に対する肯定側の反駁用である。

図 2. 準備書面の例

肯定（学費）

（否定：公立高校の学費安い）

I. 学費の価値あり。たとえ私立のほうが学費が高くても、それだけの価値はある。教育は費用の問題ではなく質の問題である。

II. 大差なし。学費の問題は教育費全体の中で考えれば大した差ではない。

A. 3年間での差は100万円。XX省の統計によると2005年度の公立高校1年間の諸経費は約31万円に対し、私立高校では約64万円である。そうすると1年間での差額は33万円、3年間では約100万円になる。

B. 子供一人の教育費の総額は2400万円。『XX新聞』2006年4月1日によると、「ABC保険の調査では、子供一人に対して大学卒業までに保護者が支払う教育費の総額は...私立大学医学部の場合、約2400万円、...国立大学の文系の場合約600万円と推計されている。」このように2400万円にも達する。

C. 高校における私立と公立の差は数パーセント。教育費全体が2400万円の場合わずか4%にすぎない。

D. 私立の方が安いかもしれない。さらに、公立高校に行って少しぐらい学費が安くても浪人して予備校に行ったり、国立医学部に入れず私立医学部に行けば、私立校から国立医学部に合格したほうが安くなる。

結局、私立の学費は必ずしも高いとは言えない。

課題 8. 準備書面の作成。 チーム内で各人が 1、2 点の争点を担当しなさい。各人は資料を集め（他の人が集めた資料も使う）肯定側で使える書面を 2 点、否定側で使える書面を 2 点書きなさい。準備書面はチームで共有し、最後の試合までに増やしていくようにしなさい。

3.5. 口頭発表

口頭発表の準備には、ディベートが始まる前にすることと、ディベートの中ですることがある。ディベートが始まる前には、肯定側第 1 立論の原稿の準備、前述の準備書面の用意、それを読む練習などがある。ディベートが始まってからは、相手の議論を聞いてメモを取り、それに対する反論をメモしたり、用意してある準備書面を組み合わせたりして次のスピーチの準備をする。

肯定側第 1 立論はディベートの中で最初のスピーチなのでそのまま読めばいい原稿を用意する。肯定側第 1 立論以外のスピーチは、理想的には用意した準備書面を組み合わせたりしてその場で準備しなければならない。準備書面は予想される論点毎に自分達の反論・反駁のポイントを書き、その理由付けや証拠資料を添付する。

口頭発表をどの程度準備するか、どの程度即興で行うかは、ディベートの訓練で何を重視するかによって違ってくる。また、母語で行うのか外国語で行うのかにもよるだろう。分析、資料収集、論理的な議論の構成などの能力を養成することに重きを置くならば、事前に肯定側と否定側のチームがスピーチを交換して反論のスピーチを作り、さらにそれを交換するというようにして、ディベート全体のシナリオを作ってしまうのも手である。もし授業で一人の学生について、ディベートでスピーチを発表する機会が一、二回しかないならば、このシナリオ方式の方が、その場でスピーチをするよりも得るところが大きいだろう。その場で考えていいかげんなスピーチをするよりも、きちんとした議論を組み立てて用意したスピーチを発表するほうが望ましい。

逆に、口頭で即座の理由付けや反論の技能を訓練することに主眼があるならば、原稿を用意しないでしゃべることになる。最初の立論は準備するが、その後のスピーチは即席とすることもできる。完全に即興型（パラメンタリー・ディベートと呼ばれる）の場合、ディベートの始まる直前（たとえば 20 分前）に論点を発表して両チームが準備を始めるという方法となる。この場合、もちろん引用資料は用いない。

課題 9. 肯定側立論を書く。 チームで肯定側第 1 立論を考え、全体の原稿を書きなさい。立論の構成は第 5.1 節参照。

課題 10. 否定側立論を書く。 肯定側第 1 立論を対戦相手と交換し、チームで反論と否定側独自の論点（肯定側提案から生じる新たな不利益など）を考えなさい。否定側第 1 立論全体を原稿にしなさい。

3.6. メモの取り方

反論・反駁を効果的かつ確実に行うために、ディベートではフロー・シートと呼ばれる特別なメモの取り方がある。横長の紙を用意して（ノートの見開きを使ってもよい）、スピーチの数だけ縦長の欄を設ける。左端の欄に肯定側第 1 立論のポイントを箇条書きにする。一枚に書ききれない場合は、2 枚目の紙を使う。否定側第 1 立論で、肯定側の論点に対する反論があれば、それを二列目の欄の対応するところに書き込む。反論がなければ空白になる（下の図では肯定側の II.A. に対応するところ）。位置がずれてくれば、矢印などでつないでおく。

ある論点について反論・反駁が繰り返されると、議論の流れは紙の上で左から右へ記録される。こうすると、ディベートの途中でも、最後でも、どの論点がどう反論されたか、また反論されていないか等が一目瞭然になる。

図 3. フロー・シートの例

肯定	否定	肯定	否定	
I. XXX A. XXX	1. XXX 2. XXX	XXX XXX		以下省略
B. XXX			1. XXX 2. XXX	
II. XXX A. XXX	XXX		XXX	
以下省略			I. XXX	

メモをとる時は略号や記号を使ってすばやく要点を書き留めなければならない。話し手が論点に番号や小見出しを付けていれば、それを利用する。肯定側と否定側の議論のメモは、違う色のボールペンを使うなどの工夫も役に立つ。フロー・シート自体は、ディベート特有のメモの取り方だが、話を聞きながらメモを取ったり、自分が話す前に要点をメモしたりして、それを基に話をするというのは、効果的な口頭コミュニケーションに大いに役立つ。

課題 11. フローシートと判定。ディベートの試合を実際に（またはビデオで）見てフローシートにメモを取り、判定を出しなさい。判定については第 6.1 節参照。

3.7. 反対尋問（質疑）

試合形式によっては、各立論の後に相手側からの反対尋問の時間が設けられている。これには主に 3 つの目的がある。（1）立論の不明確な点を確認する。（2）相手の議論の弱い点を暴く。（3）後で自分達が述べる議論に必要な情報を相手から引き出しておく。（2）と（3）は即興で行うのは難しいので、授業で前述のシナリオ方式で発表させる場合は、事前に相手チームに質問を教える方が良い。ディベート大会のような場合も、事前にどのような質問をするか準備したり、想定問答集を作ることでもできる。

反対尋問では、質問をする側は質問だけが許され、議論をすることは許されていない。答える側はもちろん正直に答えなければならない。反対尋問はうまくいけば一見華々しく、いかにも口頭でのコミュニケーション活動が行われているという気になるが、論理的な議論を秩序立てて組み立てるといった目的にはかたににくい。注意しないと水掛け論の応酬のようになってしまう。あくまでも立論に対する「反対尋問」であることを忘れずに。

課題 12. 反対尋問。グループ内で、用意した立論を一人が読み上げ、他の人は質問をしなさい。立論を読んだ人が答えられなければ、他の人が答えてみましょう。他のチームの立論に対する質問を考えなさい。

3.8. 伝達方法

何よりもまず、大きな声で部屋の後ろに座っている聴衆にも聞こえることが肝心である。発声練習をしてみるのもいいだろう。次に、話す速度。速くなり過ぎると聞いている方がついていけなくなる。一般的にはある程度早口の方が説得力が増すという研究もあるし、大学のクラブ活動で行われている競技ディベート（ディベート大会）では、日米とも相当早口で行われるが、これは、競技という特殊な状況でのことで、教室に持ち込むわけにはいかない。大学生のディベート大会などを見学する場合は、この点を留意すべきだ。「ディベート甲子園」と呼ばれる中高生のディベート大会でも、一般的な話し言葉の感覚からすると相当早口と感じられるスピーチが多い。

課題 13. スピーチの練習。用意した立論や準備書面を教室で発表するつもりで読んでみなさい。誰かに聞いてもらい、助言をもらいなさい。

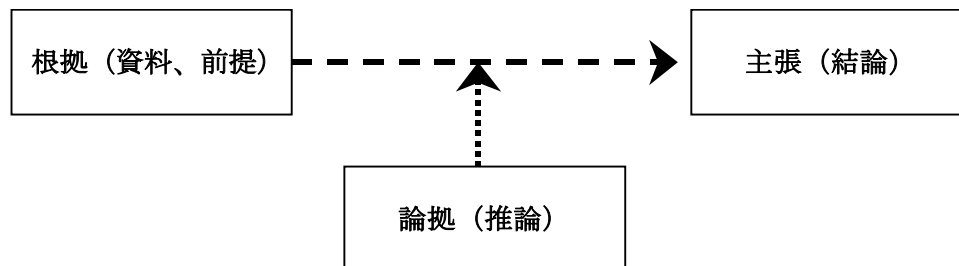
4. 議論のしくみ

ディベートでもスピーチでも論理的な議論を組み立てるにはその仕組みを知らなければならない。また、文章を書いたり読んだりする時、以下に述べるようなことに注意すれば、論理的・批判的思考能力の養成に役立つ。情報が氾濫する現代社会において情報の送り手にも受け手にも不可欠の能力である。

4.1. 議論の構造

個々の議論は、単純化すると、話し手（書き手）が伝えたい結論である「主張（結論）」、その「根拠」となる情報（参加者が共有している常識（前提）や文献などからの証拠資料）、その両者をつなぐ「論拠（推論過程）」から成り立っている。図解すると次のようになる。

図 4. 議論の基本構造



4.2. 根拠

根拠とは、主張に到達する議論の出発点となる情報である。文献からの引用（証拠資料）だけでなく、周知の事実等も含まれる。教育ディベートでは客観性を重んじるために、文献からの引用が重視される。いったん論証された主張を証拠としてさらに別の主張を論証することもある。

証拠資料には主として、事実、統計、専門家の意見がある。より良い証拠を探したり、相手の証拠の問題点を指摘するために、次のような点に注目したい。

- (1) 外的整合性。相互に矛盾する証拠があればどちらかもしくは両方が間違っているのではないかと疑う。
- (2) 内的整合性。一つの資料や発言の中で首尾一貫しなかったり矛盾があれば証拠の質は低い。
- (3) 出典の信頼性。出典が明示されているか。出典は権威あるものか、新しいか、中立か、等。歴史的イベントの記録などはその時点に近い資料のほうが良い場合もある。
- (4) 統計の検証。調査方法は適切だったか、標本の数十分か、抽出方法は適切か、質問の仕方はどうか、等。
- (5) 専門家の検証。問題によっては専門家の意見に頼らなければならないことも多い。発言している事柄の権威者か、偏見はないか、理由を挙げて意見を述べているか、等に注意。原子力発電問題のディベートで、電力会社の技術者は原子力発電の専門家かもしれないが、安全性についての発言は利害関係による偏見があるかもしれない。

4.3. 論拠

自分の主張をそのまま表す根拠があるとは限らない。利用できる根拠に基づいて主張を論証する。その根拠と主張を結び付けるのが論拠（ワラント、warrant）である。論拠には一般的な論理法則（推論過程）やそれ自体論証を要する情報がある。幾つかの種類の論拠を取り上げてみよう。

(1) 類推。原発の安全性の議論は類推に基づくことがよくある。「チェルノブイリとスリーマイル島の原発が重大事故を起こした」という証拠を引用して根拠とし、「日本の原発も重大事故を起こすだろう」と主張するとしよう。論拠は「日本の原発と外国の事故を起こした原発が似ている」となる。この類推は一概には受け入れられないので別に証拠を使って論証しなければならないだろう。類推に

基づく議論では、比較するものどうしだが、その議論に本質的な点において似ていなければならない。原発の例では、原子炉の構造や安全対策が本質的に同じであることが重要になる。

（２）一般化。複数の例から一般法則を導く。「A社の車Bはブレーキに欠陥がある」という主張を論証するために「車BはC氏所有のものも、D氏のもの、F氏のもの、E氏のもの、ブレーキに欠陥があった」という証拠があったとする。論拠は、「車Bは全て同じであろう（同一種の多数について言えることはその全てについても言えるだろう）」という規則性の仮定である。例が量的に十分か、典型的なものか、反例はないか、等に注意したい。

（３）因果関係。原因から結果を予測する場合と、結果から原因を推測する場合がある。原因と結果の間に一对一の関係がない場合は要注意である。「習慣的に喫煙すると肺癌を引き起こす」という因果関係が別の証拠から証明されているとしよう。これを論拠にして、「A氏が習慣的に喫煙する」という証拠から、「A氏は肺癌になるだろう」と主張できる。逆に「B氏が肺癌になった」という証拠から、「B氏は習慣的に喫煙していただろう」という原因の存在は証明できない。肺癌の原因は他にもあるからである。

政策論題で問題の解決性を証明するのに因果関係を用いる時も注意が必用である。喫煙を禁止しても肺癌は完全にはなくなる。先程のA氏のような人は手遅れかもしれないし、喫煙以外の原因から生じる肺癌はなくなる。「新たに喫煙を始めたかもしれない人について、喫煙が原因で生じる肺癌を防げる」という主張はできる。

因果関係が証明できない事象の間にも統計的に相関関係がある場合、それを論拠にする議論も組み立てられる。

（４）しるし。相関関係（共起関係）は因果関係以外の可能性もある。たとえば、人やモノの属性について、髪が黒く肌が黄色人種の肌色で日本語を話していたら、日本人だろうと推測できる。定義による場合は、日本国籍を持つ人を日本人、という定義を採用すれば、パスポート所持や戸籍の存在が日本人であることの証明になる。

ここに挙げたような論拠に基づく論証は、数学や形式論理学の証明とは違い、「ほぼ間違いがない」とか「多分そうだろう」という確からしさが高いか低いかの問題になる場合がほとんどである。100%確実な証明もできないが、1つの反例で議論が完全につぶれてしまうとも限らない。ディベートの議論はこのようなものが多いので、「われわれの証明は完璧です」とか「相手側の議論は完全に間違っている」といった一方的な発言は要注意である。

5. スピーチの構成

ディベートでは論理的で分かりやすいスピーチの構成が要求される。ライティングやリーディングでも扱うべきパラグラフやエッセーの構成と共通するところが多いので是非連携を図りたい。ここでは、肯定側第1立論を例にスピーチ全体の構成を説明し、次に、反論や反駁をする時の最少単位の構成を説明する。

5.1. 肯定側第1立論

スピーチ全体の構成は、導入部、本論部、結論部の3部分からなる。導入部では論文（論理的なエッセー）と同様に、スピーチ全体の主張（結論）にあたるもの、本論部の内容の予告編（道路地図、設計図、見取り図）がある。本論部では、いくつかの主要論点が展開され、各主要論点は小論点によって支えられている。結論部では、各主要論点をまとめる要約と全体の結論の繰り返しで締めくくる。模式化すると図5のようになる。

各論点の構成はパラグラフに相当し、主題文（トピック・センテンス）とその支持文（詳細内容）からなる。ディベートでは、番号、小見出し、論点、証拠、という構成になることが多い。

スピーチを書く時はまずアウトラインを作って構成を吟味してほしい。図6に挙げるのは論題「私立高校のほうか公立高校よりすぐれている」の肯定が話題1立論の例である。

図 5. スピーチの構成

導入部	あいさつ
	全体の結論（論題に対する肯定否定の立場）
	予告編
本論部	論点 1
	論点 2
	論点 3
	．．．
結論部	要約
	全体の結論
	あいさつ

図 6. 肯定側第 1 立論のアウトライン例

I. 私立高校は教育の多様性を推進している。 A. 教育の多様化は良い。 1. 人は多様な意見や価値観を有している。 2. 第二次大戦前の画一的な教育が戦争につながった。 B. 私立高校は公立高校より自由である。 1. 私立高校は文部科学省の影響が少ない。 2. 私立高校は教育委員会の影響が少ない。 II. 私立高校は公立高校より改善努力に熱心である。 (中略) III. 私立は公立より国際交流に熱心である。 (以下略)
--

完成原稿は次のようになる。

肯定側第 1 立論の例

われわれ肯定側は、「私立高校は公立高校よりすぐれている」という論題を支持します。理由は 3 点あり、(1) 多様性、(2) 改善努力、(3) 国際交流、です。それぞれ説明していきます。 理由 1、多様性。私立高校は教育の多様性を推進しています。 小論点 A、教育の多様性は良い。第 1 に、人は多様な意見や価値観を有しています。もし学校で同じことを同じ方法で教えたのでは、生徒は自分や家庭の価値観との相違にストレスを感じ、心的障害をきたします。第 2 に、第二次世界大戦前の画一的な国粋主義的教育が日本を戦争へ導いたと言えます。この過ちを繰り返してはいけません。教育学者の九州大学 XX 教授は 2000 年の著書で、．．．と述べています。つまり、私立学校は国粋主義的教育復活を阻止する鍵となります。 小論点 B、私立高校は公立高校より自由なので、多様性のある教育が可能です。私立学校は、『朝日新聞』1993 年 1 月 11 日付記事が紹介するように、法律によってその創立者の精神や独自性を推進できることが保障されています。一方、公立学校は都道府県の教育委員会を介して文部科学省に操られています。 このように、私立学校は教育の多様性という点ですぐれています。(以下略) 理由 2、改善努力。私立高校は公立高校の改善努力に熱心です。(以下略) 理由 3、国際交流。私立は公立より国際交流に熱心です。(以下略) 以上、われわれ肯定側は、教育の多様性、改善努力、国際交流、という 3 つの理由から私立高校のほうが公立高校よりすぐれている、と主張します。ご清聴ありがとうございました。

ディベートのスピーチでは、時間の節約のために導入部と結論部は非常に短いことが多い。聞いている人が論題についてよく知っていて、しっかりとフロー・シートにメモを取っていることが前提になる。そうでない学園祭での模擬ディベート等の場合は、論題の導入や最後のまとめにもっと分量を割く必要がある。

5.2. 反論単位

反論・反駁する時に役に立つのが反論単位と呼ばれる短い単位の構成である。まず一般的な型を示す。

反論単位

1. 議論を特定する（番号と見出し）
2. 相手の議論を要約する
3. 反論を述べる
4. 反論を支持する（説明、証拠資料）
5. 反論を締めくくる

次の具体例は私立・公立学校の論題で、前回紹介した準備書面を利用している。こういった単位をいくつも組み合わせることで一つのスピーチが出来上がる。

反論スピーチの例

否定側の X 番目の議論。公立の方が学費が安いと言っていました。反論が 2 点あります。

1 点目は、価値あり、です。たとえ私立の学費が公立より高くても、それだけの価値はあります。教育は費用の問題ではなく、質の問題です。

反論の 2 点目は、大差なし、です。学費の違いは教育費全体の中で考えれば大した差ではありません。（以下略。図 2. 準備書面参照）

このように、学費の議論は重要ではなく、私立高校の方がすぐれているという論題を否定する理由にはなりません。

6. ディベートの評価

ディベートの評価は試合の勝敗とディベート技能の評価という二つの側面がある。通常審査員は試合後、審査票（バロット）や口頭で勝敗を説明し、個々の技能や議論についての講評を行う。

6.1. 勝敗

勝敗は、基本的には肯定側が論題がおそらく正しいだろうということが論証できたかどうかで判断する。否定側の反論を受けて最終的にはそのように論証できなかった、と判断されれば否定側の勝ちとなる。ここでは、肯定側が論題の立証責任を負い、否定側には「推定」の利益が働くと考える。事実・価値判断の命題として殺人罪を立証する検察（肯定側）には立証責任があり、被告（否定側）には推定無罪の原理が働く。

政策論題であれば、肯定側が、論題を具体化した政策案（プラン）が現状の政策より比較利益を生むということをおそらくそうだろうという程度に論証できれば、肯定側の価値となる。否定側は、政策案を採択しても現状と対して変わらないか逆に新たな弊害の方が大きくなるだろうということを審査員に納得してもらえばよい。

このような判断を行う審査員（審判）は、論題についての自分の知識や意見は一時棚上げにして、一つのディベートの試合の中で肯定否定の双方から提出された議論だけを判断材料として評価を行う。そのためには、試合の議論をできるだけ詳細にメモし、議論の流れ（展開）を追っていかなければならない。審査員はできるだけ客観的に判定を下す努力をするが、ディベートのような議論の評価においては純粋に客観的な判断ということはいえなない。あくまでも聞き取った議論の解釈に基づくわけ

であるから、スポーツにたとえれば得点競技よりはフィギュア・スケートや体操のような審査競技に近いと考えた方がよい。

6.2. 技能の評価

技能の評価は、通常、審査票（評価票、判定票、採点票、バロット）に記入し、参加者にフィードバックする。スピーチ全体や参加者の1試合内での総合的なディベート技能を全体的に点数化する場合と、個別の技能を点数化する場合がある。たとえば、「論点の分析」「証拠資料」「推論の論理性」「スピーチ構成」「口頭伝達（デリバリー）」などの項目が用いられる。この点数のチーム合計と上記の議論内容に基づく勝敗は必ずしも一致しない。たとえばサッカーの試合で、個々の技能にすぐれた選手をそろえてもシュートを決められず敗北するチームが出たり、ボクシングで審判の得点合計で優勢であった選手が突然ノックアウトされるようなものである。

7. ディベートと倫理

ディベートによって培われる議論の力は自分の立場を弁護し相手の議論を攻撃する強力な武器である。このような強力な武器の使用に伴う倫理的責任について少し触れておく。

ディベートで自分の本当の意見とは違うことを言うのは倫理的だろうか。ディベートでは肯定側・否定側という立場の代弁者として議論をしていることに注意したい。ディベートの目的は双方が最善の議論を戦わせて第三者に最良の決断をする根拠を示すことにある。参加者も意見と発言者を区別することによってとかく個人攻撃になりやすい論争の弊害を改めるようになる。ディベートを通じて問題をよりよく理解すれば、個人の意見もさらに良いものが形成される。

教育ディベートはある意味で現実から離れたゲームである。自由な議論を認めることで論理的・創造的思考を訓練する。しかし、ゲームの世界と現実を混同すると無責任な発言や議論の力の悪用につながる。白を黒と言いくるめる詭弁家、ソフィストを育ててはならない。

教育ディベートでは文献からの証拠資料が重視される。利用にあたっては、出典の明示、文脈に沿った引用、引用と要約の区別、等、学術論文での利用と同等の規則を守らなければならない。

参考資料

- ジーゲルミュラー, G., J. ケイ, J. (著) 井上奈良彦 (監訳) (2006). 『議論法—探求と弁論 第3版』福岡: 花書院 (ディベートだけでなく議論法全体を詳述)
- Ziegelmüller, G., & Kay, J. (1997). *Argumentation: Inquiry & Advocacy*, 3rd ed. Allyn & Bacon. (上記の原著)
- 松本茂 (2001). 『日本語ディベートの技法』東京: 七寶出版 (ディベート教育第一人者による教科書・指導書)
- 安井省侍郎. (2004). 『初心者のためのディベート Q&A』 (第4版) 東京: ディベート・フォーラム出版会 (競技ディベートの入門書)
- 伊豆田達志、蟹池洋一、北野宏明、並木周. (2005). 『現代ディベート通論—復刻版』東京: ディベート・フォーラム出版会 (競技ディベートの理論を詳述。初心者向きではない)
- 全国教室ディベート連盟 <http://nade.jp/test/> (主に中高生対象とする指導団体、ディベート甲子園の運営母体)
- 日本ディベート協会 <http://www.kt.rim.or.jp/~jda/> (日本のディベート研究・普及の専門家による団体)

付録5 日本語教育と「ディベート」—外国語における議論法や論理思考の指導 (ディベート授業実践例)

2007年3月29日改訂

概要

井上が長年英語教育の中で実施してきた、特に大学の英語授業の中で実践してきた授業方法を紹介するものである。ESS における自身の学習、その後の指導に基づいているが、ここに挙げるシラバス例などはすべて実際に大学の1、2年生の英語授業で採用したものにに基づいている。

1. ESS で何が行われていたか

1990年代までのESSは大学が授業で提供していなかった知的学習活動、議論学習を提供していたといえる。その様子は博士論文 Inoue (1994) に詳述したが、付録6にその日本語要約を載せた。この活動のその後2000年代になっての問題点と代替案としてのパラメンタリーディベートの興隆は、中野(2005)、Inoue & Nakano (2006) 参照。

2. ESS の経験を生かした授業(自著テキスト使用)

ディベートを長い準備を含んだ過程と認識すると、大学の英語の授業でディベートを用いる方法がいくつか考えられる。

- (1) 周到な準備に基づいて、口頭で議論の応酬を行うことを可能にする。
- (2) 議論の構築、反論、再反論という過程は準備段階で書きことばを中心に行い、口頭でのディベートは最後に、準備した原稿を発表するというプレゼンテーションと考える。
- (3) 口頭での発表は行わず、書面によるディベートを行う。

現在までのところ、は1学期間に10数回の授業で行うという条件の下、(2)と(3)の方法を用いてきた。この方法では、比較的短期間で、一クラスの学生数にあまり関係なく、大学生の知的レベルに合った論題を取り上げてディベートをすることができる。具体的な授業計画は自作テキストの日本語訳「ディベート入門」と資料1のシラバス例を見てほしい。また、スピーチの添削例を資料2に示す。ただし、実際の授業では添削は時間的な負担もあり最小限にとどめることが多い。学生による授業評価例が資料3である。

3. 型を教え込む授業(Discover Debate 使用)

Lubetzky ほかによるパラメンタリーディベート出身の著者が日本で Policy Debate を学び日本の高校などでの指導経験を生かして書いた教科書が *Discover Debate* である。この本は政策論争の定常争点や立件戦略は教えない政策ディベートに詳しい人には、不満かもしれないが、そのほかの点では非常に丁寧にディベートの準備過程を教え、表現なども実例を多く挙げ、順番にタスクをこなしていけばディベートの試合ができるようになっている。型にはめすぎるところで好き嫌いが分かれるが、高校での実践に基づくので、初心者、英語力中級でも大丈夫な教材である。出版社のWebサイトには練習問題の解答、小テスト、別売CDの音声スクリプトなど完備している。

この授業を使ったシラバスの例が、資料4、その具体的な1回分の授業例が資料5である。この本では、ディベートの過程を、家を建てて売り込むというたとえで紹介しており、わかりやすい。議論のメタファーには建設に関するものも多く(レイコフ・ジョンソン、1986)実際の言語使用とも一致する。

4. とにかく試合をする授業

上の授業の省察にも書いたが、準備型ディベートによる授業の限界も感じ、対局となるととにかく試合をさせるという授業を試みた(資料6)。この授業はディベート経験が豊富で熱心なTAがいたので2部屋同時進行で試合をしている時間もある。学生評価(資料7)からも私よりTAの熱心さがわかるだろう。

学生の評価も概ね高いが、他の授業と比べて負担が大きかったのか、もっとやりたいという気持ちは少ないようである。このあたり必修の英語授業で1単位の課目の限界かもしれない。実は、必修の外国語単位の英語授業ではなく、いわゆる教養科目の一つとして試合中心の授業科目を2006年度初めて開講した。非常に熱心な学生が集まったので、これからこういう授業の可能性も探りたいと思っている。

また、授業で受講した学生からチームを作り他の大学も交えたディベート大会に参加する、という試みも過去2年開いてきた。まだ3校だけの小規模で、出場者の一部はESSという限られた状態である。交流協会の日本語大会のほうが100倍くらいは盛大である。

5. Web を利用した授業

これまで、自作テキストに基づいた授業、Discover Debate というテキストの例、とにかく試合型、と紹介してきたが、他にもいろいろな授業方法がある。現代のネットワーク技術の進歩はWeb などを利用したディベートが可能にした。書きことばも話しことばも可能である。一つの可能性として、Web に順にスピーチを発表させていき、最後にジャッジの学生が判定とその理由をアップロードするという形式のディベートの例を資料8に示した。

資料目次

- 資料1. ディベート授業のシラバス例（自著テキスト使用）
- 資料2. 英語スピーチの添削例
- 資料3. 英語ディベート授業への学生評価例
- 資料4. ディベート授業のシラバス例（テキスト *Discover Debate*）
- 資料5. 英語ディベート授業例（テキスト *Discover Debate*）
- 資料6. 英語ディベート授業のシラバス例（とにかく試合方式）
- 資料7. 英語ディベート授業の学生評価例（とにかく試合方式）
- 資料8. Web 版ディベート発表例（英語）

参考資料など

- ジーゲルミュラー, G., J. ケイ, J. (著) 井上奈良彦 (監訳) (2006). 『議論法—探求と弁論 第3版』福岡: 花書院、2006年（ディベートだけでなく議論法全体を詳述。原著は Ziegelmüller, G., & Kay, J. (1997). *Argumentation: Inquiry & Advocacy*, 3rd ed. Allyn & Bacon.）
- 松本茂 (2001). 『日本語ディベートの技法』東京: 七寶出版、2001年（ディベート教育第一人者による教科書・指導書）
- 安井省侍郎. (2004). 『初心者のためのディベート Q&A』（第4版）東京: ディベート・フォーラム出版会（競技ディベートの入門書）
- Lubetsky, M., LeBeau, C., & Harrington, D. (2000). *Discover Debate: Basic Skills for Supporting and Refuting Opinions*. Language Solutions. 出版社のサイト (<http://www.languagesolutionsinc.com/>) から練習問題の解答、小テスト、オーディオ・スクリプト（別売 CD あり）などをダウンロードできる（登録必要）。
- 伊豆田達志、蟹池洋一、北野宏明、並木周. (2005). 『現代ディベート通論—復刻版』東京: ディベート・フォーラム出版会、2005年（競技ディベートの理論を詳述。初心者向きではない）
- 全国教室ディベート連盟 <http://nade.jp/test/>（主に中高生対象とする指導団体、ディベート甲子園の運営母体）
- 日本ディベート協会 <http://www.kt.rim.or.jp/~jda/>（日本の研究・普及の専門家による団体）
- 井上奈良彦のホームページ <http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/>（シラバス、自作テキスト、博士論文要約など）

- 游梓翔 (Yu Tzu-hsiang). (2003). 《認識辯論》，台北：雙葉書廊。（中国語。台湾における教育ディベートの決定版？）
- 奥瑞岡式辯論規則（台湾のオレゴン式） <http://blog.yam.com/atingtw/4258d2d5.doc> など多数の資料が Web で検索できる。
- 卓福安 (Toh Hock An). 2003. 「如何打一場奧瑞崗式的辯論」（朝陽科技大學 91 學年度第二學期「中國經籍與說話藝術」（黃翠芬）協同教學單元
ワード版 <http://www.cyut.edu.tw/~tfhuang/files/oregon.doc>
PowerPoint 版 <http://www.cyut.edu.tw/~tfhuang/files/oregon.ppt>
- 西谷まり. (2001). 「ディベート活動を通じた口頭表現の指導法」『一橋大学留学生センター紀要第 4 号』, 57-73. http://hda1.lib.hit-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/AZ00011077/Front/link/ryugaku0000400570.pdf（種々のタスクなども紹介）
- 大塚容子. (2003). 「ディベートにおける文末表現—日本語学習者の場合」『岐阜聖徳学園大学紀要』(外国語学部編)第 4 2 集 通巻第 4 5 号, 33-45.
<http://www.ha.shotoku.ac.jp/library/HP-bak/kiyo/gaikoku/gaikoku42/otsuka.pdf>
- レイコフ, G., & ジョンソン, M. (著) 渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸 (訳) (1986) 『レトリックと人生』東京：大修館書店（原著 Lakoff & Johnson (1980) *Metaphors We Live By*）（議論の比喩としての戦争や建築を紹介）
- 中野美香. 2005. 「ディベートの功罪—パラメンタリー・ディベートに参加する大学生の意識」『スピーチ・コミュニケーション教育』（日本コミュニケーション学会）第 18 号、pp. 1-19.
- Inoue, Narahiko, & Nakano, Mika. 2006. “The costs and benefits of participating in competitive debate activities: Differences between Japanese and American college students.” In F. H. van Eemeren, M. D. Hazen, P. Houtlosser & D. C. Williams (Eds.), *Contemporary Perspectives on Argumentation: Views from the Venice Argumentation Conference*. Amsterdam: Sic Sat, pp. 167-184

資料 1. ディベート授業のシラバス例（自著テキスト使用）

英語シラバス（<http://hesvr.rche.kyushu-u.ac.jp/syllabus/showsyl.cgi?p=2004.1&i=56211000-59000017-21> など）に基づき改定。もとのシラバスは学期中に必要に応じて更新している。たとえば選定した論題の記入や関連 Web へのリンクなどを挿入。また、学期によって使っているディベートの形式や授業の進度などは若干こととなる。

授業の目的・授業の概要

この授業では学生の批判的思考能力とパブリック・スピーキング能力の養成を目指す。具体的には、論争の分析、論理的に構成された議論の準備と発表、他の人の議論への反論、などである。学生は授業の中で決める論題についてディベートの準備をする過程を通じて議論法の技能を修得する。ディベートはまずしっかりとした原稿を準備することに重点を置く。学期の終わりには期末課題としてクラス内ディベート大会を開く。成績は授業中の課題、宿題、およびディベートによって決定する。教科書は「ディベート入門」（自作小冊子）

授業計画

10/6. 導入。ディベートの基本ルール説明。

課題 1. 論題と記事を見つける。授業で行うディベートの論題に使えるようなものを 2 題書き、関連する記事を新聞、雑誌、Web から探して添付しなさい。記事には標準的な書誌情報を付記すること（宿題 10/13 提出）

10/13 課題 2. 賛否の理由を考える。グループ内で各学生の選んだ論題について肯定・否定の理由をできるだけ多数挙げる。自分の選んだ論題について肯定否定の理由を整理し書く。（宿題 10/20 提出。）

10/20. 課題 3. 論題選定。ディベートの試合用の論題の条件を説明。グループ内で各学生の選んだ論題について、このクラスでディベートをするのにふさわしいものを選ぶ。グループで選んだ候補の中から投票で論題決定。

決定論題「日米安全保障条約は廃止されるべきである。」

課題 4. 論題の解釈。論題の分析について説明。決定した論題の解釈を話し合う。政策論題の場合は肯定側プランを書いてみる（誰が、どのような内容の政策項目を、いつから、どのように、実施するのか）。論題中の用語の定義を辞書、辞典、教科書などからを見つける。引用した定義には出典を忘れないように。（宿題 10/27 提出）

10/27. 課題 5. 争点の発見。個別の論点と争点の違い、定常争点を説明。選択した論題に関係する争点を書き出しなさい。政策論題の場合は「定常争点」（Stock Issues）利用して分析しなさい。（宿題 11/10 提出）

課題 6. 資料リスト作成。資料調査の方法を説明。参考資料のリスト（書籍、記事、Web ページ）を作りなさい。標準的な書式様式に従うこと。このリストはとりあえずのもので、学期中を通して更新すること。当面のリストとして 15 件記入すること。（宿題 11/1 提出）

（11/3 休日）

11/10. 課題 7. 肯定否定のケース。肯定否定の立件戦略について説明。チームで肯定否定それぞれどのようなケースができるか話し合いなさい。自分のチームが使う予定のないケースでも一応作ってみて、それに対する反論を考えなさい。各人、肯定側ケースのアウトラインと否定側ケースのアウトラインを 1 点ずつ書きなさい。（宿題 11/17 提出）

11/17. 課題 9. 肯定側立論を書く。スピーチの構成、引用の仕方など説明。チームで肯定側立論を考え、全体の原稿を書き、読む練習をしなさい。（宿題 11/24 提出--2 部）

11/24. 課題 10. 否定側立論を書く。肯定側立論を読ませて、助言をする。肯定側立論を第 1 試合の対戦予定相手と交換し、チームで反論（否定側第 1 反駁）と否定側立論（肯定側提案から生じる新たな不利益など）を考える。否定側立論と否定側第 1 反駁の全体を原稿にしない。（宿題 12/1 提出--2 部）

12/1. 否定側立論を読ませ助言をする。原稿の一部は最初の試合の対戦相手に渡す。（ここまでの原稿で実際の対戦までに大幅に変更があった場合は速やかに対戦相手に知らせる。）

課題 8. 準備書面の作成。チーム内で各人が 1、2 点の争点を担当する。各人は資料を集め（他の人が集めた資料も使う）肯定側で使える書面を 2 点、否定側で使える書面を 2 点書く。準備書面はチームで共有し、最後の試合までに増やしていく。（宿題 12/8 提出）

12/8. 課題 11. フローシートと判定。フローシートと判定の説明。ビデオで試合を見てフローシートにメモを取り、判定を出す。試合ができそうなチームがあれば前週に予告しておいて、1 試合して他の学生は判定を出す。（宿題は試合の準備。能力や準備の進み具合に応じ、第 2 立論以下のスピーチも交換することを認める。）

12/15. 試合。審査員チームは判定票を提出。

12/22. 試合。審査員チームは判定票を提出。

1/12. 試合。審査員チームは判定票を提出。

1/19. 試合。審査員チームは判定票を提出。

試合形式

肯定側第立論 5 分

否定側第立論 5 分

否定側第 1 反駁 3 分

（準備時間 5 分）

肯定側第 1 反駁 3 分

（準備時間 5 分）

否定側第 2 反駁 3 分

（準備時間 3 分）

肯定側第 2 反駁 3 分

（審査時間 10 分）（合計 40 分。90 分授業で 2 試合）

資料2. 英語スピーチの添削例 (<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/revised1ac.html>)

論題は、Resolved: that Japan should abandon nuclear power generation. 文中では、もともと英語で書いたコメントを日本語に翻訳しています。

A first draft of a student.

Affirmative opinion.

The most serious problem about nuclear power generation is disasters which happen in a nuclear reactor. Because of the disasters, a lot of radioactive substances are released. And that radioactive substances emit radiation. The radiation causes cancer on tissue of human body. Further, we can't feel radiation by five senses, find effects on our health and see security system. In other words, it is difficult for us to know the level of effect and danger when accidents happen. Besides, our fear of security system is increasing.

Uranium and plutonium can be recycled, but when we retreat them, high level exhaust liquid is created. The exhaust liquid is extraordinarily poisonous and it is impossible to keep it.

Once large-scale accident occurs, not only damages of radioactive pollution but also social influences are enormous. And there are a fear of nuclear power and distrust of the authorities concerned because of deplorable events such as recent accident related to nuclear power, hiding with it and false report.

Experts point out that our fear and distrust are caused by insufficient information publicity and our lack of knowledge about radiation and disaster in nuclear power plant.

Suggested Revision (Comments are inserted in bold face.)

短い序論と結論を書きなさい。

それぞれの論点を支持する説明や証拠資料を加えなさい。

1AC (肯定側第1立論) の構成はたとえば下記のようにできます。このままコピーするひつようはありませんので、自分で書き直す際の参考にしてください。

1st Affirmative Constructive Speech**[序論]**

We believe that Japan should abandon nuclear power generation because we fear serious accidents and cannot trust nuclear power.

Contention I. Problems. Accidents (disasters) and radioactive wastes.

Subpoint A. Accidents. The most serious problem about nuclear power generation is accidents which routinely happen in a nuclear reactor. **[このような事故が人為ミスや機械の故障によって引き起こされるという証拠資料をあげなさい]** Because of such accidents, a lot of radioactive substances are released and they emit radiation. **[このような放射能の放出を示す証拠資料]**

["disasters" というのが "earthquakes and plane crashes"なら、次のように書けます]

Contention I. Accidents (disasters) and radioactive wastes.

Subpoint A. Disasters. The most serious problem about nuclear power generation is natural and man-made disasters which happen to a nuclear reactor. Because of disasters such as earthquakes and airplane crashes, a lot of radioactive substances are released. **[このような惨事が生じる可能性があり、その結果放射性物質の放出があるという証拠資料をあげなさい]**

Subpoint B. Radioactive wastes. When we reprocess uranium and plutonium, high-level radioactive wastes are created. The wastes are extraordinarily poisonous and it is impossible to safely store them for a long time. **[廃棄物中にどのような物質があるのか、それがどの程度有害であるのか、さらにそれを処理することができない、ということを示す証拠資料をあげなさい。]**

Contention II. Seriousness of the problems. Cancer and social influences.

Subpoint A. Radiation causes cancer. The radiation causes cancer on tissues of human body. **[放射線に**

よって癌が引き起こされるという証拠資料] Further, we can't feel radiation with our five senses, cannot immediately find effects on our health. In other words, it is difficult for us to know the level of effect and danger when accidents happen.

Subpoint B. Social influences. Once a large-scale accident occurs, not only damages of radioactive pollution but also social influences are enormous. [社会的影響を説明し証拠資料を挙げる]

Contention III. Our distrust. We cannot trust nuclear power generation because we don't see safety system and authorities tell a lie.

Subpoint A. We cannot trust safety system. We haven't received sufficient information about safety systems. [この論定さらに説明の必要あり] Besides, our fear about safety system is increasing. [この論定さらに説明の必要あり]

Subpoint B. We cannot trust authorities. We have seen deplorable events such as recent accidents in nuclear facilities and authorities tried to hide them and issued false reports. [具体的な例を挙げ、説明を加えなさい]

[結論]

In conclusion, nuclear power generation has serious problems of accidents and wastes disposal that release radioactive substances. Once radioactive substances are released, they cause cancer and social influences are also enormous. Since we cannot trust safety system and authorities, abandoning nuclear power generation is the only way to make our world safe.

資料 3. 英語ディベートの授業への学生評価例

◎自分の感想・反省・ディベートに関する意見

- ・ 講義の過程で、最初のうちは、配布されるプリントはすべて英語、それに講義もすべて英語というのに驚き、そして、不安になり、ディベートなんて本当にできるのだろうか心配でした。参考として見せていただいたスライドを見ても、意見なんてほとんど理解できなかったし、今まで自分はどれだけ英語をやってきたのだろうと、くやしくてたまりませんでした。しかし、ディベートのテーマが決まり、班で検討するようになってからは、だんだんおもしろくなってきました。回数を重ねるごとに、和英辞典を頻繁に使わなくなっていったし、教官の英語の説明も、慣れてきたのでしょうか、言われている内容を把握できるようになりました。ディベートでは自分がスピーチするのも楽しかったけれど、他の班のディベートを聞くのも楽しいと思えました。私は今、英語表現演習がディベートで本当に良かったと思っています。久々に自分の頭で考えて、実際に書き、そして発表するという充実感を、得ることができました。
- ・ 他の班のスピーチを聞くときに、その場限りにならないように、しっかりとメモをとっておくべきでした。
- ・ 高校の時に頭にたたき込んだはずの単語の大多数がすでに抜けていて、辞書を引いては、「これは見覚えがあるぞ」という情けない状態でした。つまり高校までの知識がしっかり生かせていないということです。
- ・ 他の班のディベートを聞いて、ただ点数をつけるだけではなく、時間があれば、ここが良かったとか、それはおかしいなど、ディベートの内容や形式について、全員で議論してみたかったです。
- ・ ディベートの当日に、その班のスピーチ・レジュメを採点者全員（聞いている人）に配るとなといい。（しかし、それでは、皆、レジュメばかりに気をとられて、スピーチを聞かないですね。その点から考えると、今回のディベートは、ヒアリング強化になって良かったと思います。）
- ・ これも時間があればなのですが、スピーチを行った班に対して、聞いている人の質問コーナーなども設けたら、おもしろくなりそうですね。
- ・ スピーチのときにジェスチャーを交えると、迫力があってよかったかもしれないです。脱日本人を目覚めます。

機会があれば、またディベートをやってみたいです。
長くなりましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

* 文章は原文のまま、手書きを印刷文字に改めた。

** 文中に「スライドを見て」とあるのは、ビデオによるディベート視聴のことを指していると思われる。

資料4. ディベート授業シラバス例 (*Discover Debate*)

(福岡女子大学英文科「ディベイトI」3年生選択授業)

授業の概要： 英語によるディベートの基礎的スキルの実践練習を行うとともに、「議論法」(言葉の喧嘩ではなく、問題分析や情報探索を通じて答えを見つけ、それを人に伝え反論に応じていく過程のこと)の基礎を学習することにより、論理的な思考力を身につける。

到達目標： 議論法の基本的な原理を理解することができる。英語によって積極的に議論しようという態度を身につける。

暫定授業計画：

1. 4/12. ディベートとは何か。DD pp. 0-11.
2. 4/19. 意見や主張の述べ方。事実や価値判断・政策についての主張。DD Unit 1. 宿題 (DD p. 16 Project)
3. 4/26. 意見や主張を説明する。強い理由とは何か。DD Unit 2.
4. 5/10. 証拠を挙げる。共有知識や証拠資料の検証と利用方法。DD Unit 3. 宿題 (DD p. 46 Project)
5. 5/17. 議論の構成。DD Unit 4. 宿題 (DD pp. 58-59.)
6. 5/24. 肯定側のスピーチの発表。DD pp. 22 & 59. 宿題 (スピーチ原稿を清書)
7. 5/31. 理由(説明)に反論する方法。DD Unit 5.
8. 6/7. テニス・ディベート。DD pp. 72-73.
9. 6/14. 証拠に対する反論の方法。DD Unit 6.
10. 6/21. 反論の構成(組み立て方)。DD Unit 7.
11. 6/28. ディベートの形式と評価。メモのとり方(フローシート)。DD Unit 8. 宿題(紙面ディベート)
12. 7/5. 正式ディベートの準備。チームによる準備
13. 7/12. 正式ディベート 1。チームによる準備
14. 7/19. 正式ディベート 2。チームによる準備
15. 7/26. 正式ディベート 3。授業評価

教科書： Lubetsky, M., LeBeau, C., & Harrington, D. 2000. *Discover Debate*. Language Solution. (DD)

成績： 課題、授業中の発表、期末試験等を総合的に評価する。

資料5. ディベート授業例（テキスト*Discover Debate*）

（JACET授業実践報告書用原稿を修正）

授業科目名：インテンシブ英語演習I（講義題目：Debating in English）

科目目標：

この授業では学生のクリティカルシンキング技能（論争の分析、論理的な議論の準備と発表、他の人の議論への反論）の養成を目的としている。

授業の特色：

学期前半は主として教科書を用い、ディベートの基礎となる、主張の表し方、理由の挙げ方、資料の使い方、スピーチの構成、反論・反駁の仕方、などを学習する。教科書はそういった要素をかなり型に当てはめて教える多数のタスクが用意されており、授業と宿題を通して学習させた。文法や細かな発音の問題は無視すると学生に宣言し、学生のエラーに対する訂正もほとんど行わなかった。指導の重点は議論の論証や談話構造に置いた。学期の後半では、クラスで学生の投票により論題を決定し、グループ単位でディベートの準備を行う。学期の最後に、準備したスピーチをディベートの形式に従って口頭発表する。聞いている学生はフローシート形式のメモを取り、判定を下す。

この授業で、学生が行うディベートは、事前に決めた論題を分析し、資料を集め、肯定・否定のスピーチを書く準備型である。さらに、対戦相手チームとスピーチを交換し、反論・反駁の議論を準備する。最後の「試合」はその場での議論の応酬の要素は低い。口頭発表は大部分がシナリオに基づいたプレゼンテーションである。審査員を務める学生はその場で議論を聞いてメモを取り、評価を行う。投票で決まった論題は、Resolved: That Kyushu University should move to Motoooka. キャンパス移転の是非と問うものである。もっと社会的な問題も候補に挙がったが、この授業では採用されなかった。ディベートの形式は、肯定第1立論（6分）、否定第1立論（6分）、肯定第2立論（6分）、否定第2立論（6分）、否定反駁（4分）、肯定反駁（4分）。反対尋問はなし。

詳細はオンラインシラバス（<http://hesvr.rche.kyushu-u.ac.jp/syllabus/>）で公開している。最後のディベートの試合は、時間の都合で、2教室同時進行で行い、すべての試合を録画した。教員がいない教室で行われた試合のスピーチは後日ビデオを見て評価した。オフィスアワーは設けているが、学生は相談には来なかった。

教科書：

Discover Debate: Basic Skills for Supporting and Refuting Opinions by Lubetsky, LeBeau, & Harrington. Language Solutions

評価方法：

小テスト10%、宿題40%、口頭発表（ディベートのスピーチ）30%、メモ（スピーチのメモ、ディベートの判定用紙）20%、がおおよその配分。ディベートの試合の勝敗は評価に加味しなかった。グループ活動の評価は、個人の点数に数量的には反映させていない。グループ内のスピーチの分担は公平になるように指示した。

授業・教室形態等：九州大学・全学教育1年次開講必修。1単位。（2005年前期工学部）。1クラス23名。

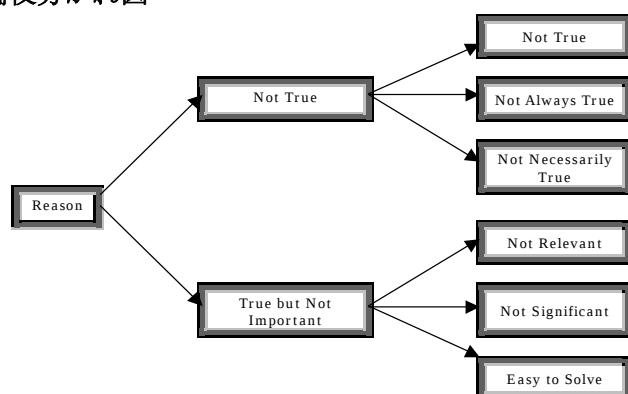
学生の特色：

学生は、英語発信能力の修得を目的とするこの科目群の中から学生番号順に振り分けられている。このような授業ではクラスの士気が授業運営に影響するが、学期前半では比較的熱心に課題をこなし授業に参加していた。後半のディベートでは、社会的な論題に挑戦しようとか、スピーチを十分に準備しようという意欲が不足していると感じられた。グループ活動は概ね支障なく行うことができた。

1 回の授業例（15 回中 7 回目、90 分中約 90 分間）

- Step 1. 前時の Unit（Unit 4 Organizing Your Opinion）の小テスト実施。交換して採点、回収
 Step 2. 本時 Unit 5 (Refuting Explanations) の目標説明。
 Step 3. "Discover: Refuting Opinions" (pp. 62-63): 主張に対する理由とその反論の文をマッチング。
 学生を順に指名して答えさせる。
 Step 4. "Model: Refuting an Opinion" (pp. 64-65): 反論の仕方 6 種類を枝分かれ図(教科書)で説明、
 練習問題を学生に答えさせる。

反論枝分かれ図



練習問題例

Resolution: Cats are better pets than dogs.

Affirmative says: Cats are better pets than dogs because a cat cost \$100 dollars while a dog costs \$105.

Negative thinks: \$5 is a very small amount of money. So this is () Not True () Not important.

Negative says: This is (not true / not always true / not necessarily true / not relevant / not significant / easy to solve) because \$5 is a very small amount of money.

- Step 5. “Language Focus: Types of Refutations/Stating a Refutation” (pp. 66-67) 反論の表現、特に最小単位の反論の構成（signpost, rephrase, negation & why, rationale）を説明。

表現パターン例

Language Focus: Stating a Refutation (Discover Debate, p. 67 から抜粋)

Pattern	Possible Expressions	Example
1. SIGNPOST	Their first point was... They talked about... They mentioned...	Their first point was care.
2. REPHRASE	They said that... The other team said... Our worthy opponents claimed...	They said that cats require less care.
3. NEGATION	This is not true! That point is totally untrue! Even if that were true, it is not important!	That is not important. The whole point about care is not relevant to owning a pet. (Note: The Negation and Why sentences are often combined into one sentence. For example: That is not important because the whole point about care is not relevant to owning a pet.)
4. WHY	It can't be true that... The problem can be easily solved. Their example is not relevant to the point.	
5. RATIONALE	Sometimes it is also true that... There is no connection between... To solve it, do X instead of Y!	The reason that we have a pet is to enjoy taking care of it.

- Step 6. “Controlled Practice: Point-Refutation” (pp. 68-69, 127-129) “People should be allowed to have guns.” と “Nuclear weapons should be abolished.” という論題の肯定側の理由を書いたカードと否定側の反論をマッチングさせるゲーム。教室内を移動して活動させるように教科書ではなっているが、授業では学生にペアを作らせ、読み上げさせる。その後、数名の学生を指名して答えを言わせる。
- Step 7. “Controlled Practice: Making Refutations” (p. 70) “There should be no school on Saturdays.” という論題について教科書に肯定側の理由が4点挙げられていて、否定側の反論を考える。4人程度のグループで反論を考えさせ、その後、指名して反論を英語で言わせる。発言が滞ると教員がヒントを出す。
- Step 8. “Controlled Practice: Listen and Write” (p. 71) 論題 “It is better to be married than single.” について肯定側スピーチを録音で聞かせメモを取らせる。要点を学生に指名して答えさせながら、確認。教員が板書する。反論のヒントになる質問をいくつかしたあと、反論を英語で書いて次時に提出するように指示。
- Step 9. 本時の要点を確認し、次時の Unit の予習を指示。全体の内容を把握し、問題に答えられる範囲で解答しておくように言う。（実際の予習の程度は学生によって多様）

省察：

長年必修の英語科目で Academic Debate をこのような形態で導入してきた。口頭での議論の応酬ではなく、準備の過程を通して Argumentation の諸要素を訓練することを目的としている。学生の英語力、社会問題への関心、クラスのダイナミズムなどに依存するが、成功すれば学生は社会問題について相当内容のあるスピーチを発表してくれる。ただし、今回のクラスはうまくいかなかったほうであり、また、一般的にも準備過程中心のディベート授業に限界も感じている。

2004 年から「論題発表時に日本語試合、次の2週で各チームが肯定・否定一度ずつ英語試合を行う」という試合中心の授業を試みた。ディベートに精通した TA を得て、2 教室で同時に試合をし、学期中に4論題を扱った。最後の論題については予選・決勝戦を行い優勝チームを表彰した。TA も熱心に指導し、学生も意欲を持って取り組んだ。ただ、試合に追われて、「指導」は試合後の寸評しかできないので、準備過程中心型と試合中心型のバランスが難しい。オフィスアワーやメールによるスピーチの添削など個別指導は可能であるが、教員の負担は増える。

紹介した授業の変種をいくつか挙げておく。選択必修、つまり学生が授業概要を見て選択し受講する科目もある。この方が学生の動機付けは高い。教科書は、上記以外に自作のプリント（後に九州大学英語共通教科書に収録）を用いる場合もある。こちらは、細かなタスクは用意していない。どの程度「型」を教えるかは問題である。スピーチをどの程度準備させるか（試合の前半のみで後半はある程度その場で言わせるか、最後まで両チームで準備して原稿を書くか）は、受講学生の英語力や意欲なども考慮して選択している。反対尋問の時間を設ける場合もある。評価は、各課題毎に個人評価を合計する他に、期末に資料やノートを提出させるポートフォリオ形式も可能。グループの活動は今回数値化しなかったが、資料・原稿・試合をグループ単位の評価として個人の成績に反映させる場合もある。この場合、グループへの貢献度の差が問題となる。

教室外への広がりとして、近隣の大学との交流試合を2004年から試みているが、試行錯誤中である。ESS やディベートクラブ（両方とも私が顧問）との連携も図りたい。今回は ESS の学生が来日アメリカチームと対戦した試合やディベート講演会の見学を奨励し、出席とレポートにより点数（5%程度）を加算した。ディベート経験者が受講生にいと授業でリーダーシップを発揮してくれることもある。逆に ESS のディベートの固定観念が障害になる場合もある。

資料 6. 英語ディベート授業のシラバス例（とにかく試合方式）**Intensive English I (Debating in English)** (<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/>からリンクあり)

This course tries to develop students' critical thinking and public speaking skills such as analyzing controversial topics, preparing/presenting logically structured arguments, and refuting other people's arguments. Students will learn argumentation skills through a series of short-preparation debate using several different resolutions. At the end of the semester, a competitive tournament will be held as a final project of this course. The final grade will be based on in-class tasks, assignments, and debates. (Tentative points for tasks out of 100: practice debate(25), final debate (25), judging (25))

Tentative Schedule:

10/5. Introduction. Preparation for Resolution A: "English should be taught as a compulsory subject in elementary schools in Japan."

10/12. Resolution A

13:10 - round 1 (Team A vs. Team B. Judges: Teams C, D, E, F)

13:50 - round 2 (C - D. J: A), round 3 (E - F. J: B)

10/19. Resolution A

13:00 - round 4 (B - C. J: F), round 5 (D - E. J: A)

13:40 - round 6 (F - A. J: B, C, D, E)

10/26. Holiday; no class.

11/2. Resolution B, preparation.

(11/3. Exchange Debate among Kyudai, Kyusandai, & Fukuoka Women's U.)

11/9. Resolution B, rounds 1 - 3.

11/16. Resolution B, rounds 4 - 6.

11/30. Resolution C, rounds 1 - 3.

12/7. Resolution C, rounds 4 - 6.

12/14. Resolution D, rounds 1 - 3.

12/21. Resolution D, rounds 4 - 6.

1/11. Final debate, preliminary 1.

1/18. Final debate, preliminary 2.

1/25. Final debate, final round.

Textbook: "Let's Enjoy Debating in English." Chapter 19, *A Passage to English*, 3rd ed, pp. 284-302.

Office Hours: Tuesday & Thursday 11:00-12:30 or by appointment. Contact by phone (x4667) or by email (inouen@flc.kyushu-u.ac.jp).

Format of Debate:

(1) Affirmative Constructive Speech (3 min.)

(2) Negative Constructive Speech (3 min.)

(3) Negative Rebuttal Speech (3 min.)

(4) Affirmative Rebuttal Speech (3 min.)

(5) Negative Summary Speech (3 min.)

(6) Affirmative Summary Speech (3 min.)

2-minute preparation time is provided before each speech except for the Affirmative Constructive.

Each debate is followed by oral comments from the judge.

Rules:

(1) The constructive speech shall establish the reasons for or against the resolution.

(2) The rebuttal speech shall attack the reasons presented in the opposition's constructive speech.

(3) The summary speech shall summarize the debate and show that the speaker's side is stronger.

(4) Speakers are not allowed to read prepared manuscripts. Notes are allowed.

(5) Speakers must maintain "public-speaking" delivery, for example, eye contact with the audience.

Teams: Each team consists of 3-4 members. Each member must give at least one speech under each resolution.

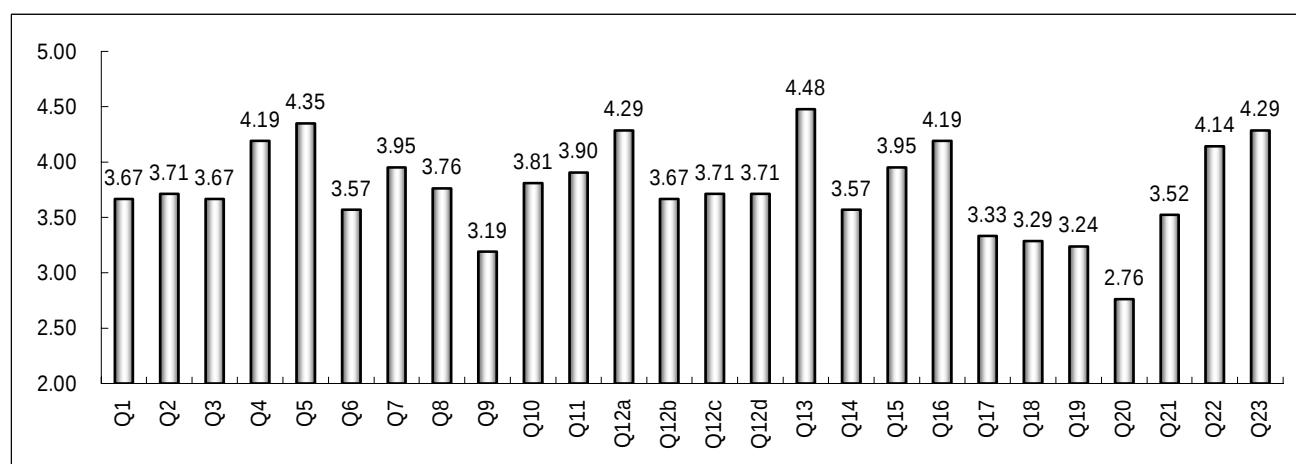
資料 7. 英語ディベート授業（とにかく試合）の学生評価

ディベートの授業に関するアンケート集計結果(2004 年度後期) (中野美香による調査集計)

調査項目

1. 教員の授業の説明は適当な早さでしたか。
2. 教員は学生の理解力を配慮し、わかりやすくする工夫が感じられましたか。
3. 教員の講義(ディベートについての説明等)はわかりやすかったですか。
4. 教員は熱心に教えてくれたと思いますか。
5. TA は熱心に教えてくれたと思いますか。
6. 試合後の教員のコメントはわかりやすかったですか。
7. 試合後の TA のコメントはわかりやすかったですか。
8. 試合を中心とした授業の進め方は効果的でしたか。
9. 試合を減らして、講義(ディベートについての説明等)がもっとあった方がよかったですか。
10. 最後に試合を大会形式にしたことはよかったですか。
11. 一週間の論題の準備時間は適切でしたか。
12. それぞれの論題は適切でしたか。
 - a) English should be taught as a compulsory subject in elementary schools in Japan.
 - b) Private junior high schools are better than public junior high schools.
 - c) Kyushu University's move to Motoooka is good.
 - d) Voting should be compulsory in Japan's national elections.
13. チームの人数は適切でしたか。
14. あなたは授業時間外にディベートの試合の準備やリサーチをよくしましたか。
15. あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか。
16. あなたはこの授業を通して、初めよりディベートができるようになったと思いますか。
17. あなたはこの授業を通して、初めより人に説明することが上手になったと思いますか。
18. あなたはこの授業を通して、初めより英語を話すことが上手になったと思いますか。
19. もっとこのような授業を受けてみたいと思いますか。
20. もっとディベートを勉強してみたいと思いますか。
21. ディベートは英語よりも日本語でやったほうが効果的だと思いますか。
22. ディベートの技術は将来役に立つと思いますか。
23. 総合的にみて、この授業を履修してよかったですか。

各数値項目の平均値



記述回答

24. この授業のよかった点をあげてください。

- 人前で話すことでスピーチの力をつけられる。
- 自主的な調査を行うことができた。
- ほとんど英語で進行されたこと。
- 英語で説明することが格段にうまくなれたと思う。
- 英語で話す力がついた。
- 少数のチームだったので仲良くなれた。
- ディベートがなんとなくわかった。
- 相手の意見を聞こうとする姿勢が身についた。
- 初めて体験できた。
- 先生の丁寧な説明。
- 英語で話せるのがよかった。
- 議題について調べることで知らなかった情報が得られた。
- 英語を聞こうとする意欲が出てきて、映画での会話を聞き取ろうとしている。
- 英語に親しみができた。
- あることを英語でしかも一、二単語で表現することができるようになったと思う。
- ディベートという形にしたことで、考える力や話す力を養うことができた。
- グループ同士のコミュニケーションが活発になる。
- ディベート形式だったこと。
- 英語によるディベートを体験できた。
- 英作文の力がつく
- 人前で話すいい機会だった。
- ディベートの勉強になったこと。
- ディベートの勉強になったこと。しくみがわかった。
- 人前で話す力がついた。
- 自分の意見を闘わせる少ない機会をもてた。
- 英語力のなさを思い知った。
- 積極的に調べてみようとする点。
- 英語を使うことで、より英語を話せる力を身につけられた。
- 取り組みやすい subject だったこと。
- テストがないこと。
- 文章の構成の仕方が少しわかった。
- 短くまとめる力がついた。
- 説明力がついた。
- 日ごろ発言する機会のないような人も発言しなければならぬ。
- テーマが自分に関することでわかりやすかったこと。
- 聞き取りの力がつく。
- 人の考えに気付くべきものがあつた。
- 文の構成についてなど将来も役立ちそうなこと。
- 英語でのスピーチができるようになった。
- 英語を聞く力がついた。
- 物事の両面を考える機会をもてた。
- 班内のコミュニケーションが活発になった。
- チームごとなので責任感ができ、サボることなくまじめにできた。
- 聞くことで英語のリスニング力があがった。
- 生徒が意欲的だった。
- 自分の役割を責任を持ってやれたこと。
- リスニング力が少しついた。
- 英語で話すきっかけができた。
- 英語がうまくなる。
- 周りの学生から吸収すべきことがある。
- 授業の方針がはっきりしていたこと。

25. この授業の悪かった点をあげてください。

- 聞き取りが苦手だから、英語での説明や解説が理解できなかった。
- グループにより温度差がある。
- 英語力の差が大きくなること。
- ディベートの間の時間が少ない。
- ディベートが難しかった。日本語でも難しかったと思う。
- 英語自体の発音、文法ミスはノータッチだった。
- 文法的に間違っているままになる。
- シラバスが英語だった。
- 時々先生が何を言っているのかわからなかった(英語なので)。
- 一回も日本語でディベートしなかったこと。
- ディベートのテーマがよくなかった。考えにくい。
- 次に発表する人までの時間がもう少しほしい。
- とても聞き取れないところもあったので大変だった。
- 準備時間がみじかかった。
- もっと解説をききたかった。
- 考える時間が短い。反論が大変だった。
- 文法等に自信がないときに自信がないまま発表しないといけないことがある。
- ディベートの回数が多いこと。
- 講義がもう少しあっても良かったと思う。
- スピーカーの言ったことが聞き取れなかったとき対応に困った。
- スピーチがあるので体調が悪くても欠席できなかった。
- 勝敗が成績評価に影響すること。
- やはり難しかった。
- 反論が難しすぎる。
- 発表態度は見られていなかった。
- 担当がない日はなにもしないでおわる。
- コメントまで英語だった。
- テーマが難しいので、同じようにディベートがおこなわれることが多かった。
- 相手の英語が聞き取りにくい。
- 三分間という時間が短く感じた。
- リスニング力がないとほとんどわからない。
- ~すれば勝てるという基準がわかりにくかった。
- 論題にあたりはずれが。
- 先生の説明は英語で理解しにくく、日本語の補足がもう少しほしかった。
- 事前に書いたことをただ読むだけだった。
- 内容が似たようなことを繰り返して議論しているように感じた。
- 努力でどうにでもなる気がしなかったこと。
- 準備がかなり大変。

- 月に一度何もしなくていい月がある。四人一組で三人発表なので。
- 対戦チームの組み合わせが決まりきっていた。
- 論を展開しにくい議題があった。
- 論題が難しかった点。
- 専門用語を使いすぎるので、相手の内容を把握しづらかった。
- 一週間の準備期間ではたりない。
- 原稿作りはかなりきつかった。
- ほかの人もチームを組みたかった。
- 相手の意見を聞き取り、かつどう反論しよう表現するかという点。

26. ディベートをする上で難しかった点、またもっと学びたかった点は何ですか。

- わかりやすい英文の作り方。
- 自分のいいことを英語で表現して、コレをさらに具体例などを挙げて広げていくことが難しかった。
- スピーチの持ち時間が案外長いのもっと話を膨らませるべきだった。
- 反論やまとめの役になったとき、相手チームの意見を聞いて、すぐに考えて発表しなければいけないのが大変だった。
- やはり反論とかまとめのスピーチが難しかった。相手の意見を聞いて柔軟にそれに対応しなければならぬという点においてです。あとディベートの間の時間が短いんじゃないかと思いました。
- 反論が特に難しかったです。英語の発音などは学びたかった。結論、序論の書き方は何となくですが理解できました。ディベートの力は必要だと思うので、もう少し学びたかった。人前でしゃべるのには抵抗が少しだけなくなりました。
- 難しかったこと:自分の言いたい内容をただしく相手に伝えること。自分の書いた原稿をみんながもっていれば理解できたと思う。
学びたかったこと:手本となるディベートをみたかった。
- 反論が難しい。なぜかといえはすべてを聞き取れるわけではないし、二分で整理するのは少し厳しい。班のみんなで時間を合わせて調整することが難しく、展開がばらばらのままで発表することもあった。
- 初めてのディベートでしかも英語だったため相手側の意見を上手に聞き取ることが難しかった。
- テーマが難しかったのもっと学生に関わりのあるテーマにすればもっとたくさんの意見がでてよかったのではないかと思う。
- 日本語の表現を英語にするのが難しかった。
- 相手の意見に反論するのが最も難しかったと思います。
- とにかく相手の言った内容を理解することが一番難しかった。これができないとまともなディベートはできない。もっとリスニングの力をつけられたらいいと思う。
- サマリーが難しかった。
- 日本語で調べたことをわかりやすく英語で表すのが難しかった。
- 反論など、すぐに文章を作らなければならない点。
- 紙答案のような学生から先生への英語ではなく、学生から学生に自分の意見を主張するのでシンプルにシンプルにと心がけなければならなかったが、これがまた難しい作業だった。
- 実際のディベートの例を視聴覚機器を使い、説明してもらいながら学習する。
- 相手の話を理解することが私には一番難しかった。講義でスピーチの文章の適切な構成を学びたかった。

27. この授業を改善するために、要望することをあげてください。

- スピーカーが言った事を要点だけでも日本語で直後にまとめてほしい。反論がもっと上手にできたかもしれない。
- メンバーに偏りがあると苦勞するので、時々シャッフルしてほしい。自分が問題を提起して発言を促しても自分のグループの誰も何も反応しなかったのかなりつらかった。
- どのようにするのか実際に例を見せてから始めたほうが良いと思います。また序論、反論、結論の言い方を最初の二、三時間で説明しておいたほうが良いと思います。テストがないので毎回きちんと出席を取ったほうがよいです。ディベートとディベートの間の時に欠席していた人もいました。四人一組ならディベートが長くなるかもしれませんが、全員が発表できるように役割分担したほうがみんな
- 毎週きちんと英語を勉強するので力がつくと思います。肯定、否定を一回ずつやる必要はないとおもいます。
- せっかくなので英語そのものにも修正をくわえてほしい。使った原稿を配って次の時間に役立ててほしい。
- 要点の整理表現の仕方、構成など。態度も評価にいらしてほしい。
- 準備時間を三分にしてほしい。
- ディベート後の先生のコメントが英語でしたのでそこは日本語で言ってほしいです。
- 日本語でもディベートとかやったことはなかったけど、この授業はかなり興味もてた。まわりの人と仲良くなれた。
- 一度日本語でディベートをしてみたら、後半うまくいくと思います。
- まとめ担当の人は今までの議論をまとめなくてはいいないのでそのための時間がもっとほしい。
- チームの入れ替えをしてもおもしろいと思います。
- もう少し時間がほしい。
- このディベートの中に戦略的な要素がほとんど入っていなかったものでそういうものをもっと活発にしていってほしいかなと思います。(先生・TAさんはうながしていたものの...)
- とてもよかった。今後につながるものだった。
- 講義部分を増やすこと。

28. この授業を受けた感想

- 今までにない授業形態でよかった。
- 人前で話すのが苦手でスピーチとが苦痛だったが、今思えばもっと楽しんでディベートすべきだったのではないかと思う。ディベートがどんなものかがおおむねわかったので、次に機会があればそのときは楽しんでやりたいと思う。
- 勝敗が成績に関係するのはいやだったが、関係するからこそ皆やる気を出してがんばったんだろうと思う。試合形式だったので、他の講義の授業とは違うスタイルで楽しめた。
- 一番最初に授業を受けたときに思ったことは、ディベートは日本でもしたこともなくしかも難しいというイメージしかないのに、ましてや英語でなんてできるはずもない、でした。講義では準備がとても大変で、最後まで大して慣れることもできなくて大変でしたが、その分得られたものは大きいのではなかったかと思えます。今では達成感みたいなを感じます。
- 最初は人前で発表するのがいやだったが、さいごのほうにはなれた。ビデオが取れるなら毎週次の時間に復習をしたほうが良いと思います。授業自体は少人数で楽しかったのでよかったと思います。
- 新鮮で、学ぶことも多く、準備のためによく英語に触れた。ただ、二回目以降は多くの人が同じ議題で前日に別のチームが言った意見を我が物としていたり、インターネットの意見を自分のものにしていたのが残念。ディベートとして自分の意見を闘わせる純粹な場ではなかった。
- 初めて挑戦したが、これからのことを考えるといい経験になった。英語を聞きながら反論を考えて書き取るのが難しかった。
- 最初の頃に比べると、相手の意見をまとめるのは良くなったと思う。初めてやってみて難しかったが、やってよかったと思う。
- とても興味深い内容で、授業に参加しやすかった。ディベートのやり方がわかりやすくてよかった。
- 人前で英語を話すというとても貴重な体験でおもしろかったともいます。
- 最初の方は全く要領がわからずたいへんだったが、慣れてくるとそれほど負担を感じなくなった。今まで自分の知らなかったこともた
- たくさん知ったのでかなりためになったと思う。
- ディベート形式で授業をやったので、英語の発音や聞き取りが少しうまくなったので良かった。
- 英語で話すきっかけができて楽しかったです。予習は調査に時間がかかって大変でした。伝えることの難しさを感じました。
- この授業を受けて英語力がついたと思います。自分の思っていることを簡単な英語で表現することができるようになってよかった。
- やたら難しい単語とか文法を知っている人が授業を斜に構えてうけるのかなと思いきやそんな学生はゼロでとてもやりやすかった。

資料 8. Web 版ディベート発表例 (英語)

2001 Fall Wednesday 2nd Final Debates Group 1 Group 2 Group 3 Group 4 Group 5 back to groups & propositions back to syllabus Note: Opinions expressed in these debates (in fact in any academic debate) are NOT necessarily the students' personal beliefs or opinions. The students represent the assigned sides of the resolution and try to present possible arguments.	Group 1 Resolved: That Japan should abolish death penalty. <table border="1"> <tr> <td>AFF:</td> <td>1LA10XX</td> <td>1LA10YY</td> <td></td> <td>NEG:</td> <td>1LA10PP</td> <td>1LA10QQ</td> <td>1LA10RR</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1AC</td> <td>1NC</td> <td>2AC</td> <td>2NC</td> <td>1NR</td> <td>1AR</td> <td>2NR</td> </tr> </table> Students' Evaluation (Group 2): <table border="1"> <tr> <td>1LA10AA</td> <td>1LA10BB</td> <td>1LA10CC</td> <td>1LA10DD</td> <td>1LA10EE</td> </tr> </table>	AFF:	1LA10XX	1LA10YY		NEG:	1LA10PP	1LA10QQ	1LA10RR		1AC	1NC	2AC	2NC	1NR	1AR	2NR	1LA10AA	1LA10BB	1LA10CC	1LA10DD	1LA10EE
	AFF:	1LA10XX	1LA10YY		NEG:	1LA10PP	1LA10QQ	1LA10RR														
		1AC	1NC	2AC	2NC	1NR	1AR	2NR														
	1LA10AA	1LA10BB	1LA10CC	1LA10DD	1LA10EE																	
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="383 436 790 504"> Intensive English I Group I </td> <td data-bbox="790 436 1404 504"> Prof. Narahiko Inoue Second Rebuttal speech </td> </tr> <tr> <td data-bbox="383 504 790 1131"> NEGATIVE Affirmative team refers to "Oumu Shinrikyo", which is a religious group in Japan, and "Chikatetsu Salin Jiken". The case is a terrorism which the cult used a poison gas and killed innocent people in a subway. The case made national people scared too much. When we think the case and terrible murders the group committed, what we want the government to do is to get rid of our worry and make us feel justice. That is to say, the government have to keep the social order. Committing death penalty means the government's attitude that people who committed a serious crime have to take a reasonable punishment. Our fundamental human rights are defended in a safe social order. According to a public opinion poll, 60 percent of people answered "Death penalty should be continued." You say that the man who takes death penalty is innocence. It is true. But there is a different problem. The man who takes death penalty keeps order of law. So they takes death penalty. They have no bad intention. But murderers kill others with their bad intentions such as disliking a man or hating a man and so on. They corrupt the order of law. To recover the order of law, it is natural that criminals are killed by the government. Even if criminals who commit serious crime are punished by life imprisonment, criminals could live freely in society. This is because the government often reduces criminals' punishment, which is called "Onsha" or "Taisha". This is performed when celebrate things such as Japanese prince, who is called "Koutaishi" being born occur. So, there is a probability that criminals can live freely, which makes innocent people fear. For people to live peacefully, criminals who commit serious crime should be killed by the government. On top of that, if criminals who commit serious crime are killed by the government, victims' sorrow may be reduced. Certainly, it isn't beneficial for economy that criminals are killed by the government. But, victims' sorrow can't be reduced forever if criminals are alive. So, death penalty should be performed by Japan. </td> <td data-bbox="790 504 1404 1131"></td> </tr> </table>	Intensive English I Group I	Prof. Narahiko Inoue Second Rebuttal speech	NEGATIVE Affirmative team refers to "Oumu Shinrikyo", which is a religious group in Japan, and "Chikatetsu Salin Jiken". The case is a terrorism which the cult used a poison gas and killed innocent people in a subway. The case made national people scared too much. When we think the case and terrible murders the group committed, what we want the government to do is to get rid of our worry and make us feel justice. That is to say, the government have to keep the social order. Committing death penalty means the government's attitude that people who committed a serious crime have to take a reasonable punishment. Our fundamental human rights are defended in a safe social order. According to a public opinion poll, 60 percent of people answered "Death penalty should be continued." You say that the man who takes death penalty is innocence. It is true. But there is a different problem. The man who takes death penalty keeps order of law. So they takes death penalty. They have no bad intention. But murderers kill others with their bad intentions such as disliking a man or hating a man and so on. They corrupt the order of law. To recover the order of law, it is natural that criminals are killed by the government. Even if criminals who commit serious crime are punished by life imprisonment, criminals could live freely in society. This is because the government often reduces criminals' punishment, which is called "Onsha" or "Taisha". This is performed when celebrate things such as Japanese prince, who is called "Koutaishi" being born occur. So, there is a probability that criminals can live freely, which makes innocent people fear. For people to live peacefully, criminals who commit serious crime should be killed by the government. On top of that, if criminals who commit serious crime are killed by the government, victims' sorrow may be reduced. Certainly, it isn't beneficial for economy that criminals are killed by the government. But, victims' sorrow can't be reduced forever if criminals are alive. So, death penalty should be performed by Japan.																		
Intensive English I Group I	Prof. Narahiko Inoue Second Rebuttal speech																					
NEGATIVE Affirmative team refers to "Oumu Shinrikyo", which is a religious group in Japan, and "Chikatetsu Salin Jiken". The case is a terrorism which the cult used a poison gas and killed innocent people in a subway. The case made national people scared too much. When we think the case and terrible murders the group committed, what we want the government to do is to get rid of our worry and make us feel justice. That is to say, the government have to keep the social order. Committing death penalty means the government's attitude that people who committed a serious crime have to take a reasonable punishment. Our fundamental human rights are defended in a safe social order. According to a public opinion poll, 60 percent of people answered "Death penalty should be continued." You say that the man who takes death penalty is innocence. It is true. But there is a different problem. The man who takes death penalty keeps order of law. So they takes death penalty. They have no bad intention. But murderers kill others with their bad intentions such as disliking a man or hating a man and so on. They corrupt the order of law. To recover the order of law, it is natural that criminals are killed by the government. Even if criminals who commit serious crime are punished by life imprisonment, criminals could live freely in society. This is because the government often reduces criminals' punishment, which is called "Onsha" or "Taisha". This is performed when celebrate things such as Japanese prince, who is called "Koutaishi" being born occur. So, there is a probability that criminals can live freely, which makes innocent people fear. For people to live peacefully, criminals who commit serious crime should be killed by the government. On top of that, if criminals who commit serious crime are killed by the government, victims' sorrow may be reduced. Certainly, it isn't beneficial for economy that criminals are killed by the government. But, victims' sorrow can't be reduced forever if criminals are alive. So, death penalty should be performed by Japan.																						
Evaluation ID: 1LA10AA Name: Hanako Kyudai																						
Group I observed: Group I Resolved: That Japan should abolish death penalty. My decision is that the winner is the negative team. Reasons for the decision are following. First, the meaning of the first affirmative constructive speech is not being able to understand. But negative team has plain speech. Second, negative team answers the affirmative's question; "Does the death penalty really deter violent crime?" in second constructive speech and first rebuttal speech with specific examples. These are persuasive. Against it, affirmative team argues that death penalty doesn't prevent crimes in second rebuttal speech. But there are no reasons about it. Affirmative's argument is weaker than negative one. Third, the negative team is good at rebutting. Negative team rebuts most affirmative's arguments. It can be seen in first rebuttal speech and second rebuttal speech. But affirmative team doesn't rebut them. From this, the negative team is stronger than affirmative team. Forth, the affirmative team has no specific examples. Its most opinions start with "I think". It is weak as argument. With more reasons and specific data, it will be more persuasive. Because of the three reasons, I decided the winner is the negative team. Negative team's rebuttal speech is good. And its reasons are persuasive. These are good points. Affirmative team's new way to solve this problem is good. But it has few persuasive. Affirmative team should write more reasons of its opinions and specific data. If it does so, its opinions will be stronger.																						

* フレームは九州大学六本松地区サーバーの筆者のサイトにある：

<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/2001f-wed2/index.html>. 各スピーチと評価報告はそこからLaputa Projectサーバー<http://laputa.rcedu.kyushu-u.ac.jp:8000/3d-ies/userDir/>にある学生のファイルにリンクを張っていた。(現在はサーバー停止)。評価文は実際のサイトではスピーチ同じフレームに表示される。上の表示例では個人情報の削除など若干の変更を加えている。英文は原文のまま、訂正などは加えていない。

付録6 ディベート講座配布資料

第11回日本語教育実践講座「ディベートの指導と評価」

九州大学 井上奈良彦

2006年9月7日、8日 交流協会高雄事務所主催

ディベートを指導している日本語教師を対象に、実際の試合を通して指導方法や評価方法を体験してもらい、問題点を参加者と講師が一緒に考えます。

テキスト： 「ディベート入門」（井上）（付録6）

「全国大学生日本語ディベート大会ルール」（交流協会）（本報告書では省略）

論題資料： 「引用集」（関口先生作成）（本報告書では省略）

参考： 「日本におけるディベートの方法－ESSにおけるアカデミック・ディベート」（井上奈良彦）（付録7）

1 時間目 「日本語教育におけるディベート」（講義→ディスカッション）

ディベートの基本確認

ディベートの長い過程。議論法。

何のためのディベートか

準備分析型

即興型（パーラメンタリー）

ESSの教訓

授業でのディベートと大会参加

皆さんの問題意識は？

2 時間目 「ディベートの準備」（講義→作業）

争点の発見

争点をどう提示するか

肯定側ケース

否定側ケース

メリット・デメリット

スピーチの書き方

全体構成

個々の論点

証拠の参照と引用

3 時間目 「ディベートの評価方法」（講義→ディスカッション、またはビデオで試合を見て判定）

評価と判定

授業と大会

判定の基本原則

論証と反論の責任（一般）、肯定側の立件責任、否定側の立件責任？（推定の働き）

個人の考えを一時停止（したつもり）、フローシートに何を書くか

諸問題

聞き取れないスピーチ、証拠資料の有無や質、質疑応答の内容、「新しい」議論の考え方

論題分析用紙

論題の解釈「日本は原子力発電をやめるべきである」

用語の解釈（定義）

「日本」

「原子力発電」

「やめる」

論題全体の解釈（具体的プランの可能性）

発展課題。代替発電の提案はできるのか
（プラン実施の仮定（Fiat）と論題充当性（Topicality）の問題）

争点の発見

現状の害（原子力発電の悪い点）

どの程度深刻か、すでに生じているのか、「危険性」の場合の評価は

将来の利益（原子力を止めることでの効果）

内因性・固有性（害の責任、利益は原子力を止めないと生じないのか）

プランの実行可能性（技術、資源、人員、予算。実行を妨げるものは）

プランの解決性（所期の効果が生じるか。効果の発生を阻む要素）

プランの弊害（新たに生じる弊害（副作用）、現状の良い点で失われるもの）
深刻さ、固有性

肯定側ケース・アウトライン	否定側からの反論
I.	
II.	
III	

否定側ケース（不利益・弊害の争点）アウトライン	肯定側からの反論
I.	
II.	
III	

ディベート大会における判定について

ディベート、特にディベート大会の参加者にとって判定とそれに伴う勝敗は大きな関心事である。判定が公平でないと感じることも有るだろう。私自身、学生時代に出場した大会で自分たちのチームが勝ったと信じていて負けた試合を、20年経った今でも覚えている。（「自衛隊を増強すべき」という論題で否定側に立ち、増強を正当化できるだけの日本に対する脅威が無いというような論点を展開していた。）先日の JDA 主催の春の大会でも判定や審査基準に関する意見がいろいろ出ていた。そこで、ディベートにおける判定について少し考えてみたい。

まず、人間が日常のことばを用いて賛否両論が可能な論題を議論するディベートにおいて、判定が完全に客観的だとか 100 パーセント信頼性がある（何回繰り返しても同じ判定が出る）ということはないことを確認したい。ディベートにおける「証明」は数学や形式論理学の証明とは違って、ある主張に対して「教養有る一般人がおそらくそうであろうと納得できる」証拠と理由付けを提示することである。そういった主張やそれに対する反論が複雑に組み合わさって一つのディベートの試合を作っているのであるから、あいまいなところがどうしても有る。それを人間である審査員が聞いて理解し解釈し即座に判定を下すわけであるから文字どおり完全な判定など有り得ない。また、だからこそディベートは面白く奥が深いのではないだろうか。

審査員は「説得」されるのであり、証明が正しかったかどうかを判定しているのではない。競技としてのディベートを他のゲームやスポーツの試合と比較してみよう。ディベートの審査員は野球の審判とは違う。野球なら、ある打球か安打かどうか、得点が有効かどうか、最終的に何点対何点でどちらのチームが勝ったかは、ほぼ客観的に判定できる。ディベートはフィギュアスケートなどの演技審査や格闘技の判定に少し近いだろう。立論何点、反駁何点、と点数をつけていって合計するような場合はよく似ている。全体の議論の流れを考慮して、「肯定側は論題を証明したか」とか「メリット・デメリットの比較」、といった基準で判定を出す場合は格闘技で一方を「優勢」とするのに似ている。そこに一定の基準は有るが、審査員の「解釈」が不可避である。

このようなディベートの試合の判定に対して、ディベーターはまずそれを受け入れなければならない。それが競技の掟である。その上で、可能であれば審査員からどのような理由で判定が下されたのかを聞き、どのようにすればより良いディベートができるのかを助言してもらうのが良い。また、ディベーターはどの審査員にも自分たちの議論を意図したように理解してもらうために説明に工夫しなければならない。審査員によって審査哲学といったものが異なるのもやむを得ないことであるが、審査哲学が異なっても審査員の判定が一致する率は非常に高いという研究も有るようである（出典が手元に無いことをお許し願いたい）。

審査員ももちろんより良い判定をするために努力しなければならない。まず、試合の間、ディベーターの発言をよく聞き必要なメモ（フロー）を取るのは当然であろう。さらに、ディベートにおける議論の性質について理解を深めたり、論題についての背景知識を身につける努力も必要である。その上で、試合ではディベート理論や論題についての自分の考えにこだわらずにそのディベートで提示された議論にそって判定を下したい。「こう言えばもっと強い議論になるのに」ということを理由に判定を下すのではなく、判定はあくまでも提示された議論の範囲で行い、改善点は試合後にディベーターに助言するようにしたい。また、判定は結果だけではなく判定に至った経緯や理由をわかりやすくディベーターに伝える工夫をしなければならない。

大会主催者は、時間や人的経済的条件が許す限り、予選の試合数を増やしたり、一試合に複数の審査員を当てるようにする方が良いだろう。予選の試合を増やせば、せっかく参加したチームがより多くのディベートを経験することができる。また、大会の数が増え、いろいろな地域でいろいろな時期に開催されれば、ディベートの機会が増え、ディベーターも一つの試合の勝敗にそれほどこだわらなくてもよくなるだろう。

まとめると、ディベートの判定に「完全」なものには有り得ないということを理解した上で、ディベーターも、審査員も、大会主催者も、より良いディベート、より良い判定を目指して努力していかなければならないということである。

（井上奈良彦. (1999). 「巻頭言」 『日本ディベート協会通信』 第十四巻第 2 号 <http://www.kt.rim.or.jp/~jda/n-letter/v14n2.htm>）

フローシート用紙の例（縮小版）

[illegible]

付録7 「日本におけるディベートの方法—ESS におけるアカデミック・ディベート」

(博士論文要約)

Inoue, Narahiko. 1994. *Ways of Debating in Japan: Academic Debate in English Speaking Societies*. Ph.D. Dissertation, University of Hawai'i at Manoa, Department of Linguistics. UMI Order Number 9519451. を要約したものである。

2004 年時点での注記

すでに執筆から 10 年以上が経過しているので、その後日本のディベート界に生じた種々の変化は反映されていないことを注記しておく。また、ここに紹介する日本の状況は、アメリカの高校生の政策ディベート界にも多くの類似する現象が見られ、NDT という「中央文化」が周辺(?)へ伝播するという観点からも興味深い。(参照: Fine, Gary Alan. 2001. *Gifted Tongues: High School Debate and Adolescent Culture (Princeton Studies in Cultural Sociology)* Princeton Univ Press. ISBN:069107450X)

要旨

この論文は、日本人学生の英語ディベートをコミュニケーションの民族誌において用いられる言語学的方法論によって分析したものである。著者の主張は、日本における英語ディベートが話し言葉と書き言葉両方を用いた言語コミュニケーションの一形態であり、ディベート界と呼ばれる目的志向の言語共同体の中で行なわれ、その成員がディベートにおける独特の話し方を共有している、というものである。そこでのディベートの方法は英米のアカデミック・ディベートを取り入れ日本に適応させたものである。

論文の資料は多岐にわたり、著者が指導者としてディベート活動にかかわってきた中で集めたものである。そこには、ビデオ録画したディベートとそれを文字化したもの、スピーチの原稿、学生が作成したディベートの手引き書、フロー・シートと呼ばれる試合中のディベーター及び審査員のメモ、などに加え、ディベート界という共同体の部内者である著者の知識も含まれる。

第1章 序論

この章では全体の主題を紹介し、研究の動機、ディベートの概略、論文の構成を記述している。

第1節では、上記の論文全体の主張をさらに次の6点に分けて詳述している。

(1) ディベートは口頭で行なわれる部分が不可欠であるが、原稿やフロー・シートと呼ばれる試合中のメモという書き言葉なしには、ディベートという言語活動は存在し得ない。

(2) 学生が行っているディベートを理解するにはディベート界という共同体の文脈が重要である。

(3) ディベート界という共同体は地域社会を中心とする一般的な言語共同体とは異なり、コミュニケーションの方法を共有する学会などのような目的指向型の共同体である。ここでのコミュニケーションの特徴は、議論や英語の学習といった目的よりもゲームにおける勝利という直接的な目的によって規定されている部分が大きい。

(4) ディベート界の成員はディベートにおける独特の話し方の能力を習得するのであり、重要な言語的特長としては、議論に用いられる発話行為や議論の談話構造がある。また、英語ディベートにおける英語は、建前は別として実際上はそれ自体が学習の目的ではなくディベートを行なう手段として用いられていることが重要な点である。

(5) ディベートの方法はアメリカの教育ディベートを取り入れたものだが、それは日本の伝統的なレトリックとも異なり、ディベート界という共同体の目的に合うように独自に発展したものである。

(6) ディベートの分析は言語や言語学の本質の理解に貢献する点がある。たとえば、話し言葉中心の言語観への挑戦、話のメタ言語的範疇、特に日本語の語彙体系における「ディベート」の位置付け、議論の普遍的な談話構造の可能性、などである。

第2節では研究の動機を3点に分けている。まず、著者が自分自身のディベート活動や言語学の研究からどのようにこの研究にたどり着いたかという個人的動機を述べている。次に、この研究が言語学

特に民族言語学や民族誌的研究に貢献できるかという学問的動機を説明している。ディベートはその公開性から網羅的にデータを収集することが比較的容易であるため、実際の言語使用の研究に適している。最後にこの分析が、ディベートの指導や競技ディベートの改善、さらにはディベートをディベート界の外へ紹介するといったことにいかに貢献できるかという教育的動機付けを述べている。

第3節では、この論文で扱っている特定の種類のディベートの概略を説明している。トーナメントではシーズンを通して同一の政策論題についての試合が多数行なわれる。参加チームは試合毎に肯定側と否定側を入れ替えて擁護し、審査員が判定を下す。1試合には、各チーム2回の立論と2回の反駁という時間が決まったスピーチがあり、各立論の後には相手チームからの反対尋問がある。肯定側第1立論は事前に完全な原稿を準備し、その他のスピーチはブリーフと呼ばれる準備書面を組み合わせる形で準備する。試合中は出場者も審査員もフロー・シートと呼ばれる形式で議論を記録しスピーチの準備や判定の基としている。

第4節は、論文の構成を紹介している。この第1章の後、第2章は研究方法と先行研究の概観、第3章はディベートの試合とトーナメントの概略記述、第4章は西欧特に英米と日本のディベートの伝統および日本における西欧流のディベートの導入の歴史、第5章はディベート界と呼ばれる共同体の記述、第6章は証明・攻撃・防御という発話行為の分析、第7章は議論の談話構造、第8章はゲームにおける勝敗の認識方法、第9章は結論としてディベートにおける複数の目的の葛藤を論じた後、コミュニケーションの要素をまとめ、さらにこの論文から得られる言語学や教育への貢献をまとめている。

第2章 研究の背景

本章は、研究方法と先行研究の概観している。

第2節において、このディベートの研究が言語学の範疇に入ることを正当化している。まず、Dell Hymes や Fillmore の言語学の定義を援用し、言語が作り出す様式の一つであるディベートは言語学で取り扱うべき対象であることを論じている。次に、ディベートは言語がその他の社会的要素との関係の中で用いられている現象であり、特に社会言語学の対象であることを強調している。

第3節においては、ディベートの分析にはことばの民族誌（特にさらに広義のコミュニケーションの民族誌）が有用な研究方法であることを述べている。特定の集団内で観察できるコミュニケーションの様式を適切に記述し解釈するには、その集団の内部者の知識というものがことになる。民族誌的手法によって実際の言語使用を対象とする研究方法は、理想化された抽象的な構成概念を扱うチョムスキーのような言語研究と明らかな対比をなしている。

第4節においては、議論とディベートに関する先行研究を種々の分野において取り上げ、代表的な研究を紹介している。対象としている分野は、哲学とレトリック、スピーチ・コミュニケーションと議論学、談話分析、社会言語学、会話分析、子供の議論、文化人類学、法律関係の談話研究である。

第5節においては、日本のアカデミック・ディベートに関する研究を紹介している。研究論文は議論法の文化比較（特に日米比較）が多い。また、ディベート指導者が教育目的で書いた記事が『ディベート・フォーラム』という雑誌に多数あることも指摘している。

第6節では、研究に用いた資料を、著者の共同体部内者としての内省、参与観察、録音・録画と文字化資料、ディベート参加者の準備書面・メモ・手引書など書かれた資料、に分けて説明している。

第3章 ディベート大会の概要

この章は、典型的なディベート大会の中の1試合を想定して記述し、必要に応じて変異に触れている。

第2節では、大会が始まるまでに、参加者が周到な準備を行う様子を記述している。当該シーズンの論題が発表されると、論題を分析して肯定側の立件内容を組み立てるためにメンバーで話し合ったり図書館などで資料調査を行う。分析が進むとスピーチの原稿やブリーフと呼ばれる賛否両方のいろいろな議論を想定した準備書面を用意する。スピーチやブリーフはアウトラインとそれぞれの論点を擁護する引用資料で出来上がっている。準備が進むと練習試合が、部内・部外で行われる。

第3節では、大会会場への移動と登録について述べている。チームは大量の資料を携えて週末に行わ

れる試合会場に行く。遠方のチームは宿泊することになるが、タイプライターなどを持ち込んで試合直前までブリーフ等を作っているチームもある。当日、会場では受付が行われ、各審査員の「審査哲学」と呼ばれる審査基準を述べた文書などが配布される。

第4節では、開会式の模様を記述している。開催団体代表（通常は学生）の挨拶が行われたり、予選の対戦表が配られたりする。参加チームの規模や儀式的要素軽重の変異に触れている。

第5節では、予選第1試合を記述している。試合会場となる教室の机の配置や参加者の着席位置を図示している。試合開始に先立って、審査員が入室し、参加者の自己紹介などがある。司会者が試合開始を宣言し肯定側第1立論の話者が呼ばれる。話者は原稿を早口で読み上げ、審査員や相手チームのメンバーはそれをフロー・シートと呼ばれる形式でメモにとる。タイム・キーパーが1分ごとに残り時間を表示し、制限時間になると机をたたくなどして知らせる。話者は原稿の途中でも読むのを止める。読み終わると原稿を否定側のチームに渡すことがある。スピーチの後、反対尋問が行われ、否定側の第2話者が肯定側の第1話者に尋問をする。否定側の第2話者はその間に次のスピーチの準備をしている。以下、試合中の準備時間、肯定側第1立論、双方の第2立論、双方の反駁スピーチ、試合後の相手のルール違反申し立て、審査員の口頭での講評について記述している。

第6節では試合後に審査員が審査員室で判定を出す様子、第7節では予選後の準々決勝進出チームの発表、第8節では2日目の決勝トーナメントの様子、をそれぞれ記述している。

第4章 ディベート伝統

この章は英語の *debate* という概念と対応する日本語の概念（討論、ディベートなど）を比較し、日本でそれらがどのように扱われてきたかを論じている。これは、日本の学生英語ディベートが置かれている歴史的文化的文脈の一つの観点を提示するものである。西欧と日本におけるレトリックの伝統に関する研究を概観すると、日本では西欧社会の伝統に対応する論理的議論法の訓練の伝統を欠いているようである。英米流のディベートを日本社会へ導入しようという試みは何度かあったが、英語クラブでのディベート以外成功していない。1980年代半ばから新たなディベートの流行がメディアなどで見られるが、これが定着するかどうかは定かでない。

第2節では、まず、英米における *debate* の意味、単語の辞書的定義、アメリカのディベート教科書での定義を参考にまとめている。次に、実社会の意思決定としてのディベートと対比して訓練として行われるアカデミック・ディベートの特質をまとめ、その価値を知的訓練、コミュニケーション訓練、望ましい態度の養成、の3点に要約している。次いでアカデミックディベートの歴史を、古代ギリシャのプロタゴラスから始め、特に1800年代以降の英米の大学まで概観している。

第3節では、日本における討論の伝統を、宮廷などの論議と呼ばれるディベート形式の行事、問答所での対決や対問賭呼ばれたような裁判を紹介しつつ、少くとも西洋の規範的観点に見られるような論理的議論法を訓練しようという強い社会的要請には欠けていたことを指摘している。さらに、西洋式のディベートの導入について、16世紀のキリスト教伝来時のラテン語の論争訓練、明治の福沢らの三田演説館の「会議弁」、「文学社会」と呼ばれた勉強会におけるディベートなどに触れている。次いで、第2次大戦直後の民主主義教育の中で登場し短命に終わった「朝日討論会」や、その後の国語教育の中での討論教育（特に日本話しコトバ教育研究会による実践）とその問題点について論じている。

第4節では、カタカナの「ディベート」という語がそれまでの「討論」という語と対比されて日本語の語彙体系の中に組み込まれたかと、それが表す狭義のディベートが従来の討論との違いを強調して用いられるようになった点を指摘している。まず、英語教育分野におけるディベート、次いでマス・メディアにおける「ディベート」という語の使用、1980年代からの新たなディベート関連のイベントの登場、学校の授業での討論やディベートについて論じ、最後に調査対象となった1992年時点では「ディベート」という語はまだ一般に十分に定着していなかったという暫定的結論を出している。

第5章 ディベート界

本章はディベートにおける言語使用の特徴を理解するには、ディベートを行っている人・規範を作っている人・学習途上にある人を知る必要がある。ここで扱っているディベート界というのは非常に狭い社会であり、そこでのコミュニケーションの特徴は特殊用語や早口などを含めその社会の中でのみ

通用する規範を作り出している。

第2節では、社会言語学における言語共同体 (speech community) と談話共同体 (discourse community) という概念を取り上げ、本論文では談話共同体という概念を区別せず、言語共同体という概念の中で変異要素を組み込みつつコミュニケーションの共有規則と解釈に焦点を当てることを主張している。

第3節では、英語でディベートが行われる課外活動英語クラブ (English Speaking Society--ESS) の組織と内部のコミュニケーションの特徴に注目して詳細に記述・分析している。

第4節では、主として ESS のディベーターとその卒業生を中心として構成されている日本のディベート界について、まず、ESS や連盟や指導者の組織に分析を加えている。全日本英語討論協会を中心に 1980 年代にアメリカの特定のスタイルのディベートを導入した「革命」の再検討、ディベートを扱う団体が「学会」に相当するのかなどかの分析、などを行っている。次いで、ディベーター・コーチ・ジャッジなどの参加者について論じ、試合における選手・審査員・司会の三者のコミュニケーションの規範上の関係を分析している。たとえば、選手は審査員に理解してもらえないと試合に勝てないが、早口や複雑な議論戦術を審査員が理解できない場合、自分が無能であると思われたいという動機が働くことによって審査員は選手を咎めないかもしれない。司会は試合開始などの儀礼的権限を持っているが、しばしばディベートに不案内な学生が務めているため実際上の地位は低く見られている。

第5節では、ディベート活動を通しての英語と日本語の使用、その切り替え (コード交代) がコミュニケーション上の出来事の区切りの標識として機能している点などに分析を加えている。つまり、スピーチや反対尋問などの「公式」活動はすべて英語で行われるが、試合中のチーム内の相談など「非公式」活動は日本語が用いられる。公式活動中でも日本語が挿入される時は、公式活動から非公式活動への一時的転換のような現象が起きる。

第6節では、ディベートにおける特徴的な話し方が、どのような規範意識によって生じ、また、誰がその規範を作り上げているのかについて分析している。現役学生であるディベーターは上級生や卒業生を中心とするジャッジに審査されるのだが、規範は現役学生が作っているという逆説的な関係は、ディベート界の構造的・歴史的事情に影響されている。たとえば、大会は現役学生が運営するため、ジャッジの採用は学生が行い、自分たちが審査してほしいジャッジを招待するという構造がある。歴史的には、スピーチの印象評価が強かったのを改め議論の客観的評価を迫及した結果、試合中に提出された議論の質に対するジャッジの極端な不介入主義的評価方法が台頭した。

第6章 証明、攻撃、防御

ディベートにおいては3つの重要な行為がある。ディベーターは主張を「証明」しようとし、相手はそれを「攻撃」し、それぞれ自分たちの主張を「防御」しようとする。この章では、これらの行為が日本のディベート界において特別な使われ方をしている、それはアメリカのディベートを適応させたものであり、ゲームとしてのディベートで勝利という参加者の直接目的に関係していることを論じている。

第2節では、ディベーターにとっての証明がしばしばエビデンス (証拠資料) の引用という行為に単純化されていること、エビデンスとは出版物に限定されていること、その試合における重要性のために和文英訳などの過程における不正行為などを生んでいることを論じている。

第3節では、相手の議論に対する攻撃を、相手の証明に対する疑問の提出や証拠に対する攻撃と、反証の提示に分けて考察している。ここでは証明責任・反論責任・反証責任の所在や、ジャッジの評価基準の問題、特にタブラ・ラサと呼ばれる不介入主義の審査哲学の問題を論じている。

第4節では、反論された議論に対する防御として、「引っ張り」 (pulling) と呼ばれる既出の議論の繰り返しと、「伸ばし」 (extending) と呼ばれる既出の議論に新しい証拠や観点の導入し発展させる行為について分析している。また、extend という動詞がディベートの中で使われる特有の統語型式について分析している。

第5節では、「新出議論」という概念についての共同体内での解釈を問題にしている。規範的には、反駁のスピーチで大きく論点を変える「新出議論」は禁止されているが、既出の議論を伸ばし発展させることは奨励されている。ここに日米とも学生の誤解が生じ、極端な場合は、反駁のスピーチでは

新しい議論や証拠資料は 全く使えないという解釈が生じている。これと上記タブラ・ラサの極端な審査方法により生じる、議論という弾丸を打ち合うビデオ・ゲーム的ディベートの問題 点を指摘している。

第 7 章 議論の構造

本章は、議論の談話構造を、証明という行為が作り出す一つのスピーチの中の「縦の構造」と、反論の応酬が作り出す複数のスピーチに跨る「横の構造」、に大きく分けて分析している。この構造は、先行の研究で指摘されている日常の議論の 2 種類の構造と対応するところがある。

第 2 節では、縦の構造について、議論の構造を示す「ロード・マップ」と「ナンバリング」と呼ばれる談話標識、議論の時系列関係・並列構造・機能的推論関係・演 繹的推論関係などについて、スピーチと参加者のメモなどの資料を用いて分析し、文化特有の論理構造の問題も検討している。

第 3 節では、縦の構造について、まず、反論の応酬が一つのスピーチの中にどう現れるかを、元の議論の紹介－相手の議論の紹介－反論、というような表現形式元に 分析している。次いで、複数のスピーチに跨る構造を、文字化資料とフロー・シートと呼ばれるメモ用紙から再構築して分析している。

第 4 節では、議論の最も特徴的な単位として、反論の単位（ refutation unit ）と呼ばれるものについて、日米のディベート共同体の中でどのような規範が共有されているのかを、指導手引書や教科書を元に分析している。

これら特有の談話構造とその談話標識は、ディベートの話し方分析の中心であり、書きことばと話しことばの関係など言語学にたいする示唆も大きい。

第 8 章 勝敗は異なる参加者によってどう認識されるのか

ことばを使う出来事（speech event）の目的や結果は複雑な現象である。ディベートにおいて、ディベーターは究極の目的として議論法や英語の学習があったとしても、試合の中での直接の目的は 勝つことである。ジャッジの立場からは、大きな目的は学生に議論法の教育をすることであったとしても、試合での当面の目的は判定を下すことである。一方、ディベートに限らずあらゆるコミュニケーションにおいて、さまざまな要因からメッセージの送り手の意図が受け手に同じように解釈されるということはある ない。競技としてのディベートの試合において特徴的なのは、肯定・否定の両チームは最後まで自分たちが勝っていると主張するので最終的な勝敗について参加 者の解釈が一致するということはありえない点である。本章では、この勝つというディベートの目的が他の要素とどのような相互関係にあるのかを、1 試合の中の論題充当性（ topicality）と呼ばれる特定の争点に限って分析する。

第 2 節では、論題充当性がどういう争点か、教科書的な解釈と実際の学生の試合での使われ方の両方から論じている。もともと、肯定側が政策論題を具体化した計画 案を提出するとき、その計画案が論題から逸脱している場合に否定側が提出する議論であるが、実際の試合では、問題のない肯定側の計画案に対しても否定側が 強引な議論を提出することも多い。

第 3 節では、分析の対象とした姫山杯英語討論大会の決勝戦（試合全体の文字化資料を付録 II に添付）の背景説明を行なっている。

第 4 節では、文字化資料に基づいて議論の展開を記述している。論題は、「日本政府は生医学研究とその医療行為への応用の一方もしくは両方を統制する新しい法律を一つ以上制定すべきである」という 1991 年秋から 1992 年春の両シーズンで用いられた統一論題である。肯定側は患者にガンの告知をすることを法制化する計画案を提出した。否定側は法律辞書を用いて「統制する（ govern）」という語を 'control' という言い換えによって定義し、肯定側の計画案はそれを満たしていないと主張した。肯定側第 2 立論では、一旦一般的な論題充当性防御の準備書面を読み出したが、途中でその議論を破棄し、自分たちの提案する法律は control するものである、という反論を提示した。この争点は次の否定側第 2 立論を除いてすべてのスピーチで扱われた。

第 5 節では、双方の第 2 反駁つまり最後のスピーチを基に、ディベーターの解釈を推定して分析を加えている。

第 6 節では、ジャッジのフロー・シート（試合中のメモ）、バロット（判定票）、ジャudging・フィロソフィー（審査哲学）の相互関係を分析している。フロー・シート上に残されたメモや審査哲学として公表している論題充当性に対する立場、さらに論題充当性に関する判定票に書き込まれたコメントは 5 人のジャッジの間で相違が見られる。

第 7 節では、判定結果に分析を加えている。3 人のジャッジが、論題充当性について否定側が勝ったと解釈していて、そのうち 2 人は、この争点が試合を決めた（voting issue）と書いている。残り 2 人のジャッジは、否定側はこの争点を勝ち取っていないと考えていた。彼らは否定側が論題充当性の議論を十分に証明できなかったと判定したことが、判定理由からうかがえる。

第 8 節では、この分析に基づき、ディベートにおけるコミュニケーションの諸要素の相互関係に触れ、その複雑さを指摘している。

第 9 章 結論

この章では、全体のまとめと、論文から得られる示唆などを述べている。

第 2 節では、ディベートにおける目的の問題をまとめている。今回分析したディベートは、一見コミュニケーション教育や議論教育という公称される目的に惑わされるが、参加者にとっては知的ゲームと考えられていると結論できる。学生はディベートというゲームの世界の中で日常の制約を離れて自分自身が自由にできる知的活動に興味を引かれている。このことによって、一見荒唐無稽と思われる議論の応酬や議論の評価についてのジャッジの介入をできるだけ排除しよう傾向を説明することができる。さらに、議論教育・英語コミュニケーション・友人作りといった、ディベートのその他の目的に触れ、異なる目的の間の競合がもたらす問題点を指摘している。前述したビデオ・ゲーム的ディベートは客観的議論重視の結果の一つであるが、それは英語コミュニケーション能力の向上や議論法の教育といった目的を阻害し、英語クラブという文脈の中では新入生のディベート活動への勧誘を妨げることになっている。

第 3 節では、Hymes の提唱するコミュニケーションの要素に注目して、ディベートにおいてそれらの要素がどのように相関しているのかをまとめた。その要素には、場面、参加者、目的、行為連鎖、調子、手段、規範、ジャンル、がある。ディベートにおける話し方は特有の発話行為や談話構造によって成り立っているが、それは両チームが相反する主張をし審査員が判定を下すというコミュニケーションの場である。その話し方はディベート界の成員が共有するやり取りや解釈の規範によって決まってくる。このコミュニケーションの体系は独立したものではなく、ESS やアメリカのディベート共同体から影響を受けており、さらに、ディベートを始める前に習得している日本語や英語にも影響されている。

第 4 節では、この論文の言語学に対する示唆を述べている。まず、言語学とは何かという問題について、明らかに言語事象であるディベートの記述・分析は、言語学が実際の言語使用を扱わなければならないという立場に組するものである。さらに、ディベートは言語の直線性（発話の時間順序の制約）や話し言葉の書き言葉に対する優位性など、ある種の言語学で想定されていることへの挑戦である。また、本論分の分析が「ディベート」や「討論」など話し言葉の範疇の研究や談話構造の研究に貢献することを示している。

第 5 節では、ディベート教育へのいくつかの示唆を述べている。

第 6 節では、この論文の限界と今後の研究への提案を行なっている。

参考文献（省略）

付録 I 日本におけるディベート論題一覧（省略）

（1950 年から 1994 年までの英語ディベート大会で使用された論題の一覧。この資料を基に 2000 年までの論題が JDA のサイト <http://www.kt.rim.or.jp/~jda/> で公開されている。その後の論題も同サイトで閲覧できる。）

付録 II 第 8 回 姫山杯英語討論大会決勝戦文字化資料（省略）